
桜高軽音部と僕の1年

#Dragon-me

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜高軽音部と僕の1年

【Nコード】

N0182U

【作者名】

#Dragon-me

【あらすじ】

僕、上野連は今年から共学になった桜が丘高校に入学した。そこで出会った軽音部の先輩達。みんなでお茶して、練習して、たくさん思い出作って……。最高の1年にしたいから、僕は今日もギターを背負って準備室に行くんだ。

アニメに必ずしも従順忠実では無いので、そこは重々承知願います。

@ # 5 完結!!

上野 連

名前：上野連うえのれん

生年月日：1993年12月4日

血液型：不明

身長：156cm（唯と同じ。 紬は157cm、 澪は160cmのため二人より背が低い）

体重：54kg

パート：リズムギター

外見的特徴：

やや長めの黒髪、タレ目で童顔。顔はやや丸く小さめ。そのため多くの人から中学生だと思われる（本人は半ば諦めている）。その可愛い顔は、極度の人見知りである澪も普通に接する事ができた程。

ブレザーである制服は学校のポスターに載つけられる程にきつちりと着ている。しかし、冬になってもコートその他の防寒具の類は一切身につけない。私服は常に半袖Tシャツ＋ジーパン＋スニーカー。例え冬でも。

内面的特徴：

男子の中ではおとなしい部類に入るが（あくまでも“男子では”）

、好きな事には全力。意外とセンチメンタル。過去に引つ張られやすく、思い出を大切にする。人一倍の仲間思いで、それがいい方向にも悪い方向にも作用する。音楽は完全な初心者。

ネジマニアで、自分の部屋にはネジコレクションがある。しかも丁寧なショーケースの中に保管されてある。思った事が無意識に口に出てしまいやすい。ツツコむ時は相手が誰であろうと丁寧語を使う。ドジで、良く転ぶ。ちょっと間の抜けた所もある。考え方がややオッサン臭い。かなり非力で、特に握力は律、漣、紬、梓、葵にも劣る。たまに……ではなく結構な頻度で壊れる。

その他：

この物語の主人公。親の転勤でここに引越してきており、一年後に転校する事が既に決まっている。梓とは小学生の時、一時期小学校が同じで、縦割り班でも一緒だった事がある。更に帰るルートも同じで、良く一緒に帰る事が多い。そのためか先輩の中では梓と特に仲が良く、また先輩としてもギターの上手い梓を尊敬している。律の事を軍人なのではないかと本気で疑っている。

深沢 葵（前書き）

注：
“ # 2 整頓！”を全部読んでから見る事をオススメします。

深沢 葵

名前：深沢 葵
ふかさわ あおい

生年月日：1994年1月20日

身長：165cm（部内で一番背が高い）

体重：56kg

血液型：A型

パート：サックス&ベース

外見的特徴：

黒髪を青のゴムでポニーテールに結んでいて、ややツリ目。髪をほどくと濡にそっくりだが、若干葵の方が目が大きい、鼻が低い、髪が短い、やや丸顔。

制服にはこれといった特徴は無いが、私服はワンピースやスカートをよく好んで着用する。

内面的特徴：

ストリートにものを言い、行動に移す積極的なタイプだが、異常なほどの泣き虫（しかしすぐ泣き止む）。好奇心旺盛。よく唯や律と共にハメを外す。順応性が高い。ベースの上手い濡を尊敬している。

一応経験者だが、入部当初ベースの腕は壊滅的だった（サックス

はそこそこ)。左利きではないが、ベースはレフティモデルを使っている。学業成績は意外にも上位10位以内に入る程。運動神経も良い方。突然ネガティブモードに突入する事がある。連をよく振り回す。彼氏に求める絶対条件は身長が15cm位高い事。

その他：

4月末、飛び入りで入部してくる。入部の動機は、友達の後押しと、1年生で一人入部した連の存在があったため。姉がこの学校の2年生にいるようで、姉に連れられて文化祭に行った時に、唯達が1年生の頃のライブを観た。

一部先輩その他の呼び方が独特へ唯↓ゆっぴー先輩 漑↓みー先輩 連↓レンコンヤ。帰り道は漑とほぼ同じ。入部以来、自分の部屋にはAV機器や音楽雑誌が増殖中。幼い頃、両親を事故で亡くしており、今はおばの家で生活している。

1 体験入部！

「みんな、ありがとうー！」

暗い講堂の中に、歓声が湧き上がる。それは、暗い中でライトを浴びている5人の女子高校生に向けられていた。

……どうしてこうも、楽しいんだろう。

男子の僕にとっては歌詞はともかゆかったけども、気がつくともわりと一緒にノリノリになっていて、その疲れが今襲いかかっている。

それに……向こうも楽しそうなんだ。本当に音楽が好きなんだな、というのを感じた。きっとこの部に入ったら、ここで作られる思い出は忘れられなさそうだな。

僕はこの学校に1年間しかいられない。親の転勤でこっちに来て、さらに1年後には元いた場所に戻らなければならない。

だからこそ、ここでの思い出は特別なものにしたい。それには、この部はピッタリのような気がした。

さすがに女子だけの部に僕一人で部活見学に行くのは気が引ける……いや、今年から共学になったから女子だけの部しかないけれど、それだけじゃない。

正直、あんな超メルヘンチックな曲を男子の僕が演奏するのは……。

僕は興味があるという3人の男子を誘って、計4人でその部が活動しているという音楽準備室に向かった。

先輩たちとは別のバンドで演奏したかったからだ。

準備室の前に、二足で立つどこかのうがい薬で見たようなカエルのキャラクターの置物が、“軽音部へようこそ”と書かれた段ボールを首からぶら下げて手招きしている。

「うっ、ますます入りにくっ」

男子その1が弱音を早々吐く。

「スルーしろよ……」

そう言っている男子その2もスルーしづらそうなのですが。

「まあ、とにかく。ここが軽音楽部か……」

中から練習の音は聞こえてこない。休憩中なんだろうか？

「連^{れん}、準備OK？」

一人の背の高い男子その3が僕に聞く。

心臓が高鳴るのを感じつつ、僕は一呼吸置いた。

覚悟は出来た。

「うん」

僕は縦にうなずき、音楽室のドアノブを握って、ガチャリと回した。

しかしドアを押した向こう、僕たちが見た光景は度肝を抜くものだった。

優雅に5人がお茶中。その5人はこっちを見て固まっています。

……あれ、部活間違えちゃったかな……？

「失礼しました」

他の3人が僕を置いて御退室。

「えっ！？ ちょっ……じゃ、じゃあ僕も……」

と戸惑いながらも背を向け外に出ようとしたとき。

「お前だけは逃がさないっ！」

「うわぁっ!？」

誰かにがつちり両肩をホールドされた。てか反応速度早くないですか!？ それに無音で拘束ってあなたどこの軍人ですか!？

「律！」

黒髪のロングヘアで、僕より背の高い女子の先輩がゲンコツでホールドした人の頭をバシーンと。結構本気で殴りましたよ……タ
ンコブ出来ているんですけど。

「強引だろ！」

「いったー……」

僕を押さえ込んでいたのは、明るめな茶髪で黄色のカチューシャ
をしている、いかにも元気そうな女子の先輩。2人とも青いリボン
ということは3年生か。

とりあえず僕は解放された。でも、そのままここを出て行くのは
何か悪い気がして……。

「おいしいです」

一緒にお茶してしまいました。視線が僕に凝縮されて食べづらい
他ありませんでしたが。

とうかこのクッキー一生の内で一番おいしいのかもしれない。
食べて良かった品物なんだろうか……。

……本当にいいんですか？ 恐ろしく高価な気が……

「本当に！？ ありがとう！ そうだ、名前はなんて言うの？」

茶髪で、ピンを留めている3年生の女子の先輩が、興味津々というキラキラした目で聞いてきた。

……この目で見るとやめてもらえませんか？ あと他の先輩がツツコミたい顔をしているんですけど。『お前は出してないだろ！』ってツツコミたい顔をしているんですけど。

まあそれはスルーで。

「^{うえの}上野連です」

「へえ……連くんかあ。私は平沢唯。よろしくね！」

と、握手を求める平沢先輩。

……こういう時って、握手するのが普通ですか？

多少照れ臭いけど手を差し出すと、がっちりと僕の手を握って上下にブンブン振った。

……机に肘ぶつけそうなんですけど……っ！

「痛っ！」

ガシャン、と机の食器類が音を立てると同時に肘がピリッとしびれた。……案の定。

「痛いよー」

平沢先輩もぶつけたんですか。

「唯先輩……」

やけに長いツインテールの女子の先輩があきれている。赤いリボン、つまり2年生。僕のこととは心配してくれてないのがちょっと……。

いや、もし僕が平沢先輩だったら新入生を先に心配される方が悲しい……つまりこれは正常ですね。

教訓。机越しに握手をするべからず。

2 自己紹介！

「おっしゃあ！ 次は私だな！」

カチューシャを付けた先輩が勢いよく立ち上がった。

あの、僕をホールドした先輩……。

どうやら、平沢先輩が僕の名前を聞いたことをきっかけに自己紹介が始まっただけらしい。

……まだ僕入部してないんですけど。

「私がドラムで部長の田井中律！ みんなから超尊敬されるスーパーアイドルですよ！」

「自分を持ち上げすぎだ」

さっき僕を解放してくれたロングヘアーの先輩が今度は軽めにチョップ。

「……てへっ」

……懲りてないですね。

「先輩、どうしてドラムなんですか？」

印象からしてドラムっぽいけど、気になって聞いてみた。

「ギターとかベースとかってさ、指がちまちまするだろ？　だから、バシーン！　って思いっきり叩けるドラムがいいんだ」

先輩らしい答えかも。というか出会って数分で〇〇らしい、というのは分かるものなんだな、と思いました。

「でも、ドラムって私にとってはとても難しいのに……やっぱ、すごいな」

ロングツインテールの2年生の先輩が小さな声でそうつぶやいたのが聞こえた。

「次はー………漣！」

「えっ！？　私！？」

田井中先輩の突然の指名で動揺するさっきツツコんでいた先輩。

……今このときとツツコんでいるときのギャップに素かどうか疑問でした。

ロングヘアーの先輩は目をつぶって深呼吸して……

「……私は秋山漣。楽器はベースをやってます」

「あれ？　漣ちゃん、相手男の子なのにあまり緊張していない」

今まで何も言っていない金髪の先輩が少し驚いた感じで言った。

日本語話せるのにちよつとビビりました。青リボンとここで仲良く部活やっている雰囲気から見て当然だな、って後で思いましたが。

「そついえばそうだな……漣、何か変なものでも食ったか!？」

「そつだよ!　いつもの漣ちゃんじゃない!」

田井中先輩、平沢先輩……そこまでひどいんですか秋山先輩は……?

「どうして平気なんだよー?」

田井中先輩が少しからかう感じで聞く。

「そ、それは……何となくかわいいから、かな?」

僕がかわいい?

実際僕は男子では小柄だし声も高いし……

皆さん? 『確かに言われてみれば……』という顔しないでください。

「ええつと、気を取り直して……次はムギ!」

「はい」

田井中先輩の指名にっこにことした顔でゆっくり立ち上がる、ムギと呼ばれた金髪先輩。

「私は琴吹紬です。キーボードを弾いています」

……普通の日本人名ですか！？

「このお菓子とティーセットは全部ムギちゃんが持ってきてくれたものなんだ」

平沢先輩が嬉しそうな顔で言った。

……一人で、ですか！？ 僕は勢い良く起立し、

「こ、琴吹先輩、ありがとうございますっ……！」

と深々と礼をした。

「いいのよ、そんなにかしこまらなくても……それにこれ全部余り物だし」

余りでそんなにうまいんですか！？

後で琴吹先輩に聞くと、この紅茶は一杯800円くらいかな？
ってサラッと言われました。一体先輩は何者……。

「最後は梓！」

田井中先輩、少しボリューム落として下さい。

「はい」

黒髪で小柄な長いツインテールの先輩が立ち上がった。赤リボン唯一の2年生ですが一番しっかりしてそうです……。

「私は中野梓。リズムギターをやってます」

……ん？ この名前どこかで聞いた記憶が……

あ。

「あ……そういえば、同じ小学校だった時がありましたよね？」

「え？」

他の先輩達からも注目の視線。でも、間違いない。雰囲気は大部分変わっちゃっているけど、あの中野さんだ。

「同じ……だった？」

「先輩は覚えてないと思うんですけど、確か僕が1年生の時に、3ヵ月だけ先輩と一緒に縦割り班になってました」

縦割り班かー、懐かしいな、なんてつぶやく田井中先輩の声が聞こえた。

「あ、思い出した！ 少しでも……」

中野先輩も思い出してくれたよう。

「でも3ヵ月だけって……転校でもしたのか？」

秋山先輩が話の流れで聞いたことが、僕の心に鋭く突き刺さった。

転校……そう、僕は1年後転校するんだ。

そして、いつかは伝えないといけない日が来る。

クラスにも、部活のメンバーにも。でも僕は……

「おい、連くん？」

平沢先輩が僕の目の前で手を上下に振った。

「へっ？ あ……転校したかどうか、ですね」

そして僕はこの質問に、転校しました、とだけ答えた。

3 紅茶！

「ところで、楽器は何できるの？」

来た。この質問。平沢先輩から。

「ドラム？ギター？それとも……」

田井中先輩も乗っかってくる。目が輝いていて……まぶしい。

「もしかしたらベース……」

秋山先輩まで。余計答えづらいです。

「先輩、やめてください。連くん答えにくそうな顔してます」

中野先輩が僕の気持ちを読み取ってか、フォローしてくれた。

それを受けて、「あ、悪い悪い」と、田井中先輩が軽く謝った。

僕は中野先輩を心から感謝した。

「いいよ、正直に言って」

琴吹先輩が、優しい声で問いかける。

……でも、言いづらい。僕は楽器を何もできない。

秒数にして約7秒沈黙が流れた後、不意に平沢先輩が口を開いた。

「あれ？もしかして私と同じ？」

「平沢先輩と同じ……って？」

意味が分からず、気づけば聞き返していた。

その僕の問いに答えたのは秋山先輩だった。

「唯は、初めてここに来た時は楽器を何も弾けなかったんだ」

「そうなんですか！？」

新歓の平沢先輩は思いっきり輝いていた。けれどもまだギターを持って2年しか経っていないんだ……

「すごい、ですね」

これは心からの感動だ。

「えへへ……」

照れ笑いを浮かべる平沢先輩。

「で……じゃあ連はまだ楽器できないんだな？」

田井中先輩が明るいつーンで聞く。よかった、一瞬できないとダメだと思った。

「はい。楽器どころか、音楽自体あまりやってないんで……」

「中学の時の部活は？」

おそらく秋山先輩は音楽に向いていそうかどうかを見ようとしてこの質問をしたのだと思うけど……

「えと……茶道部です」

「ホント!?」平沢先輩過剰反応。

「じゃあ、これにお茶淹れてみてよ」

田井中先輩が僕に、琴吹先輩所有の高そうなティーポットを差し出す。

「紅茶、僕淹れたこと無いんですけど……」

「緑茶も紅茶も同じようなものでしょ、ムギちゃん!」

平沢先輩、なんという……

「うーん、多少は違うけど……同じ所もあるしね。連くん、やってみよう!」

ええっ!? 琴吹先輩、主旨……

どうやら、秋山先輩の質問は、お茶淹れの適性の質問となっってしまったようだ。

「……」

――

「……さすがっ！」

いつの間にか来ていた、顧問の山中さわ子先生からお墨付きと、

「うん。合格ね！」

琴吹先輩から合格点をもらった。やった……遂に。

琴吹先輩からの熱心な指導のもと、僕は紅茶の淹れ方を1時間かけてようやくマスターした。途中山中先生が来て止められるかと思っただが……

「私も教えてあげる」

……ということで続行し（その間山中先生はお菓子食べてばかりで何一つ教えてもらってない）、遂にこの先輩の紅茶の淹れ方を習得した。

……そういえば、ここ、何部ですか？

「というか先輩、練習しないんですか!？」

中野先輩、1時間に渡るノリツッコミ。

「だってさー、練習嫌だもーん」

田井中先輩、あなた部長ですよ？

「連くんも去年の私みたいに……あつ」

中野先輩の言葉を遮るように、部活終了を知らせるチャイムが鳴った。

只今後7：00。それ以降の部活動は申請を出さないと無理らしい。

無論、軽音楽部は申請を出しているはずもなく……

「帰るぞー！」

「「おー！」」

……。

4 家路！

すっかり日の落ちた帰り道。

偶然、逃げた3人の内の1人の姿を見つけた。あの背の高い男子だ。

「おい、阿部！」

「……ん？」

名字を呼ばれて、阿部空^{あへくう}が振り返る。

僕は一番最初に同じクラスである、彼を誘った。どうやらそのときは彼も同じ思いだったらしく、協力してくれたのだが。

「上野か。ご愁傷様」

ちよこつと右手を挙げるだけの謝罪……というか慰め。

「軽いです！ それにご愁傷様って微妙に皮肉ってませんか!？」

精一杯のツッコミをぶちかます。しかし、

「……まあな」さらっと流された。

もうちよつとノリ良くお願いします。僕泣きますよ……。

「それより、軽音部どうだった？」

阿部が僕を見下ろし聞いてきた。阿部の身長は183cm。僕は156cm。

見上げているので首が痛い。

とりあえず、正直に簡潔に言うことにした。

「……活動してない」

「それってどういう意味？」

「僕らが来たとき、先輩達お茶していただろ？それが……」

「部活終了まで続いた、と？」

「そういうこと」

「……幻滅だな」

別の部に行っていただろうが、まだ軽音部にも期待していたのだろうか。ただ、この発言を聞く限りでは、もう彼が軽音部に来ることはないだろう。

でも、僕は話しきることにした。

「だけど、僕はやっぱりあのライブのことが忘れられない。あの、音楽が本当に好きだって伝わってくる演奏……どうしてあんなんで、できるんだろって」

「それは……」

阿部が何か言いかけたとき、後ろから人の気配がした。

「みんながみんなを大好きで、音楽も大好きだからだよ」

「……た、田井中先輩!？」

やはりこの先輩は軍か何かにいたんでしょうね……

「……!？」

身に危機感を覚えた様子の阿部。

聞かれてましたね、幻滅発言。

「お前よくも逃げやがった上に……」

「痛っ！ ごめんなさい」

チョークスリーパーを阿部にかます先輩。背が小さいのによく可能でしたね。

「……ふう。酷い目に遭った」

冷静さは崩さない阿部。

「連、友達?」

「はい」

まだ、5日前に初めて話したばかりだけど。

「俺は阿部空です。今日は……ごめんなさい」

その謝罪の念を3分前の僕にも欲しかったです。

「そんなに気にすんなって、明日来てくれればいいんだし」

威圧しないように見せかけて威圧という高等テクニックを使う
田井中先輩。

「はい。……でも、なんなら練習しているところ見たいです」

「そうだな。連、明日はみっちり練習するからな！」

「はい……って僕まだ入部していないんですけど」

……本当は、練習嫌だとか言ってますでした？って言いたかった。

「じゃ、私こっちだから。また明日も来いよ！」

「はい！また来ます！」

「俺もできればお邪魔したいです」

田井中先輩と別れた後、阿部と2人で並んで歩きながら考えてみた。

「……みんながみんなを大好きで、音楽も大好き……か」

「よく覚えているな、上野」

「まあな。……好き、か」

軽音部の先輩達の顔を思い浮かべる。

平沢先輩に秋山先輩、琴吹先輩に中野先輩、そしてさっき会ったばかりの田井中先輩。

みんな、楽しんでいた。

サボることを？

違う。

仲間と一緒にいる、1秒1秒を。

「上野、それってloveじゃないよな？」

「あ、当たり前だよ!!」

5 無理やり！

次の日の放課後。僕は阿部と音楽室に向かうため、階段を登っている。

上からはかすかにギターの音が聞こえてくる。ということは、練習やってんのかな？

「あの2人、もう他の部に入部届け出しちゃったって」

あの2人とは、阿部以外に昨日、一緒に音楽室に来たヤツだ。

「なんだよ……」

阿部がまだいる、ということは希望の光ではあるが。

「脅されたのか？」

「さあ……女つて意外と怖いし」

「おい、阿部君」

踊り場で、男の先生にいきなり声を掛けられた阿部。

阿部は動じず、むしろ今後の展開を予測していたのか僕にばつの悪そうな顔を向けて、こう言った。

「……ひょっとしたら行けないかも」

「マジで？」

「すまん。先輩達に先生から無理やりバスケット部にスカウトされたと言ってくれ」

本当にそんな目的で先生は声を掛けたのか？

「阿部君は中学生の時、バスケの全国大会に2回出たんだよね？」

「はい」

……マジで

「実はこの学校内には偶然にも」

予測

「他に4人も全国や関東とかに」

的中

「行った奴がいるんだ。だから」

しますか？

「もう、お前の分も男バスに入れたから」

……ぎゃーっ！？先生無理やり過ぎですーっ！？

「さて、とつとと着替えて体育館に行くんだ！ 早く！」

阿部は先生に腕を引かれて下の階に消えていった……。

「阿部……お前、凄いな……」

これで、もう男の軽音楽部入部希望者は僕しかいなくなった。中学の時の茶道部でも、男子は最終的に僕のみになって、他みんな女子だったから、ある程度のハーレム状態？　には慣れている。

いや、別にハーレムって言うほどでもないけどね。やっぱり女子とはお互い距離をとっていたし、お喋りすることはあるけど女子と帰ることはなかったし。

でも、この学校の軽音楽部は…例えば平沢先輩は会ってすぐ握手を求めてきた。

田井中先輩は阿部にチョークスリーパー。

琴吹先輩は僕に紅茶の淹れ方をとても丁寧に分かりやすく教えてくれた。

人見知りだという秋山先輩はかわいいから、という理由で僕には人見知りしなかった。

そして、中野先輩は、小学生の時に縦割り班で一緒に遊んだことがある、という訳なのか僕のことを結構見ていた気が……

とにかくここは個性強烈過ぎで、さらにまるで男女関係ない、っ
て感じがした。思春期の子供の集団で、意識しすぎな中学校とはや
っぱりちよつと違う……！？

そんなことを考えつつ、僕は音が聞こえてくる音楽室のドアを開けた。

「失礼します」

音がぱたりと止む。なんだろう、自分の居場所みたいな気がして笑顔になる。

「あ、連くん！」

ギターを持っている平沢先輩。

「待ってたぞー、連」

ベースを肩に掛けた秋山先輩。

「連くん、待ってて」

と、キーボードを離れ食器棚に向かう琴吹先輩。

「ムギ、今日はいいぞ。連に楽器触らせるからな」

そんな琴吹先輩を後ろから制止するドラムの田井中先輩。

「じゃ、ちょっと待っててね。今準備するから」

ギターを外し、スタンドに置く中野先輩。

「僕は何かした方がいいですか？」

「ん……お茶の準備！」

田井中先輩が準備しながら答えた。

「先輩！ それじゃあ昨日と同じになっちゃいます！」

年下の中野先輩がしつかりとしたツツコミ。でも……

「でもさ、自分が教えてないときヒマじゃん」

平沢先輩の言い返せないワガママ。それにとどめを刺したのは、

「連くん、一緒に準備しよう？」

琴吹先輩の手伝いという名の強行採決。

賛成3、反対1、棄権2（意見言えなかった僕と秋山先輩）。過半数を超えたため、僕にお茶の準備をさせることは承認されました。

こんなんでいいんですか？正義が正義でないなんて……

「……はいはい。でも夢中になっちゃダメですから」

でも中野先輩もなんだかんだで嬉しそう。このやりとり、楽しいんだろうな。

そう思いながら、僕は琴吹先輩と共にお茶の準備をした。

6 楽器体験！（前書き）

秋山零崩壊注意報。

6 楽器体験！

テーブルには僕の淹れた紅茶とケーキが。

……昨日より豪華ですね、琴吹先輩。

「連、まず何やってみたい？」

田井中先輩が聞く。

そりゃあ、新歓で聴いたときクールでカッコいいと思った……

「ベースやりたいです」

僕は赤色と白色のベースを指差したつもりだけど……。

「おい、それ梓のギターだぞ」

と秋山先輩。

「ベースはこっちだ」

あ……恥ずかしい。ちなみに、弦の数が基本的にはギターは6本、ベースは4本ということを初めて知りました。

「じゃあ、漣よろしくー」

早速ケーキに手をつける田井中先輩。光の速さ。

「つたく、律つたら……」

「連くん、おいしいよこのケーキ」

平沢先輩、それは……

「僕が作ったり持ってきたりしたものじゃないです」

「唯先輩つたら……」

……中野先輩？

気を取り直して。

「連、ベース肩から掛けてみて」

「はい」

スタンドから先輩のベースを壊れないように慎重に持ち上げ、弾く所―（ボディ、って言うんだって）を右に来るように構える。

しかし、何か違和感。

「あ、これ私のだからレフティだった……」

秋山先輩なんか微妙に落ち込んでいる気がした。

「レフティって何ですか？」

分からないことは訊く！！

……でもその後後悔した。

「左利きの人のためのモデルのことだ……」

落ち込み方ハンパじゃない……!?

ヤバイ。

「ごめんなさい！　ごめんなさい!!」

ひたすら謝り続ける僕。

「みーおー、戻ってこーい……なんだこの風景」

秋山先輩の代わりにツツコむ田井中先輩。

「……しあわせえ」

「ありがとう」

マイペースな平沢先輩、琴吹先輩。

思い返すとギターとベースを間違えたことより恥ずかしいと思った。

「とりあえず、他のにしましょう」中野先輩、凄く気が利く……。

「ギターとかどうかな？」

何事も、物は試し。

「や「私が教えてあげよう。ふんすつ」「

僕のセリフを聞かず勝手に意気込んでいる、さっきまでお菓子に夢中だった平沢先輩。

「ほら、早く早く!」

招かれるがまま平沢先輩の元へ。

正直、面目保とうとしているの丸見えですよ……。

「ええと、掛けていいですね?」

「ちょっと待つて。……ギー太、しばらくお別れだね……」

そう、オレンジ色のギターに話しかける平沢先輩。

「ただ愛着持っているんですか!? それに“ギー太”ってギターの名前ですか!?

「うん。OKだよ」

「本当にいいんですか……?」

念のためもう一度聞く。

「もちろん!」

何か後ろめたい気がするけど、ベースの時と同じく、傷付かないようにそうつと肩に掛ける。

ずっしりとくる、ギターの重み。平沢先輩って実は力持ち……？

でも、右にボディを持って来ているけど違和感はナシ。

「これでいいですか？」

「うん！」

笑顔で頷く平沢先輩。

「お、いいじゃん」

田井中先輩が僕を褒めてくれた。

「うん、似合ってるわ」

琴吹先輩も。

「そつだな。連はギターがいいのかも知れないな……」

秋山先輩は机に突っ伏した。

「……ヤバイ。」

「澪先輩、そんなに落ち込まないでく……」

「ごめんなさい！　ごめんなさい！……」

ペコペコ謝る僕withギター太。

実は、僕はギー太という名前意外と良いと思った。

「「「「「……」」」」」

やはり後々思い出すと凄く恥ずかしい。

でも、秋山先輩。今ギターやらせてもらっているけど、僕はベースがやりたいです、本当は。

「……ホント？」

秋山先輩が顔を上げた。

正直涙目で上目遣いは反則ですっつ……！

「ひ……人の心読まにやいでくじゃしゃしゃ……！」

恥ずかしさ+萌え？の相乗効果で噛みまくった。

「……くすっ」

笑った。

「あ、漣のスイッチが入った」

田井中先輩、それって……

「くすくす……あっははははは！」

壊れた。零先輩ってどうなってるんですか……？

「あはははは！ 噛み過ぎだろ……っ！ ケホっケホっ……あはははは
」！

7 生演奏！

その後……

「お願いします、平沢先輩」僕

「ええ、名前で呼んでよ」平沢先輩

「そうだぞ、なんかよそよそしいじゃないか」田井中先輩
ということで先輩達を名前で呼ぶことになったり、

「琴吹先輩は……紬先輩？」僕

「ううん、“ムギ先輩”って呼んで？」紬先輩

「はい。じゃあ中野先輩は……」僕

「あ、私は普通に“梓先輩”だよ！」梓先輩

「はい……なんかすみません……」僕

「（（（（“ズサ先輩”って……））））先輩達

僕が梓先輩のことを“ズサ先輩”って呼ぼうとしてしまったりと
か（考えてみると本気でそれは無いなあって思った）、

「ありがとうございました」アンプから線シールドを抜こうとする僕

「うわ、ちょっと待っ……」唯先輩
耳を塞ぐ先輩達

「……………!!!!」アンプ

「う……るさ……」気絶。

「連くんっ!？」唯先輩

「まさか連も唯と同じ失敗するとはな……」澪先輩

勝手にシールド抜いて爆音を食らって気絶したり、

「バキューン」僕が弾いたキーボード

「うつ……」腹を押さえて倒れる律先輩

「「りっちゃん隊長っ!？」」「唯先輩& a m p ; ムギ先輩

「私は……ここで終わりみたい……だから……負け……な……いで」
律先輩

「り……りっちゃん隊長……」唯先輩

「りっちゃん隊長、あなたのこと……忘れないからね!」ムギ先輩

「「……………」」「澪先輩& a m p ; 梓先輩

キーボードの音色に銃の効果音があったので、律先輩達が謎の小
芝居をやったり、

「ドンドンドンドンドンドンドンドンドンド……」ドラムの中の、
足で蹴る大きいの（バスドラム、通称バスドラ）

「おい、どうしてバストドラばっかし叩いてんだ？」 律先輩

「ストレス発散です」 僕

「ドンドンドンドンドンドンドンドンドンド……」バスドラ

「「「
……」」」
律先輩& a m p・澪先輩& a m p・梓先輩

「あ、何か面白そう。次代わって」 ムギ先輩

バスドラをストレス発散と題して叩きまくって足が筋肉痛になりそうになったりとか。

まあ、こんな感じで楽器体験は過ぎて行って……

「あれ、もうこんな時間です」

梓先輩が指した時計は既に6時45分を指していた。

「じゃあ、私達の演奏聴くか？」

澁先輩が嬉しい提案を。

「新歡とはまた別な曲でさ」

「湊ちゃん、何やるの？」

ムギ先輩が聞くと、みんな集合、と言って少しひそひそ声がした後、
「よし。連はここに座ってて」

と先輩達のカバンが端に置いてある紺色の長椅子を指差し、演奏準備に取りかかった。

違う曲……？僕の心臓がワクワクして止まらない。

「よつと」唯先輩がギターを背負い、

「みんな、準備OK？」律先輩

「うん、OK」澪先輩

「私もOKよ」ムギ先輩

「OKです」梓先輩

「オッケー」唯先輩

そして……

「ワンツースリーフォー」

ドラムをきっかけに、一斉に先輩達の楽器の音が音楽室を包み込む。

> 翼をくださいく。僕が中学に入って初めての音楽の授業で歌わされた曲。

唯先輩の透き通るような声。漣先輩の支えながらも埋もれないベースとハモリ。ムギ先輩の指先から奏でられるキーボードの音。律先輩の前へ前へ突き進んでいく力強いドラム。梓先輩の正確なリズムを刻みバンドに更なる安定感をもたらすギター……

僕もいつか、この中に入りたい。楽しそうだもん、本当に……

演奏が終わった。余韻が耳に、足に伝わる。

僕は立ち上がって、拍手した。

笑ってた。僕も、先輩達も。

「先輩達本当に楽しそうで、僕も楽しい気分にならせてもらいました。……僕、先輩達と楽しんで演奏したいです」

僕は、“入部する”ことを伝えた。

先輩達の笑顔が、より輝いた。

「やったよ、あずにゃんっ！」

「きゃっ！？唯先輩抱きつかないでください！」

梓先輩に抱きつく唯先輩。

「良かったな梓、後輩が入ってきて」

と言う零先輩。

……でも、僕は同時に伝えないとならないことがあった。

（なんで……なんでいわなかったの……！）

僕は昔の梓先輩を、泣かせてしまった。伝えるべきことを伝えずに。

……だから。心が壊れても伝えるんだ。

「……でも」

先輩達の視線がこっちに向く。

心が、壊れそう。

けど、絶対伝えるんだ。事実を。

「僕がここにいられるのは……今年だけです」

気がつくのと、泣いていた。それが僕だけだったのか、それとも先輩達も泣いていたのかは、分からなかった。

8 始まり！

僕は伝えた。

心が壊れた。

溢れる涙が、次々と。

「元々親の転勤で、こっちに卒業してから引越して来ました。…だから1年生が終わる頃には、僕は…元いた場所に、戻ります」

きつと情けない姿。

でも、もうどうでもいい。

伝えるんだ…。それだけだった。

「……でもさ」

唯先輩が口を開いた。

笑ってる……？

「まだまだ時間あるじゃん。1年もいられるじゃん」

「唯先輩……」

1年も？

1年も……

「ほら、泣かないで」

ムギ先輩がハンカチを僕に渡してくれた。ありがとうございます、
と言って、目の辺りを軽く叩くようにして涙を拭く。

「男らしくないぞー、連？」

後ろの方からでも通る律先輩の声。

「唯の言った通り、まだまだ始まったばかりなんだから。まるで
明日引越すみたいじゃないか」

「そう。だから今からそんなに重く思わなくていいぞ」

右側にいる澪先輩。3人とも、泣いていなかった。

「連くん」

そして、逆の左側にいる梓先輩。

声が震えてる……。

「私……ショックだった。また会えたのに、またいなくなるなんて
……」

やっぱり伝えるべきじゃなかったのかな……。

「ごめんね、私弱くて。でも、昔みたいにいきなり転校する方が……」

…私は嫌……」

泣いているけれど、僕を真剣に見てくれている。

「梓先輩……ごめんなさい」

何か申し訳なくなってしまうて、謝ってしまった。

「ううん、いいよ。それは仕方ないことだし……もう一度会えたことも奇跡だから」

もう一度会えた奇跡。めったに無いこと。これまでに僕が転校して別れた、知っている人の中で、実際に再会できたのは梓先輩だけ。

「だから、１年間だけ……ううん、１年間も一緒にいられること、嬉しいよ」

１年間。人生の中だと、たった１年。高校生の中だと、“たった１／３、もしくは１／３“も”。

……でもきつと。思い出の量は１年だけでもぎゅうつと詰まったものにできると思う。１年間の価値を決めるのは僕で、無限大に広げられるんだ。

「はい、僕も……先輩方と一緒にいられること、最高に嬉しいです！」

笑っているの？

泣いているの？

分からない。でも、今の僕は……

悲しくなんかない。

「よっしゃ、写真撮ろうぜ！」

律先輩がいつの間にか僕の後ろでデジタルカメラを構えていた。

「律、また私の勝手に……」

漣先輩が軽くグチりながらこっちに来る。唯先輩、ムギ先輩、梓先輩もこっちに。

ちょっと近い……そう思った僕はさりげなく端っここに行くと、

「何端っここに行こうとしてるんだよ！ 主役は真ん中！」

と律先輩に両肩を掴まれて、グイッと。

「うわっ」

めちゃくちゃ強い……というかあれ？ 両手使えるんですか

律先輩……？

「うふふっ」

引っ張った先輩の正体はムギ先輩。

「ほら、あずにゃんも真ん中真ん中！」

唯先輩も梓先輩を……

「よいしょー」

「ちよっやめ……ひゃっ!？」

真ん中に。注：ムギ先輩の力で

つまり、僕の隣に、梓先輩。他の先輩達はその後ろに。

配置についた所で、律先輩がテーブルの上にカメラを置いて、セ
ットした。セルフタイマー、とかというものか？

「みんな、準備いい？」

「「「いいよ」「」」

「「「いいです」「」」

全員同時。

「よし、行くよー!」

カメラが光り始めた。律先輩が後ろに行き……

カシャ

「うん、撮れたな」

零先輩がカメラの元に行く。続いて唯先輩、ムギ先輩、律先輩、梓先輩、最後に僕がちょっと離れた所に。

「……お、スゴいかも」

零先輩の持つカメラを覗きこむ唯先輩。

「うん、バッチリじゃねーか！」

律先輩も覗きこんで一言。

「私にも見せて」

ムギ先輩は、零先輩からカメラを受けとると、やっぱり満足そうな笑顔を浮かべた。

「次、私ですよ」

梓先輩も、ちょっと照れくさそうに、でも満足げ。

「連は見ないのか？」

零先輩が離れた場所にいる僕に気付いた。

「あ……見たいです」僕は梓先輩の元に行つて、見せてもらった。

「はい」

「ありがとうございます」

写真には、背景に先輩達の楽器。

後列一番右に輝く笑顔で思いっきりピースした律先輩、その隣に控えめな笑顔の澪先輩。そのまた隣にニコニコ笑顔でダブルピースしているムギ先輩、一番左端に同じくニコニコで、左手でピースしている唯先輩。

前列には、少し照れくさそうな笑顔で、ピースサインしている梓先輩と、結構控えめで口元をくいっと上げただけみたいな僕。

心の中で、つぶやいた。

「始まるんだな……僕の1年が」

「そうだね」

梓先輩が心の声に反応！？ ……ひょっとしたら声に出ていただけ？

そうだ。きっとそうだ。

「この1年……連くんも私も、先輩達も。忘れられない1年になればいいね」

「はい」

僕は、大きく頷いた。

僕と軽音楽部の1年は、始まったばかり。

8 始まり！（後書き）

これで、1話終了です。長かった……。次は部室を整頓しつつも、ついに連の楽器が……！の予定。

連の楽器！（前書き）

この話では色々名前が出てきますが、作者は軽音楽に関しては無知です。もし違ふなと思ったところご指摘願います……

連の楽器！

ただ今、楽器屋。梓先輩と。僕のギターを買うため。

なぜ梓先輩だけなのかというと、単純にたまたま今日の放課後用事がなかったのが梓先輩だけだったから。

それに一応ベースをやリたかつたけれど、バンド構成上ギターが最も組み込みやすいと澤先輩に言われ（本人は少しがっかりしていたが）、ギターを選ぶ際に色々アドバイスができる点でも梓先輩（唯先輩は……らしい）に。

「それにしても多い……」

壁には、カラフルなギターがずらーっとたくさん。若干の興奮。

「でも、安すぎるとあまり良くないからね」

と梓先輩。

「はい」

一応、財布には使ってなかったお小遣い8万円。これだけあれば……

> Gibson 1956 Goldtop VOS 68万9000円<

……全然届かない……。――

「あ、そんなに高くなくてもいいよ。大体5万円位が目安かな」

と梓先輩。

心、読まれています。

「あ、はい」

それにしても。多すぎて、何を買えばいいのか良く分からない。

2年前の唯先輩の場合はまさに一目惚れで、25万円のギターを他の先輩達と一緒にバイトした上で、ムギ先輩が5万円に値切って（！？）もらって買ったらしいけど……。

「梓先輩、初心者におすすめのギターと違ってないですか？」

僕は変な物買って痛い目に遭いたくはないので。

「うん……こういうのって店員さんの方が詳しいと思うけど、私がいいと思うのはこのギター……かな？」

梓先輩の指差したギターは紺と白のボディをしたギター。名前は、
> FENDER JAPAN ST57 OLBK。

「“ストラトキャスター”という種類のギターで、結構万能なギターだから、これ買って間違いはないと思う」

気になる値段は、6万8200円。うん、全然買える。

「そうだ。私ちよつと弾いてみる?」

梓先輩の提案。

「そんなことできるんですか?」

「うん。それに、ギターがどんな音出すのか分かっておいた方がいいじゃん?」

梓先輩に色々やつてもらって悪いな……とか思いながらも、梓先輩のご好意だし、後悔はしたくないので、

「はい。お願いします」

と、軽く礼。

「うん。じゃあ呼んでくるね」

楽器屋なんて僕は一回も行つた事がないので、梓先輩にお任せして。試し弾きの許可をもらえたので、梓先輩がアンプに繋いださっきのストラトキヤスター? を肩に掛けて、一つ鳴らしてみせた。

♪ジャーン……

……カッコいい……

「おーい、連くーん?」

「はっ!？」

梓先輩の一声で正気に戻った。

「もうちょっと弾かせて」

今度は、一つのソロフレーズを奏でた。

……上手い。カッコいい……。

「おーい……」

「わっ!？」

正気に戻った(2回目)。

「……で、どんな感じだった？」

「カッコよかったです!」

多分僕の目はキラキラ輝いている。

「……私じゃなくて、ギターの方だよ」

「はい。ギターの音メチャクチャカッコよかったです」キラキラ

「う……うん。私が聞いてもこのギター悪くないし、これでいいと思うよ?」
(目がまぶしいっ)「」

「はい！」キラキラ

で、僕のギターがついにやってきた。他にも色々アンプとか必要だけど、買えるお金持っていないし、どうせまだライブする訳でもないので、またの機会にということに。

今、僕は最高に幸せだ。

「
」

(……唯先輩みたい)

1 災難！（前書き）

第2話は割とアニメに沿ったストーリーになります。もちろんオリジナル込みですが。

1 災難！

僕が軽音楽部に入部して約一週間後の出来事。

（掃除当番が長引いた！！ 急げー！！）

階段を2段飛ばしで駆け上がって行って、息を切らせて音楽室前に来た。

頼む！ 間に合っていて！！

そう願ってドアを開けた次の瞬間。

ガラガラガラガラガッシャン！

「うつ……」

何かとんでもなくマズいタイミングで入ってしまったっぽい……。

と、とりあえず僕が見た風景を説明すると、澁先輩とムギ先輩と山中先生が音楽室にいて、その目線の先にある物置と化した部室から大量に物があふれている……な感じ？

「律！？」

「「りっちゃん！？」」

「え……？」状況をもっと詳しく知るため、息が整わないまま、前

に物が飛び出している部室を正面から覗くと……

「り……律先輩ですか!？」

「うん……ヘルプ……」

生き埋めですっ!？ しかも山から手だけ器用に出して振ってるし……

でもとにかく助ける他ない!

僕は部室へ突撃した。大切な先輩を救出するために!

……しかし。

「律先輩……うわああっ!？」

カタッ……

ガラガラガラガラガッシャン!!

「連!？」

「「連くん!？」」

散乱していた物につまずいてバランスを崩し、倒れそうになって手をついた所がまだ立っていた棚だった……

で、棚がバランスを崩し、下敷きに。

「……連」

「律先輩……？」

「私達ってこんな役回り多いよな……」

「そう………ですね」

――――

「大掃除をします！」

僕と律先輩が零先輩達に救出され、山中先生が先輩達が勧誘の時着ていた着ぐるみ（さすがに近寄れなかった）を音楽室から持ち出した後、零先輩が言い放った一言。

その前に遅れて来た唯先輩と梓先輩に対しての前置きがあったけれどね。

僕と梓先輩とムギ先輩が早速部室から物を運び出そうとすると……

「そこ、あからさまに嫌そうな顔しない」

長いすの方を見るとあからさまに嫌な顔した唯先輩と律先輩が。

……というか先輩、僕はこの部室の件無関係ですよ？

「おっしやあ！　今日は思いっきり練習するぞー！」

「目指せ武道館だよ！」

見ると、いつの間にかギターとドラムのバチ（その後“バチじゃなくてスティックだ！”って訂正された）を持ったやる気満々の顔をした例の先輩2人。

てか“目指せ武道館”って……

「……そこまで嫌なのか」

と、漣先輩。

そんなコントを聞きながら、僕はムギ先輩達2人と共に荷物を出し続ける。

「だって……」

「三度の飯より掃除が嫌いだー！！」

「意味不明だっ！！」

本当に意味不明。

僕が今日二度も掃除する意味も不明ですし、さっきの例の2人の発言も意味不明ですし、更に微妙に残る体の節々の痛みも意味不明ですしーっ！！

「うあー……っ！！」

「……れ、連？（くん）！？」「」「」

気が付いたら、どうやら絶叫してたらしい。その後先輩達から本気でドン引きされた……。

2 非力！

唯先輩と、ブレザーを脱ぎ捨てて本気モードになった（？）律先輩、そして「3度の飯より掃除が嫌いだー！！」な二人を何とか説得させ、ポニーテールに結んだ澪先輩も加わって、いよいよ整頓が本格的にスタート。

「〜」

段ボール箱を軽々部室から出すムギ先輩。

「僕も手伝います」

そんなに重くなさそう。だって、鼻歌を疑いながらいかにも軽そうに持っていたから。

でも……

「よいしょ……重い……」

ズシリと来る重み。とんでもなく重いんですけど……！！

何とか部室の奥から持ち上げていこうとする。けれど……結構危ない。

震える腕。ふらつく足。食いしばって痛くなる歯。

「連くん、大丈夫？」

段ボール箱を下ろしたムギ先輩が心配してくれた。けれど、こ
こは僕が……！

「はい、平気です……うわっ」

ついに足が耐えきれなくなり、視界が傾く。

倒れた先には棚が……

ガラガラガラガラガッシャン！！

「「「連^{くん}！？」」「」」

また埋もれた。

「……意外に非力」

律先輩、それ言わないでください……。

「零先輩、何か手伝うことはありませんか？」

僕の本日2度目の救出後、再び作業に戻った訳だけど……

「ん……運んだ荷物の中で、使えそうなものとそうでないものを
分けてくれるか？」

「……他には？」

「ああ……いいよ」

非力だから、だろうか。普通逆だよね……僕が運ぶ方だよね。

「それにしてもたくさん出てきますね」

梓先輩が段ボール箱の中身を見て、言った。

僕も手近にある段ボール箱の中身を見ると、そこにはホコリをかぶった大量の音楽雑誌が。今年から4、5年前の年になっている。

また、段ボール箱に入っていないものでは、底の抜けたメトロノームや（動かすと、本体がくるくる回った。唯先輩がハマった）、今はリニユールされて販売されていないお手入れ道具、色あせた昔の軽音楽部の写真など、とにかく歴史的な価値のありそうな品々がたくさん……

写真の中には怪しい格好をしたものも……昔はこんなだったんですか!?

「まともに活動していた事もあったんですね」

梓先輩……。このセリフ悲しいです……。

「それにしても何なんだこのぬいぐるみの山は」律先輩

「あ、この大きいのも200円でとれたんだよ」唯先輩

今の軽音部のまともじゃない原因。というか、唯先輩達もゲーセン行くんだ……

「聞いてねーし、ほれ持ってけ」

「ぶう！」

その中に一際目をひくものが。

一頭身で、長い鼻に髪の毛一本の、見たら思わず吹いてしまうようなオヤジのぬいぐるみ。

「……！」

僕の視線に反応したのか、澪先輩が体をビクらせ挙動不審に……

「澪先輩、まさか……」

ササッとぬいぐるみを持ち上げ、ぬいぐるみを隠す澪先輩。

「……オイオイ」

あきれている律先輩。

こういう言い方もおかしいかも知れないけど、本当に、澪先輩はたまにおかしい。

それにしても、ぬいぐるみの山の近くにも私物が色々……

ボーリングのピン（木でできた本物）もある時点で一体何部ですか？と聞きたくなる。

「……あと9本足りないね」ムギ先輩

「そういう事じゃないって」律先輩

ムギ先輩もたまにズレているし……

ん？　良く考えてみれば全員ズレているんじゃない？

ま、いつか。この作品は全員少しずつズレている事によって……

「成立していると言っても過言ではないのだから」

「連も何言ってたんだ？」

「……あ」

思いつき口にしたように……。。

3 発掘！

「私物は持ち帰れ！」的な漚先輩命令があつて、掃除も一段落。

高校つて、ものすごく自由なんだ。中学だったら間違ひなく全部没収されてるよ……

で、今はついさつき砕ける所だったムギ先輩のベルギー王室ティーセットを使用してのティータイム。非常に恐れ入ります……

というか「ベルギー王室」という単語に上の空になってティーセットを落とす唯先輩も唯先輩だけど、それを驚異的な反射神経でキャッチする律先輩つて……

……やっぱ軍人じゃ？

「連、何か失礼な事思っただろ」

「いいえ何でもございません」

ムギ先輩が淹れてくれた超高級紅茶をゆっくり飲んでみると、いつの間にか部室に行った唯先輩がフラフラと。

「なんか見つけたよ」

その手には、鉄っぽい銀色の長方形のケースが。唯先輩の身長より少し短い位の長さ。

「お、高そうなケース！」

律先輩が席を立ち唯先輩の方へ……

2人が一緒になると高確率で2人の意見、行動が部の意見、行動になる。

「何か金目のもんとか入ってないかなー……」

と律先輩。部費目当てですか!?

「よいしょ」

ケースを長いすに置く唯先輩。その他の先輩も興味津々らしくケースの周りに集まって、僕もやや遠くからケースの中身を期待する。空っぽとか止めてくださいね。

「じゃ、開けるよ」

唯先輩がガチャッとロックを外し、ケースを開くと、中には赤のキレイなギターが。

「ギターだね」

スゴい……何かスゴそう……

「でもちよつと……カビ臭いですね」梓先輩

「でも使えそうだな、こんなに綺麗だったらさ」漣先輩

「でも、もう連くんギターあるし……」 ムギ先輩

発掘されたギターにの今後について早々話し合う3人。しかし……

「ちえ、もつと面白い物かと思った」

「つまんな〜い」

律先輩と唯先輩は……興味関心意欲0。ティータイムにカムバツク。

こんなに素晴らしいギターなのにですか!?

「軽音楽部だから少しは興味持ってください!」

梓先輩のツツコミ炸裂。

「そうだぞ、連を見てもろ」

二人の目線が僕に。そして今の僕の姿を見た感想は……

「目がまぶしいっ」「」

いかにもヴィンテージそうなギターに感動していた僕の目は、発光ダイオード級に輝いていたらしい。

「……せめてこの位興味持って、な?」

「さすがにそれは……」「」

「ここ、ハモる所じゃありませんよ……」

そんな事していると、ドアから山中先生が登場。

「あら、懐かしいわね……へえ、こんな所にあつたんだ」

これ、ひょっとして……？ 僕はギターを眺めている山中先生にとっさに出た質問を。

「「え、これって先生のギターなんですか？」」

誰かとセリフがダブった！？ とりあえず、僕は声のした方向を見た。

すると、梓先輩と目が合う。

クスツと笑う梓先輩。

恥ずかしさと照れで顔が熱くなり、心臓の鼓動が早くなる。

俯く。

後ろから怪しげな視線を痛いほど感じる……！！

「そうよ、あんまり弾いてなかったけどね」

山中先生はスルーしてくれた。……と思った。

「それより連君、顔上げなさい」

ゆつくりと顔を上げる。

「うん、顔真つ赤よ」

うつ……！ 更に熱くなる顔。

あわてて山中先生から目を逸らすと、その視界に入ってきたのは……

「どうした、連？」

ニヤニヤする律先輩とうつとりするムギ先輩が目に入った。

「……！」

どんどんどんどん熱くなる温度。これって……

違う違う。ただの偶然によって起こった恥ずかしさだって……！

「いいわね、青春って……」

「違います……！」

って言いかけたが、その言葉を僕は飲み込んだ。

なんとなくヤバイ。山中先生の周囲に闇のオーラが……

「さ、さわちゃん平気だって……」

「うんっ！　頑張ればまた彼氏できるから！」

律先輩と唯先輩が慌ててフォローに回る。

えと……どうすればよろしいでしょうか……？

3 発掘！（後書き）

現段階では連は梓の事をなんとも思っていないません。だけど……？

この先は秘密です。……ほぼバレているでしょうが。

4 じゃんけん！

キレイな夕暮れの空。腕に掛かる重み。鼻をつく異臭。

……見事に押し付けられた。

元桜高軽音部、ヘヴィメタルバンド＞DEATH DEVIL＜
の山中先生に、

「弾く時間ないし、それに……他の人に弾いてもらった方がこのギターは幸せだと思うの」

とキレイ事言つて、「私物は持ち帰る」という濤先輩命令に基づき、先生が持つて帰るはずのギターを、楽器屋に売って部費の足しにしろと命令された。

最初は僕は「なるほどね」なんて思つて同意したけれど……

「……重いです。臭いです」

重いのもそうだけどこのカビ臭さ！……きっとカビ臭さが裏の理由だと思う。

違う。それが裏の理由だと確信する。

「じゃんけんで負けたお前の責任だろ？」

と、律先輩。そう、僕たちはじゃんけんでギター持ちを決めた。……子供っぽいけど、意外に楽しかったりするんだ。

「あら、もう時間よ。連くん、お疲れ様〜」

ムギ先輩がケータイを開き、交代時間が来た事を知らせた。

つまり、じゃんけんタイム！

「よしっ！ 次は絶対負けませんからね！」

頑丈なギターケースを下ろし、腕をブンブン振り回してみる。

「ふふん、返り討ちにしてくれよう！」

「してくれよう！」

手を組んで覗き、気合いを入れる律先輩と唯先輩。そしてムギ先輩も。

それを見た梓先輩が、

「子供っぽいですよ」と。

それに対して

「私は子供だ！」

律先輩、僕ならツッコむ言葉が……

「大人になりましたようよ」

梓先輩、その手があつたんですね！

……ってそんなくだらん事いいからっ！

「いつくぞー！」律先輩の掛け声で、

「「「「「さいしよはグー、じゃんけんばい！」「」「」「」

――――――――――

「重いよお」……」

「唯先輩、カバン持ちますか？」

「ありがと」

結果、唯先輩の負け。

でも、部室にある私物が多く、そのため持ち帰り命令のせいで重そうなカバンも抱えている唯先輩があまりにもかわいそうなので、僕が代わりに持った。

「よいしょっ……ギターよりも重い……」

あゝあ。気を遣わなきゃ良かった……

「なあ、棚とか必要じゃないか？」

澪先輩が持っているのは、ホームセンターのチラシ。いつの間に

……？

「あれ？ 棚なら部室あったんじゃないかしら？」

と、ムギ先輩。

確かに、棚はあるはず。なんでわざわざ……？

「それが……律と連のせいで全部ボロボロだよ」

「……すみません」部費のムダづかい……

「ほら、律先輩も謝ってください」梓先輩

「ごめenneっ」律先輩

「軽っ……」漣先輩

「じゃあ、これからホームセンター行くんだよね？」

興味津々な目の唯先輩。そしてそれ以上の方が……

「本当！？ 私ホームセンターに一度行ってみたかったの！」

ムギ先輩の家に一度でいいから行ってみたいです……。

「ムギはホームセンター初めてなのか？」

と、漣先輩。

「うん、早く行きましょう！」

ムギ先輩は先陣を切って、胸を張って先へ進む。

「ムギちゃん、待ってよ……」

背負った唯先輩のギターに、手持ちの先生のギターと、2つのギターを持った唯先輩が音を上げた。

「あ、ごめん」

ムギ先輩は唯先輩のセリフを聞いて、立ち止まって後ろをくると向く。気遣いができる所がムギ先輩らしい気がする。

僕もムギ先輩みたいに、気、遣えているかな……

「連くん？」

気付くと、目の前には梓先輩。

「あ……すみません。今行きます」

なんだろ……最近ボケーっとする時多い。

とりあえず先輩たちに追いつくために走ろうとするけども……

コッソッ

……あ。

ドスンッ！

つまずいたあげく、唯先輩の規格外の重さのカバンでバランスが崩され、見事に転倒。

「大丈夫か、連？」

と、澪先輩。他の先輩は「あ……」という表情。

「……はい。全然平気です」

立ち上がって、汚れた箇所をはたく。

「連ってドジだよな」

そうなんです。律先輩僕はドジなんです。

「うん。そうだね」唯先輩

「お前には言われたくないわ」澪先輩

「早く行こうよ、ホームセンター！」

相変わらずムギ先輩の瞳は輝いている。

「そうですね。早く棚買って、楽器屋に行きましょう」

と、梓先輩。

こんな感じの、他愛のない感じが、僕にとっては幸せかも…。

5 ホームセンター！

「……これで整頓がはかどるな」 澁先輩

今、ホームセンターを出て楽器屋に向かっているところ。棚を無事に購入し、学校に配送するようにしたけれど、そこまでたどり着くのにこんなエピソードが……

――――

「ここがホームセンター……便利グッズがたくさんあるんだよね！？」

興味津々なムギ先輩。僕は4歳位の時に初めて行きましたが、全くつまらなかったんですけど。

そりゃ、何も分からないですからね。唯一好きだったのはネジ売り場。何でネジ売り場好きだったんだろ……

「じゃあ私ちよつと行ってくるね！」

ムギ先輩はくると背を向け、胸を張って突撃していった。

なぜだかその背中まるで戦場へおもむく兵士のように非常に勇ましく見えた。

初めてですから……ね。

「あたし達も続くぞ！」

「おー!!」

なぜだかその後を追う律先輩、唯先輩。

ちよ、目的は棚だけですよね……？

「おい律、唯！」

零先輩の制止もどこ吹く風。先輩の口からため息が漏れた。

これからももちろん棚を見に行きますよね……？

「私たちも見て回るか」ええつ。

「先輩！棚買うだけじゃないですか！」

梓先輩は僕と思考が同じだったらしい。

「時間もあるし、たまには息抜きしてもいいんじゃないか？」

確かに僕も入部してからの一週間は、梓先輩の超熱血ギター指導で疲れているし……今はなんかペットコーナー辺りで癒やされたい気分。

「……そうかもしれないですね。久しぶりにギターをたくさん教えて、私も少し疲れてます」梓先輩もそうだった。

「なんか、ペットコーナー行きたいです」

くすつと笑う梓先輩。

考えている事ビンゴ過ぎる……！

「あ、僕もそこら辺行きたいとか思っていました」

ここまでビンゴだと口挟みたくなるのが普通ですよ？

「じゃあ、とりあえず棚見つけた後、一緒に見てみる？」

「はい」即答。楽しさの陰に隠れて、意外にも疲れていたんだ僕は……

—————

ということで零先輩と梓先輩と僕の3人で散策スタート。

「これだけ物あると見てみたいというのも分かる気がするな」

僕らだけで見てみると、改めて多いと思った。一体どれだけ種類があるんだろう……

「あ、ムギ先輩」

梓先輩がキッチン小物のコーナーでムギ先輩を発見した。

「梓ちゃん見て！ このテープで古雑誌を簡単にまとめられるんだって」

「あつ、私も欲しいかもです。結構雑誌買っていて、それが溜まっ

ていて……」

雑誌……？どんなの読んでいるんだろう……？

「梓先輩は、雑誌どんなの読むんですか？」

「“ROCKIN'ON”かな」

へ……？ 聞いた事ない……。

「梓、それってどっちの？」 澪先輩

「あ、どっちも買ってます」 梓先輩

「へえ……私も両方買っているんだ」 澪先輩

「そうなんですか！」 梓先輩

あ、あの……

「あずにゃーん！」

二人が雑誌の話で盛り上がっている所に唯先輩参上。

「あ、唯先輩」

大人の対応。

「こっちこっち！」

強引に梓先輩の手を引つ張る唯先輩。

「唯先輩やめてください!」

「来てみな来てみな」

……誘拐されちゃった。

「……ムギ、ちょっと唯追ってくる」

と、澪先輩。

僕もちよつと興味あるし……

「僕も行きます」

「うん。私はまだここで見てるね。あ、これとか……」

本当に楽しそうだな……。

でも、ホームセンターに限らずとして、よく女子って買い物に行くけど、買い物ってそんなに楽しいのかな?

僕は服とか買うのは面倒なだけっ! キツパリっ!

とりあえず、澪先輩と一緒に唯先輩の後を追って工具品コーナーへ。

工具品コーナー……？

「見て見てあずにゃん！　これぜーんぶネジなんだよ！」

ネジ……ネジ……

何、この体から湧き上がってくる興奮。僕の12年前の眠れる無垢なる魂を呼び覚ます“ネジ”という響き。

小さな時好きだった物って、ずっと好きなんだな……

僕は無意識に唯先輩がはしゃいでいるネジコーナーへ一直線に走った。

きつと今の僕なら音の速さにも勝てる！

「おい連、店の中は走るな！」

5 ホームセンター！（後書き）

ちなみに、雑誌“ROCKIN'ON”は実在します。無印と“JAPAN”の2つあり。……間違っていたらご指摘願います……

6 査定！

「それにしても、あの時の連くんは……」

「私たち……ついて行けなかったですね」

唯先輩に言われたのは結構ショックかもしれない……

「なんでネジの良さが分からないんですか!？」

「……分かるか」……」

あの後、僕はネジに対して暑苦しく語ったあげく澪先輩にゲンコツを食らって思考停止させられた。

痛かったな……本当に。頭をさすり、律先輩を心から尊敬する。

「それにしても重い……じゃんけんで4連敗って……」

山中先生のギターケースを持つ律先輩。4連敗ってある意味奇跡……。

「律先輩、代わります」

「お……すまんねえ……」

やっぱり先輩にこんなことさせたくないですからね。後輩は雑用が仕事！

あれ？ 考え方オツサン臭い……？

「でも、ムギはすごいよな。あんなに持っても笑顔でいられるし……」

ムギ先輩の両手には、大量の便利グッズが入ったレジ袋が。全部、ホームセンターで購入した物。

制服の女子高生がこんなに品物持ち込んで、店員さんきつと驚いただろうな……

「ふふ」……あ、楽器屋が見えてきたわよ」

前の方に“10GIA”という楽器屋が見えてきた。軽音楽部御用達の店。ムギ先輩系列という噂……

「なんだ、あとちょっとだったじゃん……」

肩を回しながら律先輩がぼやいた。

この時、あんなバカでかい収入が入るとは、誰も？ 思わなかった……

――――
査定待ち中。僕はなんとなく、バンドのポスターを見ていた。

たくさんあるんだな……僕らと同じくらいの人数のバンド、3人で活動しているバンド、更に多い人数で活動するバンド。

目指す方向性もまた様々で、ビジュアル系だったり、多彩な楽器を使うことを売りにしていたり。

……さすがに昔の軽音部みたいなヘビメタバンドはなかったけど。
「この位の人数がいたら、どんなサウンドになるんだろう……」

梓先輩もポスターを見ていた。見ていた、というよりは眺めていた。

「そうだな、このくらい部員入れればいいのにな」

後ろにいた澪先輩の言葉に、

「……そうですね」

と、うつむき気味に返事をする梓先輩。

……でも僕は、声を掛けづらかった。なんとなく、寂しげに見えた。

……もしあの時、他のヤツも全員入部していたら。

「査定でお待ちのお客様」

「あ……はい」

澪先輩と梓先輩の後に続き、レジに向かう。すでに唯先輩たちはレジにいた。

果たしてどれくらいの金額がつくんだろう。でも、あのカビ臭さは……。

あまり身構えず、期待せず、自然体で査定金額を聞くつもりだった。

他の先輩達もあまり緊張していない。

そして、気になる店員さんの表情も、ごくごく普通の爽やか営業スマイル。

……しかし。

「このギターですが、50万円で買い取らせていただきます」

へ……？

店員さんがサラリと言った言葉に、自分の耳を疑った。

「あの、何円……ですか？」もう一度。

でも、返ってくる答えは変わらず。

「50万円です」

まじですか。

「「「「「ごじゅうまんえんっ!?!」「」「」」

約1名を除いた、桜高軽音部の声が店内に響き渡った。そして、石化。

…… たったの1日で我が軽音楽部は50万円の臨時収入を得ました。

7 ブラック！

50万円。その金額を聞いて固まった僕たち。

だつてさ……う〇い棒5万本買えるんだよ！？　これだけで一生暮らせ……ないね、うん。

水が無いと死ぬね。

硬直が一番早く解けたのは意外にも漣先輩だった。

「ごちそうさまでしたっ！　……さてっ！」

深々と頭を下げた後逃げたっ！？　辞退ですか！？

「ちょっと待て漣」

そんな漣先輩の肩をガシっとつかむ律先輩。

「ひいいっ！？」

なんか……精神状態があまりよろしくない……。

漣先輩は律先輩にベースのケースをつかまれたまま体を向けられたあと、涙目になって、両手を激しく振りながらこう弁明した。

「だって、ご、500万………うじうじ……5000万円……！」

「ケタが違うぞ………」

しかし、その横で。

「ありがとうございます」

なんのためらいもなく、50万円分の厚い封筒をニコニコ笑顔で受け取るムギ先輩。

「おめーは躊躇なさすぎだっ！」

今日は律先輩のツッコミが冴えていますね。

それにしても洩先輩とムギ先輩の違いがスゴすぎる……。

「……」

「……」

唯先輩と梓先輩はまだ固まっていた。……僕もそうだけど。

「あの一、ちよっといいですか？」

なるほど、なぜこんなバカでかい金額がついたか探ろうというんですね、律先輩。

「なんでこのギターにこんな高い値段がつくんですか？……もしかしてムギに気を遣って……」

後で聞いた話。この店はムギ先輩系列の店。だから25万円を5万円に値切れる訳だ！

ただ、今回は違っらしくて。

「いいえ、それは関係ありません。このギターは1960年代に生まれたモデルでして、当初は材料や形が定まっておらず、様々な仕様ของマイナーチェンジが繰り返され、現在の形になったといわれています。お客様にお持ち頂いたこのギターは、フィンガーボードにハカランダという、今となつては大変貴重な木が使われており、高い値段の1つの要因となっております。残念ながらこのギターはストップテイルピースに交換されており、フルオリジナルではないため、多少値は落ちますが、ストップテイルピースの方が演奏性に優れており、こちらを好むお客様も多いため、それほどマイナスにはなりません。また、このギターは長い間しまわれていたようで、傷やフレットの減りがほとんど無く、年代物にしては保存状態が大変よろしいため、この値段で買い取らせていただきます」

……全く分からん。店員さんスゴく爽やかスマイルだけど、頭がショートしそう。

横を見ても僕と同じような表情になっている方がいるし。

さて、どうするのこの空気。

「……と、とにかく貴重なギターなんです」

無難に締めましたね。

「……肉厚っ！」

「ほえ？　このこと？」

「違うから」

ただ今、マックスバーガー。律先輩が封筒の中身を覗き見て言った一言に、唯先輩が反応したの図。

……というか唯先輩、ビッグマックス頼んで夕飯平気なんですか？

「50万円あるんだし、奮発してポテトはXLサイズ！釣りはいらねえ！」

「律、もしかして使ったのか！？」

いや……明らかに冗談だと思いますよ洩先輩。

「……いや。本当は自腹だけだな」

ほら。律先輩も決まり悪そうな顔しちゃいましたし。

「でもいいんですか？こんな大金もらっちゃって……」

梓先輩は心配しているようだ。僕も内心同じ気持ち。

「仕方ないだろ、さわちゃんが部費にしろって言っただからさ」

「ブヒブヒ」

そのアンサーをする律先輩に、意味も無く豚のマネをする唯先輩。

唯先輩、鼻……。

「……でも」

それでも遠慮する梓先輩に、律先輩が実力行使に出た。

「ほれ」

りつせんぱいは さつたば（ 8 まんえん ）をつか
った！

「……私、欲しいエフェクターがあつたんですよ……」

あずさせんぱいにくろいこころがめばえてしまった！

「あずにゃん陥落」唯先輩

「バ、バカ！大金を見せびらかすなっ！」

みおせんぱいは まともないけんをとなえた！

りつせんぱいには きかなかった！

「ほれ、澪も8万だぞ」

りつせんぱいの さつたば（ 8 まんえん ）こつげき
！

「うつ……」

みおせんぱいに　くろいこころ　が　めばえて　しまった　！

……結果。

「「「フフフフ……」」」

「みんな……？」

「先輩……」

黒いオーラが……。

8 棚到着！

「先輩、トラック来ました！」僕

「本当か？」律先輩

50万円事件の翌日。昨日買った棚がホームセンターから届くというので、校門の外で待っていた。

50万円のインパクトで、ムギ先輩以外この事を忘れていた。

ちなみに、僕はアンプとか欲しいけども、それはバイトをやつてそれで稼いだお金で買うことにしようと思う。

だってそうした方が愛着湧くし、「部費にして」とか言われたけど他人のお金であることには変わらないでしょ？

つまり、自分のもんは自分の金で買う！これだけは譲れないっ！

何年生まれとか聞かないで下さい。バリバリ平成生まれですから。

「よし、思いっきり手振るぞー！　　おーい！」

「こっちこっちー！」

律先輩、唯先輩、ムギ先輩が手を大きく振ったりピョンピョン跳んだりして場所を知らせる。

「ここ大きいんだし、手振らなくても分かるから」

漣先輩、保護者……。

律先輩たちのお陰なのか、はたまたいなくてもよかったのかは不明だけど、とりあえずトラックは通り過ぎることなく僕たちの目の前に停止してくれた。

このあと、棚運ぶんだよね？ ということは名誉挽回の大チャンス！！

「棚運ぶんですね！ 僕やります！」

しかし。

「ううん、業者の人がやってくれるから問題ないよ。ありがとう」

と、梓先輩。

優しく言ってくれる辺り気を遣っていただいてますね……。

—————

グレーの棚が運びこまれて組み立てられ、業者さんに“ありがとうございました！”と大声で言って、その後まとめてあっただけの荷物を棚の周辺その他に全てまとめた。終わった頃にはなぜか蛇口がピッカピカになってた。

嬉しそうな表情と昨日の出来事から、ピッカピカにしたのはムギ先輩と断定。

「スツキリしたな……ってこれ……」

澪先輩、梓先輩と転倒する恐れがなくなった部室を見ると、
澪先輩が体験入部の時にいたカエルの置物を見つけた。

「唯！」

「ひゃあっ！？」

名前を呼ばれ澪先輩ばりに驚く、唯先輩。てかあんなものどこで
手に入れたんですか……？

もしかして薬局？

「昨日全部持ち帰るって言ったでしょ」澪先輩

「だってまだこんなにあるし、それに昨日、たくさん持って帰った
から憂に怒られた……」

憂……？

「姉の威厳まるでナシだな」

不審に本を棚に載せる律先輩のツツコミから、唯先輩の妹と推定。

「というか律先輩……？」

「律も何やっているんだ？」

澪先輩がきつめの口調で言うけど、律先輩は慣れているのか、一

切動じずに……

「きゃはっ」

しかし直後。

「みんな」

山中先生の突然の乱入……いやご来訪で。

「うおおっ!?!」

ついにこの時が……!!

いや、僕にとっては全く関係ないけども。

8 棚到着！（後書き）

短めですがDSi文字数の関係で半端になりそうなので区切ります。

次回は律さんVS山中先生！

9 勇者の戦い！

「あら、棚届いたんじゃない！ うん、いい感じ」

……皆さん、何か様子がおかしいですよ。
律先輩に至っては謎のスローモーション。

「ちょっとお、人が声かけているのに何、その態度」

慌てて漣先輩と梓先輩の間、つまり山中先生の目の前に位置取りをする律先輩。ちなみに、僕は梓先輩の横です。

え……やっしてしまうんですか？

「うっほう、さわちゃん！ やっぱり来てたんだ、気づかなかつた〜！」

山中先生は、そんな明らかに挙動不審な律先輩に（両隣もそうだけど）全く気付かず……

「そっいえばあのギター、何円で売れたの？」

と。やっぱりそう来た。挙動不審だと気付かれるのも当然怖いけど、軽く核心に入られるのもまた別な意味で怖いなあ……。

でも、梓先輩と漣先輩と僕で「もし値段を聞かれたら、素直に50万円って答えて下さい」みたいな忠告をしたからきっと平気だ。

律先輩は裏切らない！

「えっと……1……万円」

ぎゃあああああつ！？ 49万円サバ読んだあああつ！？

しかし、山中先生の反応は、

「やっぱりそんなものか……」

という全く律先輩のことを疑っていないものだった。

止められません。この空気じゃ律先輩を。もしかしたら成功する！というムード全開だ……。

「そうそう、どうやら50年前のものだったらしくてさ……」

律先輩が調子という波を起こす。

「あら？ ということはさわちゃん実は50代でいらっしやる？」

その調子という波に思いつきり乗る唯先輩。

唯先輩、それ持ち上げていませんから！ 逆に蹴り落としてますから！

というかこれヤバすぎじゃ……！

「どこにこんなピチピチした50代がいるんじゃーい……」

「すみません、すみません」

ドスの利いた声で怒鳴る山中先生、ひたすら謝るのは僕と梓先輩と澪先輩。

……波の被害はこちら側に来ました。

「もう、お父さんの友達にもらったって言ったじゃない！」

「あはは、それは失礼いたしました」

手をこねながら退散する唯先輩。なんで唯先輩にはカミナリ落ちなかったのだろう……。

一つ落ち着いた所で。

「じゃ、とりあえず買取証明書ちょうだい」

「へっ？」

「買取証明書よ、少しでも部費に計上するんだから当然でしょ？」

終わりましたね、律先輩。他の先輩も「ああ……」って顔をしています。

「もしかしてもらって来なかったの？」

ジリジリと追い詰められ、ブレザーのポケットから証明書を恐る恐る取り出す律先輩。

あれ……？ 澁先輩と梓先輩の表情が心なしか残念な表情に見えたのは……？

「なんだ、あるんじゃない」

あくまで普通な山中先生。それに対して律先輩はガチガチに震えた手で証明書を渡そうとする。

これが山中先生の手に渡ったら、僕たちは土下座決定だ……。

少しずつ上がっていく律先輩の手。早くなる僕の心臓の鼓動。

しかし。ここで折れる律先輩じゃなかった！！

「あむ」

へ……？

「「「きゃーっ！？」「」「」

律先輩は、文字通り証明書を食った。

「「「くーえ！　くーえ！」「」「」

そして始まる先輩達の食べ食べコール。

「ちよっと、出さない！」

必死で出させようとする山中先生。

僕はどうする？

「くくくくーえ！　くーえ！……」

ええい、こうなったらもうヤケだー！

「くくくくーえ！　くーえ！」

先輩達と一緒に食べ食べコール。頑張って下さい先輩！
あなたは軽音部員の勇者です！！
あ

しかし。

「出さない……」

「きゃああああっ！？」

デスデビル山中の威嚇であっけなく戦いは終わった。

僕は、灰のごとく白くなった。

10 勇者の末路！

戦いに敗れた勇者の行く末は……

「うつそー、50万円で売れたの!？」

「「「「「すみませんでした」「」「」」」」

……土下座で反省の念を見せなくてはならない。本当の戦争ならば死、あるのみだけだ。

「結構貴重なものらしくって……!」

ムギ先輩、それは罪を犯した僕らが言うべきセリフ……あなたは悪くありません……。

「どうして隠そうとしたの？」

声質はデスデビル山中の100万倍丸くなっているけど、逆にそれが自分たち悪い事したな……っていう暗い気持ちにさせる。

「おらあ、50万円という額に気が動転しちゃって……」

……律先輩、本当に反省してますか？

でもって、部費横領未遂の罰は。

「じゃあ、りっちゃんが言った1万円を部費として計上するから、その棚を買ったことにしちゃいなさい」

つまり、没収。全て山中先生の懐へ。

「正直に言ってくれたら、全部あげたのにな」

こんなこと言われるなんて、まるで小学生の気分だ。

悪いのは僕らだけど、言い返せないのがヒジョーニクヤシーです。

「そんなぁ……」

50万円という大金を目前にして逃してしまった、軽音部の勇者、律先輩。

「全く、律が1万円とか言うからだ」

「そうですよ、私達はきちんと言いましょう、って言いましたよ。……心が汚いんですね」

「生まれつきそうなんだよ」

勇者の失敗に痛烈すぎる批判を浴びせる、漣先輩と梓先輩。

というか……2人とも、横領に加担してましたよね……？

「……どの口が言うかっ!!」

2人を交互に見て、苦し紛れの反撃をする律先輩。

かわいそすぎる律先輩をほっっておけなくて、僕も一言。

「……僕が言うセリフじゃないと思うんですけど、まず人の罪を責める前に、自分の罪を反省して下さい」

「「うつ……」」

今回は律先輩に味方します。

「さわちゃん！」

唯先輩の声だ。そして、必死に命乞いをするかのような声色で……

「その札束で、ほっぺを……私のほっぺを殴ってくださいっ！」

……え？

思わず顔を上げてしまう。もう他の先輩達はすでに顔を上げていた。

結構深く真剣に受け止めて反省していたのって僕だけだったの……？ とちよつと損な気分になった。

山中先生がサツと札束を封筒から取り出し、唯先輩のほっぺをベチツと殴る（というか叩く）と……

「……しあわせえ」

超満面の幸せそうな笑顔になった。

「お前はいいよな、平和で……」

でもなんだろ。唯先輩の幸せそうなあ表情を見ると僕も……

ペチッ

「唯先輩、気持ち分かります」

「でしょ〜?」

山中先生に札束で殴られる僕、同情する唯先輩。

「お前もかい!」

ツッコむ律先輩は……申し訳ありませんがスルーします。

なんだろう……お札の絶妙な硬さと触感といい、1万円札とほっぺが触れる時に広がるこの素朴な高い音といい、柔らかい衝撃といい……

「本当に、幸せですね!」

「だよねっ!」

「……何だこのよく分かんない意気投合」

――
帰り道、僕は梓先輩と2人並んで歩いている。僕は、道が梓先輩

と途中まで一緒だ。ちなみに、僕の方が家は少し遠い。

じゃ、何で体験入部の帰りに律先輩がいたのだろう……と思ったけど、きっと軍人だから、入部希望者の僕のことを尾行していたんだろうな。

梓先輩との帰り道は、いつもはギターの話だったり、梓先輩の友達との面白い話題だったりとかで楽しいんだけど、今日は違った。

「ごめんなさい……もし、僕が他の3人も勧誘できていたら……」

「いいよ、連くん。私達は来年もあるし……あっ」

「どうしました?」

「連くん……来年いないんだよね」

10 勇者の末路！（後書き）

すみません、字数制限が厳しいので中途半端です。次回は結構重め……でしょうか？

11 寂しい……？

僕達が帰る時、校庭では女子テニス部が後輩にラケットの振り方を教えていた。

その時の梓先輩の寂しげな横顔を見て、僕が思ったこと……

もしあの日、僕と一緒に来た3人が全員、軽音楽部に入部していたら。

そして、2人きりになった帰り道。日の位置も低くなっていき、空もオレンジ色から紺色に変わりつつあった。

「あの……梓先輩。寂しい……ですか？」

聞くのは失礼かな、とは思っていた。けれど、僕はそれが聞きたくて仕方なかったのだと思う。

自分でも驚くほど無意識に、この質問が出た。

梓先輩は、空のどこか遠くを見つめて、

「うっん、そんなことないかな。毎日毎日、みんなと活動？　しているのが楽しいから」

確かに、少人数だけど軽音部はとても楽しくて、寂しさなんて全くない。

でも、その果てない空を見つめる横顔は、どこか寂しそうに見えた。

僕は思い切って言ってみた。

「嘘つかないで下さい。本当はもっと、新入部員が入って欲しかったんじゃないですか？」

梓先輩の表情がはつとしたものになった。

「凶星だったのかな……？」

先輩のツインテールが、風に少しなびく。

「……分かつちゃったかな？」

おどけて言う梓先輩だけでも、寂しさは隠し切れていない。

「本当はもっと、後輩が欲しかったなって思った。だって……先輩達が抜けたら2人だけになっちゃうから……」

今の軽音部は3年生4人。2年生と1年生が1人ずつ。つまり、先輩達が引退したら、僕らは毎日2人だけで活動しないといけないのだ。

もし……あの日に。

「ごめんなさい。もし僕が他の3人も勧誘できていたら……」

梓先輩は、優しい表情で言ってくれた。

「いいよ、連くん。私達はまだ来年もあるし……あっ」

ふと立ち止まる梓先輩。

その表情はさっき以上に寂しいものになった。

「どうしました？」

「連くん……来年いないんだよね」

「はい……」

覚えていたけど、忘れていたかった事実。

どうして、こんなにいい人たちに出会ったのに、別れなきゃいけないんだろう……

梓先輩は、視線を僕に移した。先輩の瞳の奥に、やっぱり寂しい顔をしてた僕が見える。

梓先輩は、にっこり微笑んで言ってくれた。

「でも私、連くんが入った時ものすごく嬉しかった。だって、私に

初めて後輩ができたから」

「梓先輩……」

そして、梓先輩は思いっきり笑顔になって。

「私、さっき寂しいと言ったけど、よく考えたら、やっぱり寂しくなんかないや」

自分の部屋の、暗くなった天井を見上げて考えてみる。

どうなんだろう？

部員って、多い方がいいって訳じゃないよね？

あまりにも多いとまとめるのが大変だし、今の軽音部のような雰囲気もなくなってしまうと思う。

でも、あと2、3人居てもいいんじゃないかな？

「やっぱり寂しくなんかない」って梓先輩、言ってたけども……

本当は梓先輩、寂しいんだろう……。だって、来年1人だから……。

何で僕、転校しなきゃいけないんだろう……。

机の上のケータイが鳴った。律先輩からのメールだ。

From：律先輩

To：上野 連

Sub：何がいい？

ちーっす♪

今、さわちゃんの金で何買おうか全員に聞いているんだけど、何かいいもんじゃない？

そう言えば、山中先生が、50万円で何か一つだけ好きな物を買ってあげるって言ってた。

そうだな……やっぱり。

From：上野 連

To：律先輩

Sub：（無題）

梓先輩が寂しそうだったので、新入部員をプレゼントしてあげたらどうでしょうか？

例えば……カメとか？

どう……かな？大変だと思うけど……。

まさか、このアイデアが唯先輩とかぶった挙げ句、採用されるとは思いもしなかった。

12 トンちゃん！

翌日、梓先輩には内緒で、ホームセンターに、梓先輩が欲しがっているカメ（唯先輩談）、>スッポンモドキを飼うための道具を買いに行った。

あ、もちろんお金を払ってくれる山中先生もいます。

それにしても、まさか僕と唯先輩の意見がかぶるなんて……

ただ、僕は梓先輩が欲しがっているからじゃなくて、少しでも梓先輩が寂しくないようにしたいな、という理由。

それに、実のところ喜んでくれるかあんまり自信ない……。

更に、家にカメを飼っているという我が軽音部のカメのエキスパート、ムギ先輩のこの一言が僕のわずかな自信さえもぶち壊した。

「でも、スッポンモドキって飼うの難しいわよ」

ムギ先輩が言うには、まず飼育に手間がかかる、そして費用もミドリガメなんか比べてかなりかかるという。結構な覚悟が必要、とまで言った。

しかし。

「あずにゃんはスッポンモドキがいいんだって」

その後、みんなで必死に考えた挙げ句、この唯先輩の自信满满的な一言が決め手となって、部員全員覚悟の上で飼う事に決めた。

いつも梓先輩にくつついている唯先輩の自信を見る限り、これは正解かな……？

ということだ。

「うわー、結構お金かかるんだな……」

今日は飼育環境を整えるためにスッポンモドキ本体は買わず、水槽を置く台やらフィルターやらヒーターやら蛍光灯やら砂やらカルキ抜きやらを買ったけど（水槽は元々あったものがあるためそれを使う）、律先輩がつぶやいたセリフの通り、

「4万6000円になります」

いいお値段。そんじょそこの安いギター以上。

「水槽があつたらもつとかかっていたわね……」

レシートを見て、予想以上の金額に肩を落とす山中先生。

よく考えると、おそらくアンプやエフェクターその他を買うよりも安い気はするけどね。

「まさかカメを飼う準備だけでそんなお金かかるなんて……」

悔ってましたね、山中先生。

「山中先生、生きものですから、なるべくいいもの買ってあげないとかわいそうですので」

それに……このカメは僕らの後輩が受け継いでいくもの。変に安いもの買つと、後々大変な事になるので。

「あずにゃん、喜ぶかな？」

まだスッポンモドキ本体を買ってもいないのに、ウキウキ気分の唯先輩。

「唯、スッポンモドキはまだ買ってないぞ」

澪先輩の保護者的ツツコミ。

「でもでも、一週間したら……」

なぜ一週間後か？　というと、簡単に言つとスッポンモドキが暮らせる水を作るためにはこれ位の期間が必要だから。

……と、ムギ先輩が言つてた。

「……あずにゃんが寂しくなくなるんだ」

唯先輩、嬉しそうだな。人が喜ぶことが、きっと唯先輩にとっての幸せなんじゃないかって、ふと思った。

翌週。

「新入部員のトンちゃんだよ」

「先生に頼んで買ってもらったんだ。梓ちゃんの新しい後輩だよ」

フィギュアスケートの選手もうなる見事なターンで水槽の中のスッポンモドキ、>トンちゃんくを紹介する唯先輩、ムギ先輩。

僕は律先輩と澪先輩の横でしゃがんで傍観している。

きつと喜んでくれる！ 思ったけど。

「へえ」……」

棒読み……。

やっちゃった……？

「あずにゃん？」

予想外の事に戸惑う唯先輩。

「嫌な予感がします……」

思わず漏れたこのつぶやき。

「……私も」

「……私もだ」

それに賛同して頂いた（嬉しくないけど）律先輩、澪先輩。

これ……やっちゃった……？

12 トンちゃん！（後書き）

今回もDSi字数制限、きわどいです。

次回、完結。突然の新入部員？ 入部に薄い梓さんのリアクション。どうなる唯さん！！

13 気持ち！

「おいおい、梓がこのカメ好きだって言ったの、唯だぞ」

隣にいる律先輩が立って、唯先輩に訊く。

「だってあずにゃんが欲しそうに見つめてたから……」

唯先輩は弁明するけれど……

「それは唯先輩の方でしょう？ 私はまだ、変な顔だなあ〜って見ていただけです」

うわぁ……。しゃがんだまま隠れて肩を落とす僕。

「やっちゃまったな、唯……」

澪先輩がため息混じりで言えば、

「うう……」

崩れ落ちて座り込む唯先輩。

唯先輩、同じ提案したのになんか悪いです……。

「でも……何で急にカメを……？」

梓先輩が不思議そうな顔で、カメを飼おうとなっ
たいきさつを聞いてきた。

「えーと……その……」

頭をかく律先輩。

「だって、梓が寂しそうだっ
たから……」

「連くんしか入ってこなかつ
たけど、せめて……」

澪先輩、ムギ先輩も何とか唯先輩の優しさを伝えようとしている。

僕も何か……。

と思った瞬間、梓先輩はしゃがんで
いる僕の方を向いて、

「連くんは知っていたの？」

と、聞いてきた。

前触れもなく聞いてきたので、

「え……？あ、えっと……」

と、あやふやになってしまふ。

「梓」

声がする方を振り向くと、律先輩がいた。

「連も、梓のこと気にかけていたんだ。梓のために何か買ってやらないかって。……まあ、そのアイデアがまさかの唯と同じカメだつてことは笑っちゃったけどさ」

「連くん……」

律先輩に「ありがとうございます」と目で送ったら、律先輩は握った右手の親指をクイツと上げた。

梓先輩は、ふらっとトンちゃんの水槽に行つて、

「もう、こんな早とちりで飼われちゃったら迷惑だよな」

と言つて、カン、カン、と人差し指で軽く叩いた。

するとトンちゃんは「うん」と一回……

「頷いた！」

全員で声が揃った。

「かわいい！」

おまけに唯先輩が釘付けに。

確かに……特にブタっぽい鼻とかがかわいいな。

「でも、大丈夫。私がちゃんと面倒見てあげるからね」

梓先輩、良かった……。

「いやいや、私もちゃんとするし〜!」

「無理でしょ、唯先輩には」

「そんなことないもんっ!」

その瞬間に澪先輩が撮った写真には、長イスに座ってピースするムギ先輩の後ろで、梓先輩に飛びつく唯先輩の後ろ姿が写っていた。

なんだかんだ言っで、2人って仲、とても良いな。

なんか2人の会話とかを見聞きしているだけで、幸せな気持ちになれるというか……。

心が、あつたかくなる。

「これにて一件落着」

律先輩がどこかの時代劇風にそう言った瞬間。

嬉し過ぎる衝撃的出来事が起こった。

パンツ！　と勢いよく開かれる扉。

驚いて扉の方を見ると……１人の背の高い、ポニーテールの子
がいた。

「あの……軽音部ってここですか？」

「そうだけど……」

さすがの律先輩も、あまりにも唐突な出来事に戸惑っている。

「あの、私を入部させて下さい！」

……え？

「……あれ？あのー、私、軽音部に入部したいんですけども……」

「「「「「ええええつつ！！？」」「」「」「」

カメラ部ついでに本当の新入部員が来ました。

13 気持ち！（後書き）

これで、アニメ版2話完結です。なんかオリジナルに沿って小説を作るのってかえって難しい……。BD無くて泣いた……。

次回。新入部員に関してのエピソードを番外編で！

まさかの！ <・前編>；

「ふかさねあい深沢葵です」

黒髪のポニーテールで、とても背が高い（漣先輩以上。ちなみに僕は漣先輩より小さい）緑リボンタイの女子は、すっかり軽音部独特の空気になじんでいた。

いや、なじみすぎでしょ。

先輩達も、あの超嬉しい衝撃的出来事から落ち着きを取り戻して

……

「楽器は何弾けるの!？」梓先輩

「誰を尊敬しているの!？」漣先輩

「どう!？ このケーキ!？」ムギ先輩

「好きな食べ物!？」唯先輩

「連はタイプに入るのか!？」律先輩

……なかった。というか……

「律先輩何聞いているんですかつ!？」

タタタタ、タイプかって……。

「いえ、私よりも15cm位高い事が絶対条件なので……」

答えますか！？ しかも本人の前で堂々ムリって……。

とうか深沢より15cm高いヤツって阿部くらいしかないよ
うな……。

それは置いといて、機関銃のごとく……いや、ピンポイント豪雨
のごとく降りかかってくる先輩の質問に、深沢があからさまに困っ
た表情をしているので、

「先輩、ちょっと落ち着いて下さい！」

「……あ」「……」

もう既に手遅れ。深沢は先輩達のオーラにやられて白くなってし
まった。

♪

「サックスと、あとベースをちよこつとできます」

「……サックス……？」「……」

バンドにサックス……？ サックスって、どちらかというとジ
ヤズでよく見る楽器だよね……？

「でも、面白いかな」

と、漣先輩。

「そうですね。何か、聴いてみたい気がします」

梓先輩が漣先輩に頷く。

しかし、根本的なことをお分かりでいらっしやらない先輩が若干一名……。

「ねえねえ。サククスってなあに？」

「「「「「「は……はああああっ!?!」「「「「「「

今日2回目の大合唱。ゆ、唯先輩……。

「えっと、サククスというのはですね……えーっと……」

必死に説明しようとする深沢。これ口頭で説明するの難しくない……？

困った様子の深沢に、漣先輩が、

「なあ、楽器とかあるのか？」

「今日はちよつと……」

「じゃあ唯、また明日な」

ナイスフォロー、さすが漣先輩。

「はあーい」

唯先輩はその点素直。

♪

「あと、ベースもできるんだよね？」

ムギ先輩の発言に対し、なぜかしきりに深沢の手元を見る漣先輩。
そして……少し落ち込んだような気がした。

「あれ、漣ちゃんどうしたの？」

ムギ先輩が漣先輩の異変に気づく。

「左利きかな……って思ったけど、やっぱり右利きだった」

ああ……

「あ、でもベースは親戚から譲ってもらったものなので、レフティです」

「本当！？」

漣先輩過剰反応。目がキラキラ輝いてます。

「じゃあ、弾いてみてよ！」

唯先輩も目が輝いている。ウキウキなんだろうな、腕前が見られることに。

実際僕もそうだけど。

「私の貸すから、な？」

漣先輩が一旦立ち上がり、スタンドにあるベースを持ってきて、深沢に渡した。

「ありがとうございます」

「ピックはいるか？」

「あ、いいです」

深沢がベースを慣れた感じで肩に掛けると、漣先輩は長イスの前に僕らの方向を向かせて立たせた。

「さあ！」

律先輩がまくし立てる。

「えっと……じゃあ行きますね」

普通いきなりソロやってみて、なんて言われたら動揺するもんだと思うけど、深沢からは一切そんな感じがせず、逆に自信に満ち溢れている感じはする……。

なんか上手そう！

深沢は一つ呼吸して、弾き始めた。

♪ # @ * & a m p ; % : x ÷ & a m p ; @ % ÷ & a m p ;
+ @ ! ! ! !

……えええええ。

「どうでしたか！？」

「なんというか、その……楽しそうで良かったと思うけど……」

自信満々な深沢に事実を言いづらいムギ先輩。

「分かりやすく言うと……下手」

それを受け取った律先輩が、残念なお知らせを告げた。

「……ぐすん」

そりゃそうだろうな自信満々だったものをまさか否定されるとは
思わないからな。

「あ、でもやってく内に上手くなって行くから！ ね？」

梓先輩の必死のフォロー。

「やっぱ入るの……やめようかな……」

「ちよっそれだけはカンベン!!」

食い止める律先輩。深沢は超ネガティブモードに突入してしまった。

「平気だって。唯も連も入ってきた時は楽器未経験者だったし、それに……」

まさかの！ < 前編 > ; (後書き)

字数制限。後半へ続く。

まさかの！ <後編>；（前書き）

前の続きです。

まさかの！ <後編>；

「……それに、私達がいなくなると梓1人だけになっちゃうんだよな。私達は3年生だから来年で卒業。連も来年転校する事が決まっているんだ」

「えっ……？」

少し驚く深沢。僕が転校、というワードは意外だと思っし、たった1人になってしまふというのもまた意外なことだと思う。

「……なんか押し付けがましいけどな」

澪先輩の口の端っこが少し上がった。

「ベースの方も、私もレフティだから多分教えやすいだろうし……」

「あの！」

深沢が澪先輩の言葉を遮って顔を上げる。もう、陰りは見えない。

「私……ここで頑張ってベース練習します。そして、必ず澪先輩より上手くなってみせますから！」

「宣戦布告だ！？ と心の中でツッコミを入れつつも、ほんと安心した。」

「ふふっ、望むところだ」

♪
夕日沈みゆく、梓先輩との帰り道。

「まさか、本当に来るなんて思いもしなかったですね」

「本当だよな。まさか……ね」

梓先輩はとても嬉しそうな表情をしている。人数の少ない軽音部にとって、新入部員はたったの一人でも大きい。

「まさかカメが入部した後、人間が入部するなんて……クスッ」

梓先輩につられて、僕も少し笑った。その僕の笑いが、また梓先輩の笑いを誘って、少しの間2人で笑ってた。

けど、その後に梓先輩が僕に言ってくれた言葉が、とても嬉しかった。

「あと連くん、ありがとね。私、今嬉しい気分でいられるのって、葵が来た事もあるかもしれないけども、連くんが私の心配をしてくれたからなんだ」

「梓先輩……」

梓先輩は、にっこり笑って。

「ごめんね、心配かけちゃって。でも、もう私寂しくないから。こ

れから、今の7人で活動していける事、とても楽しみだから」

「はい！」

僕も、にっこりと笑い返した。

その日の夕日は、水平線の下に消えそうになっても、なかなか消えなかった気がした。

1 やだあっ！（前書き）

#3 “ドラマー”。原作沿いでやってきます。

1 やだあつ！

5月1日。早くも高校生活の約12分の1を終えてしまった。

僕ももう、すっかり軽音部に馴染めてきたかな。昨日に突如として入って来た葵は、軽音部のまったりな雰囲気はまだ慣れて……いるじゃんメチャクチャくつろいでるじゃん。

ちなみに前まで“深沢”だったのが今では“葵”と名前呼びになったのは、先輩達の圧力とご本人の圧力のため。異性を名前で呼ぶ事に慣れてきた自分が少し怖くなってきた……。

で、今はというと。

水槽の中を気持ち良さにスイスイ泳ぐトンちゃん。

「かわええ……」

水槽に顔をつける位トンちゃんにメロメロな唯先輩。

唯先輩ほどではないものの、ややうつとりぎみの表情でトンちゃんを眺めるムギ先輩と葵。

なんとなく、ただぼーっと眺める僕。

“カメの飼い方”という黄色い本をめくる梓先輩。

そして、やや遠目の間合いでトンちゃんの水槽を見る零先輩。

「あれ、澪ちゃん怖いの？」

唯先輩が水槽から顔を離して、澪先輩に問う。

「怖い訳じゃないけれど、かわいいと思う境地にはまだ……」

苦笑いで答える澪先輩。でも僕は初見でかわいいと思いましたよ？

「試しに呼んでみなよ？」

澪先輩は頬を少し赤くして……

「……トン、ちゃん」

するとどうだろう。トンちゃんは浮き上がり、水面に顔だけ出して、“ブヒ”と返事をした。

「……かわいいな」

澪先輩は小さくつぶやいた。

「それにしても賢いね、トンちゃん」

葵が僕に話しかけてきた。

「うん。名前に反応するなんて、幼稚園の時の僕以上だよ」

軽く自虐を入れて返すと、葵はふふつ、と笑った。あ、名前を呼ばれても返事しないだけだったから。良く分からない宇宙人語を話してたりとか、そういった類に属してた訳じゃないから。

「唯先輩、飼うと決めた以上は責任を持って飼って下さいね？」

強めの口調で注意する梓先輩。確かにスッポンモドキは数も少ないし、それ以前に世話を放棄するなんてかわいそうだし。

「エサを1日1、2回あげたり、一週間に一度水を替えたりしないとダメですからね」

「ギー太より手がかかるねえ……」

ギターのギー太とスッポンモドキのトンちゃんを一緒にするとえらく危険でしょう……

「そうだな。飼うの嫌だからと言って捨てたり出来ないしな」

「やだあああっ……！」

「わっ……！」

澪先輩がペットを飼おうとお考えの皆様必聴のとても良い事を言った直後、律先輩のシャウトが。葵オーバーに驚いて後ろに転倒。

「……律？」

澪先輩が様子を伺うと、長椅子にノートパソコンを置いて何かのDVDを見ていた律先輩は、鼻声で衝撃的な言葉を叫んだ。

「……ドラムやだあああっ……！」

え。驚愕のあまり言葉を失う。

「……………はあ？」

零先輩の気が抜けたような呆れ声の後に、

「な……………何でなんですか!？」

と過剰反応し、律先輩の元に駆け寄る葵。

「何で……………私、りっちゅあんしえんぶういお……………うつえええんつ
!-!」

大声で泣きつく葵。反応に困る僕達。

「……………悪い、嫌だとは言い過ぎたから泣き止んで」

「本当ですか!？」

瞬時に泣き止む葵。

「「立ち直り早っ!-!」」

6人全員突っ込み。実はウソ泣きの達人だったり……………?

「ま、まあみんなこれを見てくれ」

僕達は律先輩に呼ばれて、側に来てノートパソコンの画面が見えるようにしゃがんだ。

そして、律先輩は僕達がみんな来た事を確認して、DVDプレーヤーソフトの再生ボタンを押し、全画面モードにした。

1 やだあつ！（後書き）

恐ろしく中途半端です。はあ……携帯欲しいな……。高校まで我慢。

2 暗っ！

律先輩がプレーヤーの再生ボタンを押すと、唯先輩達のライブの時の映像が映し出された。……って画面に梓先輩がいない？

「あれ？ あずにゃん先輩いませんけど」

ちくしょ、葵に先手を打たれた。ちなみに、葵はその他に唯先輩の事は“ゆつぴー先輩”、ムギ先輩は“ムギちゃん先輩”、律先輩は“りっちゃん先輩”、澪先輩は“みー先輩”、更に山中先生は“さわちゃん先生”と呼ぶ。僕の事はなぜか“レンコン”だ。

特に唯先輩と澪先輩と僕は葵独特の呼び方なので、現段階ではたまに誰を呼んでいるのか分からなくなる。

「あ、これは唯先輩達が1年生の時の学園祭だからね」

今画面上にいない梓先輩がじかに答えて下さった。へえ、だからか……。澪先輩が後ろで「ひいっ!？」って声上げたのが疑問点だけど。

「じゃあ、2年前ですよね？ だったら私、当時中3だった姉に連れられてこのライブ観ました!」

葵、意外……澪先輩、表情ヤバイ。

「お、って事は澪の……」

律先輩が何かを聞こうとすると、

「もうやめろおっ!!」

顔を真っ赤にして叫ぶ漣先輩。どうやらこの年の学園祭では漣先輩にとつてとんでもない事が起こったらしい。

問い詰めるとテレパシーの……いやプライバシーの侵害になりそうだから僕は止めます。

と見せかけて漣先輩がいない時に聞きます。

「それはともかく、ドラムを見る!」

僕は真ん中の後ろに位置にいるドラム、つまり律先輩に注目した。

他の先輩より、極端に光が当たってない。つまり……

「りっちゃん暗っ!」

唯先輩が言った通り、暗いんだ。

「そう! 私だけ光が当たってないんだよ!!」

「おでこは輝いてますね」

梓先輩の発言通り、広い額を除いて。

「うるせえ! ……それに」

律先輩がDVDのディスクを取り出し、また別のディスクを入れ

る。

「……っと。去年の新歓も！」

でこピカーン。

「ホントだ。りっちゃん暗い」

すぐさま別のディスク。

「よし。……去年の学園祭も！」

でこピカーン。

「おでこだけ目立ちますね」

ディスクチェンジ。

「OK。……今年の新歓も！」

でこピッカピカーン。

「あ、脚が見えました」

全てのDVDの再生を終えた後、しゃがみ込んで文字通りしくしく泣き出す律先輩。

「座っていて、しかも一番奥だから光が当たらないんですね」

どうにかならないのかな……まあ講堂がライブ用に造られた設計

なはずがないけれど。

「……………それで？」

ま、言ってしまったえばこれですよ、梓先輩。さっぱり真意が見え
ません。

「……………ホカノガツキヤリタイ」

いつの間にか超隅っこに移動していた律先輩は、虫くらのなっ
さけない小声で言った。

え……………？ ドラムは……………？

「律、ドラムは」

「りっちゃん先輩……！」

あ……………また葵が泣き始めた……………。

「どうしいちえどれみゆやみえ……………ううええええんっ……！」

うるさいっちゃんうるさいけど、これできつと律先輩がドラムを辞
めることはないな。

「いや、えーっとな……………たまには楽器とか交換とか出来たらいいな、
とか」

「いいですね、それ！」

えええええつ。葵自身、腕前的にそんな寄り道している暇ないん

じゃないっ！？ 澪先輩も「ええっ」みたいな表情だし。

「じゃ、ギターやってみる？」

唯先輩いっ！！

「いいのかい？」

おちゃらけて聞き返す律先輩。

「ええっ！？」

やっぱり呆れ返って驚いてた澪先輩。

「じゃ、ギター貸してくれ」

そんな澪先輩も気にする事なく唯先輩にギターならぬギターを要求する律先輩。

「いいよっ。……よいしょと。はい」

スタンドから持ってきて、快くギターを渡す唯先輩。

「あの……澪先輩、大丈夫ですよね」

多分平気だと思うけれど、一応律先輩の大親友である澪先輩にご意見を頂く。

「多分、律のことだから“ギターやっぱ無理かも”とか言ってすぐに飽きるさ」

「でも……葵は？」

勝手に僕の青いギター持っていつてます。

「まだ来たばかりだから……な」

3 取つかえっこ！

「うわああああん！」

律先輩が唯先輩のギターを肩にかけた時、事件は起こった。

突然大泣きする唯先輩。あまり驚かない軽音部員。現場の桜が丘高校音楽準備室はまたか……という雰囲気にも包まれている。

「唯先輩、どうしたんですか急に？」

くだらない理由だと予想されるが、念には念を入れよ、ひよつとしたら重大な過去がこのギー太と呼ばれるギターにはあるのではないだろうか。梓先輩は唯先輩に泣いた理由を訊いた。

「ギー太が浮気したあゝあゝ」

衝撃！！ ギー太にスキャンダル発覚！！ 桜が丘高校軽音楽部部長との熱烈なハグを妻、平沢唯が目撃！！

……くっくだらないですね。澪先輩もやれやれといった感じで唯先輩から離れてます。

「自分から嬉しそうに渡してたじゃないですか」

梓先輩が矛盾を追及。するけれど……

「ありがとう。今まで楽しかったわ」

涙を流しながらキリツと奥さま風に言う唯先輩。

答えになってない。というかどこぞのメロドラマですか。

「……面倒くさい人ですねえ」

全くもってその通りです梓先輩。

ギー太を浮気させた律先輩は本題に入る。コント口調で。

「で、唯先生どうすれば？」

「え？ 先生？」

先生という単語に思いつきり照れる唯先輩。更に呆れる漑先輩と梓先輩。律先輩、ムギ先輩、そして僕のギターを勝手に持つてる葵は通常のままでした。

「いいいいいよ、教えるよ」

すっかり機嫌を良くして、鼻高々な感じ。本当に。

「ムギ、私はお茶しとく。多分すぐ飽きるだろうし」

今日なんか初っ端から振り回され気味な漑先輩は、一旦心を落ち着けようとお茶をするべくテーブルに向かった。実際漑先輩はそんな事一言も言っていないけど、僕には何となく分かる。

「私にも教えて、レンコン先生」

「葵、レンコン先生ってなんかカオス」

♪

いいよ、とは言ってみただけど僕って教えるの苦手だからなあ……。

「おや？ 連先生お困りですか？」

僕の表情を察したのか、鼻高々口調で聞く唯先輩。

「はい。まだ始めたばかりですし、教える事自体下手なんでなんて教えればいいのか……」

「ならばここは私に任せなさい」

誇り高い賢人、唯先生は僕に救いの手を差し伸べてくれた。

しかし。

「りっちゃん、ああ、左手でコードを押さえて、右手でストロークだよ」

…… 本人は真剣そのものだけど……。あ、言い忘れていたけど唯先輩とムギ先輩は、葵の事を“ああ”って呼んでいます。

「すまん。それ位は分かるのだが」

そうですね律先輩。軽音部部长を侮るなかと。

「えっっ……じゃあ何を教えれば……」

唯先生……。僕らの向こうでお茶しながら見ている澁先輩の顔が呆れています……。

僕らが万策尽きて困り果てている所に、カチャッと譜面台を上げる音が聞こえた。

「もー、しょうがないですね」

声の主、梓先輩は譜面台をギターを持った2人の間に持ってきて、それに上から1枚の楽譜を乗せた。

「とりあえず、ふわふわ時間タイムやってみましょうか」

4 ギター教室！

律先輩と葵が座った所で、梓先輩のギター教室開講です。お茶中の澪先輩とムギ先輩もこつち見てる。

「じゃあ、最初のコードはEですから、人差し指は3弦の1フレットで、えっと……中指は5弦の2フレット、薬指は4弦の2フレットを押さえて下さい」

指の配置がスラスラ言えてスゴい……けど。

「ん、ん？」

「あの、分かりません……」

目をパチパチさせて困惑した表情の2人。いきなり言われて分かる人は天才。後ろにいる澪先輩すら分からなさそうな表情している。

「えっと……連くん、葵のよろしく」

「はい。Eですよね」

梓先輩は律先輩の指をEの場所のフレットに置く。僕は葵の指を。指長すぎる……。羨ましいばかりです。

「うっ、でいいの？」

「うん」

もう基本コードは覚えた。Fとか人差し指で全部押さえるバレーコードというヤツはまだ音出ないけど。

葵がコードを押さえた事を、梓先輩に目線で伝えた。

「じゃあ、そのまま右手を上下に動かして下さい」

すると、二人のギター（正確には唯先輩と僕が貸したもの）は乾いた音を出し始めた。けれど、まだ指が上手く押さえられていないのか音がまばら。

「あ、りっちゃん。右手は柔らかくね、ぐにやぐにやにするんだよ」

手をぐにやぐにやにするジェスチャーを交えつつ、真剣な顔で教える唯先輩。

「あ、弦を押さえた指はもうちょっと立てて。上手く出でない音があります」

2人に向けてアドバイスする梓。それを受けて、2人は少しコードを確認してから、再び弾き始める。

えっと、僕も……

「葵、右手あまり力入れないで。引っかかるから」

「慣れないんだよ、レフティずっと使ってきたんだから」

そう言いながらも少しずつ音が揃ってきている。

一方、律先輩の方は……

「りっちゃん、ピックは柔らかく持つんだよ。柔らかく」

「あ、段々音が揃ってきましたね。律先輩、背筋も少し伸ばして」

「っ……！」

背筋は伸びるものの、額に汗、震える上半身。これは黄色信号……？

葵は、下手くそだったけどベースやってただけあって、姿勢はいい。けど……

「もっとリラックスした方がいいぞ」

「だから慣れないって……！」

こっちも限界……？

「じゃあ、次のコード行きましょうか」

「これが難しいんだよね」

その瞬間、ジャン！ と突然弾くのが止まった。そして、

「ギター無理かも」

「私も。やっぱり一度に全部弾くのが慣れないです」

梓先輩のギター教室、終了です。

「えっ」

「早っ」

梓先輩は律先輩と葵の飽きの早さを目の当たりにして驚いた。「すぐ飽きるさ」と言った漣先輩もまさかそれ程ひどいものだと思わなかったらしい。

僕は念のため聞いてみる。

「あの、本当にいいんですか？」

「うん。なんか色々やる事あつて大変だなあ」

「……それ、ドラムの方が当てはまると思っんですけど」

だって両手両足が休みなくずっと動くんですよ！？ 大変すぎやしませんか！？

「おみそれいたしました」

「いえいえいえ」

律先輩はギー太を唯先輩に献上するように返却した。僕だったら間違はなく手が滑って空中分解の憂き目に遭ったな。

「レンコン先生、サンキュー」

葵は普通に返してくれた。良かった良かった。レンコン先生、という呼び名には違和感ありまくりだったけど。どっかの子供向けアニメで出てきそうじゃありません？ 野菜学校の優しいおじいちゃん先生、レンコン先生。

それにしても唯先輩……

「ギー太、おかえり」

よほどギー太の事、大切にしているんだなあ。話し掛けたり、弦をさすったり……ギー太って、先輩の全てなのかも。

律先輩はその様子を見て、首をかしげてにっこり笑った。

5 熱中！

「どんな感じだ、軽音部は？」

気持ち良く晴れた翌日の昼。僕は阿部と昼食を食べてます。

「毎日毎日楽しいよ。ま、真面目にはやってないけどさ」

「やはり真面目じゃないのか」

そう言って、コンビニで買ってきたツナマヨおにぎりを開ける阿部。包装をむやみに開けたため、のりが悲惨な事になっておりますが本人は気にしてません。

「いや、練習はしっかりするけどね」

「本当か？」

「本当だ」

真面目じゃない事は認める。ただ軽音部〃ムギ先輩のお菓子を食べるだけの部活、というイメージだけは避けたい。一応、練習成果はありますので。

「なんなら覚えたコードの形でも見せて……」
「結構」

頼むから無表情で速攻拒否はやめて。

「……じゃ、男バスはどうなんだ？」

男女共学になった今年。偶然数少ない男子のうち5人がバスケットボール関東or全国大会経験者だと知った男の体育の先生が、そいつらを半ば強引に召集し作り上げた部活。それが男子バスケットボール部。

創部1年目にして、もうインターハイ予選に出るのだそうだ。噂では、とある練習試合で26対121で圧勝したとか。というか、バスケットスタメン5人だから交代要員いはいはずじゃ……？

大変でしょう、きっと。

「納得行く練習量の多さだからやりがいがあるな。ひょっとしたら今までの人生で一番熱中しているかもしれない」

クールな阿部が、熱中なんて言葉使った。

「阿部がこんな事言うの珍しいな」

「そうか？」

そう言って一口頬張る阿部。おにぎりが崩壊したけど、本人は気にしてない。

不器用過ぎです。それでいて一切表情を崩さない阿部って……。

下手にリアクション大きいヤツより面白い。

「クスッ」

「……俺の何が面白い」

「なんでも」

それにしても、熱中かあ……。僕はどうなんだろう。

軽音部に入ってから紅茶の淹れ方学んで、ギター買って、トンちやんと葵が来て、それから練習3割お茶7割で……。ギターに熱中、とまでは正直行かない所がある。

でも、確かに言える事。

この部は、めっちゃくちゃ楽しい。阿部とは違う楽しさだろうけど、僕はめっちゃくちゃ楽しい。

そういう意味だと、僕も熱中しているのかもしれない。“軽音部”という部活に。

あ、そうだ。律先輩、今日はドラム叩いてくれるかな？

もし今日も楽器を取っ替えたとしても、そんな大事には至らないと思うけど。

明日もあさっても、ってなるとちょっと心配だけど……。

「上野、何ぼーつとしてる？」

阿部の声で、あ、阿部が前にいたんだ、って思った。MYワール

ドにgoしてた訳じゃなかったからそんなに驚かなかったけど、机上の異変に気づいた時、僕はたいそうたまげた。

「ちょっと考え事……ってああっ!？」

ぼーっとしてた間に目の前の弁当箱がかっさらわれている!!
誰だ! 誰だよ!!

キョロキョロ辺りを見渡せば、僕の銀色の弁当箱を持つ、メガネを掛けた男子がすぐに目についた。しかも堂々とこっちを見てニヤニヤ笑っていやがる。

というか僕のクラスにあんなヤツいた?

「返せー!! それは僕の弁当箱だ!!」

すると、弁当箱を持った男子は、不敵な笑みを浮かべたまま、

「ほれ」

と、言ってきた言葉に反して丁寧に両手で返してきた。なんだ、ちゃんと中身もあるじゃん。

「……ったく、奪うなよもう」

阿部の待つ机に戻り、早速弁当のミニエビフライを丸ごと食べる
と……

「……ん？」

「どうした？」

「……身がない」

あいつだ！！ あいつがエビフライをエビのしっぽだけフライにすり替えたんだ！！

やられたら？ もちろんやり返すのさ！！

「ちくしょう、許さないっ！」

「無茶すんなよ」

箸を持ったままなのも忘れて、僕はアイツをとっ捕まえるために席を勢い良く立ち上がる！ が……。

机の下に膝上の弱い所ガン！ その衝撃で弁当床に落ちてガシヤーン！

「痛ったあああいつ！！」

「あーあ」

おかげさまで膝上の弱い所付近を激痛が襲い、残りの弁当の中身も床に散った。すでに教室にヤツの姿は無く、そして僕がクラスの皆様から怪奇な目で見られたのは言うまでもない……。

てかアイツ誰なんですか！？

5 熱中！（後書き）

とりあえず、ヤツは神出鬼没の謎の人物です。謎です。謎なんです。

6 裏事情！（前書き）

世界観崩壊注意報。

6 裏事情！

放課後、いつもの通り音楽準備室に行き、先輩達に挨拶をして、長椅子にカバンを丁寧に置く。

若干2名いないですが。

「みー先輩、りっちゃん先輩とあずにゃん先輩はまだ来てないんですか？」

葵がアルトサックスをケースから出しながら、僕の気になっていた事を聞いてくれた。

「律ならただけど、梓ならここに」

零先輩は長椅子の後ろを指さす。そこからひょこっと出てくる梓先輩。

「あ、梓先輩こんにちは」

とりあえず挨拶。

「あずにゃん先輩、何で後ろに隠れているんですか？」

気になった事その2も聞いてくれた葵。

「出番待ち」

また梓先輩は姿を消した。

……？

唯先輩並みにすつとんきょうな答えにあっけに取られた直後、ドアが開いた。

「というわけで、今日はキーボードをやってみるぞ」

「あ、律先輩」

ドラムはまだ叩いてくれないのか……。

「何が“というわけ”なんだ？」

まず濤先輩の、律先輩のセリフに対する
ツッコミ。

「輝けりっちゃんシリーズ、まだ続いていたの？」

次に唯先輩の疑問。輝けりっちゃんシリーズっていうのがいつの間にか始まってたらしい。

その疑問の答えなのか答えじゃないのか、律先輩は、

「やっぱ輝いてないとダメかもしれない……！」

なんか必死そう。

「注目されると、キラキラ、になるんだよ！」

はい？

「見よ！」

律先輩が勢いよく指さした所を見ると。

「……ん？ 何よ？」

優雅にお茶中の山中先生が。何かオーラが違いますよ！？ なん
というか輝いてるっ！？

「ここ最近！ 担任になってからというものの、さわちゃんも肌もピ
カピカ、髪はツヤツヤ、なんかやたら充実してると思わないか
！？」

“肌も”から、“ツヤツヤ”まではやたら高い声。他はやっぱ
必死。

山中先生はウインクして、

「いや、担任ともなると、教壇というステージに立つ回数が増える
からかしら？」

うわ、否定しない。しかも鼻高々に言われた。普通キレそうなの
のだけど……。

「私もキラキラしたいっ！！」

スゴく必死です。男子の僕には分かりません。おでこが人一倍輝
くからいいのでは？ と思ったのは内緒。

「で、今日はキーボード……」

呆れる澪先輩。

「りっちゃん先輩、それとキーボードって何が結びつくんですか？」

葵ナイス!!

「そんなの気にすんな!」

分かった。キーボードを選んだ理由はなんとなく、らしい。

「じゃあムギ、弾かせてくれ」

「どうぞ」

律先輩はカバンを持ったまま、キーボードを弾いた。まともに弾けないらしいので、右手人差し指で、2つの電子的な音を順に出した。

「ピンポーン、だって!」

と、突然立ち上がって嬉しそうに言う唯先輩。確かに言われてみれば聞こえなくもないけど。

「ですよね! ゆっぴー先輩、私もそう聞こえました!」

既にアルトサックスを首にかけた葵が激しく同意。そんな喜ばしいことですか……?

「先輩、楽譜読めるんですか？」

ひょこつと長椅子の後ろから梓先輩登場。

……無反応ですか！？　　というかこれだけのためにっ！？

「あの、律先輩、梓先輩がいたこと驚かないんですか……？」

気になって聞いてみる。

「ああ、知っていたからな。な、梓？」

「はい。律先輩には知ってもらってたんだ」

「じゃあ何で……？」

律先輩を驚かせる以外に何があるの？

「それは私からは言えないね」

どういうこと！？

「そうだよな、梓。みんなもさ、ちょーっとアレなのってあるよな」

律先輩……！？

「うんうん」

一斉に頷く僕以外のみんな。葵や山中先生、さらにトンちゃんまで含めます。

……何、このアウエー感。ええっ。

「さて、続き続き！」

次はバイオリンと似ているようでちょっと違う、アコースティックな音で4つ。

「あ！ だいじょうぶって！」

「言いました言いました！」

「何で解読できるんだ……」

……一体さっきのはなんだろう……？

6 裏事情！（後書き）

それにしても、なぜ梓さんは後ろからひょこつと出てきたのですよう……？ 気になる人、アニメチエックです。僕の予想としてはト
ンちゃんのエサを探してたとか……？

7 ベースへの思い！

唯先輩& a m p ; ムギ先輩& a m p ; 葵のキーボード通訳ショーがひとまず収まった。ムギ先輩訳の“ムーギーちゃん”辺りまではそれっぽく聞こえたけど、その次に葵が訳した“コモドオオトカゲの子供はマシユマロ”は韻も文章も意味不明だった。唯先輩は「すっごーい！ あおって天才！」って言うてたけど。

「キーボードは色んな音色があって面白いな」

律先輩はちょこちょこボタンをいじっては、鍵盤を人差し指で押して、様々な音を出している。にっこり笑顔だ。

「新しい曲のイメージがどんどん浮かんでくるわあ」

どんな曲ですか。と、梓先輩が顔でツツコんだ。

「なんか面白そうだな……」

零先輩もキーボードに興味を持った。雰囲気としてはなんかピアノ上手そうなんだよな。

「りーつー、ちょっと私にも……」

その時、律先輩に黒い笑みが。

ジャーン、といきなり大音量で響いたのはドスの効いたギターの音。僕もびっくりした……！

その直後澪先輩は律先輩の頬をつかんだ。

「律、やめような、こういうのは、な……！」

めっちゃ声が震えている。律先輩、澪先輩が実は臆病だと知ってわざとやったのか……。

「んぐぐ、 & a m p ; @ ……！」

頬をつかみ返す律先輩。澪先輩に頬をつかまれているため、何言ったか正直聞こえません。

「% & a m p ; ……！」

澪先輩も同じく。仲良いなあ。

そんな頬の引っ張り合いのケンカ……？ は、唯先輩の発言で中断させられた。

「りっちゃん、ベースはやらないの？」

それに答えたのは、律先輩ではなく澪先輩だった。頬からは、律先輩の手がすでに離されている。

「あ、ベースはダメっ」

何でだろう。澪先輩の大親友の律先輩でも、ダメな理由って……。

「なんで？」

唯先輩がすかさず聞く。すると、漣先輩は少しうつむいて、先輩のベースへの思いを語り始めた。

「ベースは、私、ベース以外にやりたくないし、ベースじゃないとやだし……低くて深い音色とか、目立たずにみんなを支えてる感じとか、みんなに合わせてベースのライン作るのも楽しいし、飛び出しすぎないように、でもみんなに埋もれないような、そんなベーストでいたいって……」

「知ってるよ？」

律先輩が明るい感じで入ってきた。

「だから、漣のベースには手を出さないのさ」

「おお、やけますな、田井中どの」

「言っちな言っちな」

律先輩と唯先輩。唯先輩もこんな変な事言っちゃっているけど、律先輩の優しさというか、思いやりというか……そういうの、きくと分かってはいるはず。

言わなくても分かる。以心伝心っていうヤツか。……僕もこの位の存在がいたらなあ。

「うう……」

「「あ」」

澪先輩の頭から湯気が……。

「語りすぎた……」

過去の自分の言っていた事に恥ずかしさが湧き上がったのだろうか、澪先輩がショートした。

「あれ！？ 澪ちゃん、澪ちゃん！」

唯先輩の必死な呼びかけにも応答しない澪先輩。

「いかん！ 澪が生けるシカバネに！」

律の真剣な表情からのからかいにも応じない澪先輩。重症です…

…。

でも、澪先輩の気持ち、僕分かりました。

「いいなあ、ベースって澪ちゃんそのものって感じ」

「私、澪先輩のベース大好きです！」

ムギ先輩に梓先輩も。みんな、やっぱり澪先輩しかベースはいないんだって思ってる。

「私、いつか澪先輩みたいなカッコいいベーシストになりたいです！」

葵も、将来の軽音部のベース。これだけ熱い思いを秘めている澪先輩が先輩で、うらやましいなんて思ったりするかも。

だけど、僕はギターに漑先輩ほどの思いはない。部活として熱中してただけで、ギターは先輩達とのコミュニケーションツール位しか思っていないかった。でも、漑先輩の思いを聞いて、僕は少し考え方が変わりました。

「僕も、漑先輩のように、ギターに熱中したいです！」

漑先輩は、微動だにしなかった。言いすぎちゃったのかな……？

「ちょいとー、いつまで固まってるんだいこの子はー」

唯先輩は、漑先輩を元に戻そうと、数回軽く背中を押した。

8 輝け！

あの後、葵のサックスにも律先輩は手を出さなかった。どうやら律先輩は、葵が持っているサックスに何か特別な思い入れがある事を湊先輩経由で知っていたらしい。

湊先輩経由って事は、湊先輩は葵からこの事を聞いていたという事になる。湊先輩と葵は帰り道がほとんど同じらしいから、葵が湊先輩にその事を話しているというのもうなずける話だ。

で、それは昨日の出来事。結局、この日も律先輩はドラムを叩かなかった。

そして、今日。朝の登校中にちょっとだけ唯先輩の背中を見た。

荷物が半端なかった。

そっいえば昨日……

「りっちゃん、私に任せといてね」

って、言っていたな……。良く分からないけど、今日の唯先輩がやたら張り切っているのは目に見えた。

それから授業を難なく終えた放課後、今日のエビフライもエビのしっぽだけフライにすり替わっていた事にちょっと恨みつつ準備室へ。

2日連続はないでしょうよ。なんてボヤキつつ準備室のドアを開けると、ドラムを前に真剣に考える唯先輩の姿が。

「こんにちは、唯先輩」

すると唯先輩は、待ってましたと言わんばかりに、

「あ、こんにちは連くん！　ねえ、ちょっと手伝って欲しい事があるんだけど……」

「手伝って欲しい事？　僕にできる事なら手伝いますけど……」

しかしその直後。唯先輩は何かを思い出したかのように、

「あ、やっぱりいいや」

と、速攻撤回した。

「え？　で、結局……」

何だったんですか？　と聞こうとした時、ドアが開いた。

見ると、零先輩、ムギ先輩、梓先輩、葵が入ってきた。

「あ、皆さんこんにちは」

とりあえず僕は話を中断し、入ってきた先輩方に向かって挨拶した。

「こんにちは、連」

「こんにちは」

「こんにちは、連くん」

口元をクイッと上げる漣先輩、ぽわわ〜んとした感じのムギ先輩、ちよっとだけ笑顔の梓先輩。

「おはようレンコン」

そしてなぜかおはようと言ってくる、一番背の高い葵。あえてツッコまない、なんかもっと面倒な事になりそうだと僕の直感が訴えかけてくるから。

「「こんにちは、唯先輩」」

息ピッタリで唯先輩にきつちり挨拶する梓先輩と葵。

「こんにちは」

それに対し気の抜けた声で返事する唯先輩。

「そうだ。みんな、ドラム移動したいんだけど手伝ってくれる？」

なるほど、力仕事だから腕相撲で軽音部最下位の僕に言おうとした時撤回したという訳か。まあ、律先輩の大切なドラムを壊してしまったらとてもヤバイけど……。

「何で移動するんだ？」

零先輩は、唯先輩の発言を不審に思ったらしく、質問する。

それに対し唯先輩は、自信満々な顔でこう言っただけだ。

「輝けりっちゃん作戦だよ！」

――

律先輩が準備室に入室した時の第一声は。

「何コレ」

完全なる、呆れ。

「見て見てりっちゃん。ドラム、めっちゃ真ん中！」

「はぁ……」

両手を広げて自分の案を思いつきりアピールする唯先輩、それより約30度低い温度の律先輩。

間違えた。唯先輩だけ約30度高くて、その他は全員低いんだっただ。

「りっちゃん、私ね、りっちゃんが輝けるように、昨日すごく考えたんだよ」

唯先輩の優しさは、きっと全世界の人類が見習うべきだと思う。けれど……

「それでドラムを……？」

「そうだよりっちゃん！ たまには席替えだよ！」

「ちょ、恥ずかしいって……」

唯先輩の発想は、的から50cm位それた所を通っている気がします……。

9 めいっばいの優しさ

唯先輩の“輝けりっちゃん作戦”は続く……。

例えば。

「私がこのライトで照らしてあげるよ！」

そう言ってヘルメットライトを直射させる唯先輩。しかし……

「やめろ唯！ 律が……」

澪先輩の制止も時すでに遅し。律先輩は光を当てられ真っ白になつていた。

「虫の息だ……」

「あ、やってもうたあ」

まだまだあります。

「ほら、みんなも一緒にやるよー！」

「えー……」

梓先輩がすごい呆れているその作戦は。

「ジャカジャカジャンジャンジャカジャン、ジャカジャンー！！」

ジャカジャン！！　って言った瞬間に僕ら6人は律先輩の方へ向く！　演奏中にアイコンタクトという、聞こえは立派な作戦だけど……

「ひいつ！？」

結果。大勢にバツ！　と見られた律先輩は、精神ダメージ200を食らいました。

他にも様々な小道具を使った唯先輩でしたが、全て失敗に……。でも唯先輩は、

「りっちゃんの悩みは私たちの悩みだよ！」

「だからそうじゃないって、唯……」

律先輩は、ドラムを本気でやめるかどうかまでは、悩んでいない様子。それに、昨日ほど輝きたい！　とも思っていないさそう。

けれど唯先輩は、律先輩が悩み事を隠しているって思い込み、本気で心配しているんだ。

その証拠が、唯先輩と梓先輩と僕とで帰った、今日の帰り道の会話だった。

唯先輩が突然立ち止まって、梓先輩と僕を呼んだ後、

「もし、りっちゃんがドラムやらなかったら、私がドラムやるよ」

って言った。雰囲気から察するに、本気モードのようだった。

それを聞いた梓先輩は。

「私の目の届く範囲にいて下さい」

保護者みたいなちょっと面白い事を言ってから、

「深く考え過ぎです」

と、一番言いたかったであろう事を言って、さっさと前方に消えてしまった。

梓先輩にしたら、これが彼女なりの優しさなのだろうか。

唯先輩にしては、律先輩の事をまるで自分の事のように本気で悩んでいたのに、実際律先輩はそんなに気にかけてなかった。

一生懸命輝け作戦を考えたのに、まるで裏切られたような感じだろうか。きっと、ショックは大きいかも。

だから、僕はできるだけの事を。

「唯先輩の優しさ、きっと律先輩にも伝わったと思います。だから……」

「ありがとう、連くん」

唯先輩は僕の言葉を遮った。唯先輩独特の雰囲気は残っていたけれど、真面目な表情だった。

「私ね、あずにゃんに言われて気づいたんだ」

「何に……ですか？」

思わず僕の首も傾く。すると、唯先輩は少し笑ってこう言った。

「今はね、上手く言える自信がないから言わない。けど、明日みんなの前でその事を言いたいんだ」

「なんだ。言ってくれないんですか」

「へへっ」

ちょっと意地悪そうな、でも屈託のない笑顔。

唯先輩らしいな、って思った。自分にも、自分らしい所、あるのかな？

でも、分かった事がある。

唯先輩の優しさは、世界一なんだ。

10 やっぱり！

日付が変わり、いつもの放課後。

「やっぱドラムだよなー！」

数日ぶりに律先輩がスティックを持った。ドラマー、田井中律復活！

「だと思った」

口元に軽く握った手を当て、微笑しながら言う澤先輩。こちらは軽く受け止めているけれども……

「りつちゃん先輩……私……ほんとうにゆりえしいぢゅ……うわあ
ああん！！」

「そ、そんなに泣かれても……」

その場で大泣きする葵。律先輩もタジタジ。

「でも、どうして急に？」

梓先輩が不思議がつて聞く。すると、

「昨日、突然葵が“りつちゃん先輩のお気に入り”のバンドのDVD
貸して下さい！」って私の家に押しかけて来たんだ」

「すごい。似てる」

葵のセリフの所は声マネをしてた。似すぎ……！

「私ってこんな声してたんだ……なんか恥ずかしい」

その前にいきなり律先輩の家に押しかける行為を恥じて下さい。

「そんで、どうせなら一緒に観ないか？ って言っつて、キース？ ムーンのDVD観たんだ」

きすむ……？

「私知ってます！ 変人とか、壊し屋とか言われたドラマーですね。家に爆竹仕掛けて廃墟にした事もあったとか」

梓先輩、結構怖い事サラッと言ってますよ……

「いや、そこは懂れてないから」

キース？ ムーンの良い所が知りたいです。きっと律先輩が懂れるんだ、スゴいドラマーに違いない。……今日帰った後ググってみよ。

「とにかくそれを見たお陰でさ、何か無性に叩きたくなくなってきちゃっつてさ……」

突然ドラムをぶっ叩く律先輩。流れるように、でもダイナミックに太鼓をぶっ叩いて、シメにシンバルを打ち鳴らした。一瞬の出来事だったけど、とてもカッコ良かった。

律先輩はスティックを上に向けて、

「唯のギターも、ムギのキーボードも楽しかったけど、やっぱりドラムのスティックが一番馴染むな!」

と、まぶしい笑顔で言った。

直後、唯先輩が律先輩の前に来て……

「うん! ドラムはりっちゃんだよ!」

「唯……」

漣先輩はベースそのもの……前にムギ先輩辺りが言っていた言葉。律先輩の場合は、まさにドラム、って感じがする。

「演奏する時、後ろを向くとりっちゃんが笑顔でスティックを叩いて合図するじゃん。それを見るとね、なんか、やるぞーって気持ちになるんだ」

唯先輩は、右手で拳を作って上に振り上げた。

そして、昨日僕に話さなかった思いを、唯先輩が話し始めた。

「私ね、りっちゃんのお陰で気付いたんだ。同じバンドでも、考えている事や見える風景は全く違うんだって事」

僕はまだステージに立った事はない。けれども、中学生の時に一回だけ合唱コンクールで指揮者をやった事がある。

その時の風景は、歌う時とはまるで違った。同じホールのはず、

でも何か新鮮味があつたんだ。

唯先輩が言っている風景は、目に見える風景だけじゃないと思う。それが何かは分からないけども。

「でも、みんなと演奏すると、」

「一つになるんだよな！」

唯先輩の言葉を、律先輩が受け取った。そして……

「例え陰になつてても。私はみんなの背中見ながら、みんなの音聞きながら……ドラムをガンガン叩くの、大好きだっ！！」

その時の律先輩の笑顔は、これでもかという位に輝いていた。

やっぱり、ドラムは律先輩だな。

「あの……」

ムギ先輩が遠慮がちに右手を少し上げる。一斉にみんながムギ先輩の方を見る。

ムギ先輩は嬉しそうにぼわぼわした感じで。

「りっちゃんのお陰で、新しい曲が出来ました」

11 甘いハチミツお茶時間！

ムギ先輩は、ピアノ音色のキーボードで伴奏を奏でながら、ハミングでメロディーを歌う。

律先輩がキーボードを触った時に、この曲のイメージが湧いてきたらしい。この話を聞いた時はどんな曲になるんだろ……って不安になった。けれどいざ曲を聴いてみると、さすがムギ先輩だなんて思った。

あの時のイメージでどうこんな曲が出来たんだろう……ムギ先輩って天才だな。

「これさ、ムギちゃんの弾き語りにしない?!」

「えっ?」

突然、キラキラとした目でムギ先輩の演奏を聴いていた唯先輩が立ち上がって言った。当然ながら、ムギ先輩の演奏は中断される。

「あ、それいいかもです!」

間髪入れずに梓先輩も同意する。確かに言われてみれば、ムギ先輩っぽいメロディーだったな。

「ムギちゃん先輩の歌声、聴いてみたいです!」

葵も立ち上がる。唯先輩以上の瞳の輝度。

「……うん。やってみる」

ムギ先輩は力強くうなずいた。

「じゃあ澪、歌詞よろしくな」

「分かったよ」

律先輩に澪先輩が答えた後、ムギ先輩がまたしても控えめな感じ
で。

「あ、でもタイトルは決めてあるの」

「何だ？」

澪先輩が聞く。すると、ムギ先輩は包み込むような笑顔で。

「“Honey sweet tea time”！」

「やっぱりお茶かぁ！」

というこで。

「このラスク、ハチミツつけるとおいしいね！」

「何でも組み合わせっていうもんがあるんだなあ」

唯先輩と律先輩が絶賛する、ムギ先輩のラスク&ハチミ
ツのコンビネーションをとくと味わうティータイム。澪先輩とムギ

先輩は長椅子に座って早速歌詞を思案中。

「唯先輩、ほっぺにハチミツ付いてますよ」

「ほんと？ あずにゃん拭いて」

自分のほっぺを梓先輩に出してくる唯先輩。

「自分で拭いて下さい」

梓先輩はピンクのハンカチを取り出したけど……

「ええ」

「も、しょうがないですね……」

結局梓先輩が唯先輩のほっぺについたハチミツを拭いた。

なんなんだろ。先輩後輩が逆転してる。でも、それでこそ唯先輩と梓先輩の関係であるかも知れない。というかまともな唯先輩、甘えん坊の梓先輩なんて見たくない。

「ガジガジガジガジ」

前を見ると、耳障りな音を立ててネズミのごとくラスクを食べている葵がいた。一応カスが飛び散るから……

「葵、普通に食べよ。普通に……」

って言いかけた途端耳障りな音が左からも聞こえ始めた。

「ガジガジガジガジ」

皆さんっ！？ 唯先輩律先輩はいつもの事だから良いとして梓先輩も乗っかって来ないで下さい！

こっ心の中で叫んでいる間にも更に音が大きくなる。僕の横……？

「ガジガジガジガジ」

作詞していた零先輩達も！？ いつの間に僕の横に座っていたんですか！？ というかあなた達ネズミになりたいんですか！？ 全人類ネズミ化計画に賛成だというのですか！？

でも僕もやってみよ。ガジガジガジガジ…… あ、意外と面白いな。ガジガジガジガジ……

11 甘いハチミツお茶時間！（後書き）

これで、3話完結です。次回は修学旅行なのですが、当然連たちは留守番します（笑）

朝練！

まだ、制服でも少し肌寒く感じる朝。律先輩の事件以来、僕は一人で相棒の青いストラトキヤスターを持ってきて、ギターの練習をしている。

あの時、僕は律先輩や澪先輩の楽器に対する特別な思いに感動したんだ。唯先輩も日常から並々ならぬ思いをギターないしギター太にぶつけているけど、あれは……ねえ。

だから僕は思ったんだ。せつかくギターを始めたんだ、先輩達みたいに上手くなってやって、僕の相棒を喜ばせてやりたいって。

そして、僕がギタリストになった事を誇りに思いたいって。

いつものようにバッグを置き、降ろしたケースからギターを解放してやって、ストラップを装着して肩に掛ける。こういう一連の流れも、まだコイツを持ったばかりの時は大分時間が掛かったんだよな。梓先輩や唯先輩が中心となって教えてくれたお陰で、今ではもうすっかり慣れた作業だ。

長椅子に座ってチューニングし終わったら、早速弾き始める。一つのコードを、一定のリズムで。まだ曲も弾けない僕は、こうやって地道に練習する他ないんだ。

でも、今ではかなりの確率で音が全て出るようになってきた。バレーコードはただだけ。人差し指で全部の弦を押さえるのは、かなりキツイ。

でも、これも練習するしかないんだって。練習していると次第に、人差し指に力がついてきて、押さえられるようになってくるって、梓先輩が言ってた。

音は出ないけど、バレーコードの一つのFを押さえてストロークする。やっぱり、完全に押さえきれずに中途半端な音になる。

もう一度。しっかりとコードを押さえて……うん。

僕は息を吸って、一回ストロークした。行ける、と思ってストロークした。

するとどうだろうか。僕の相棒はキレイに、Fコードのハーモニーを奏でてくれたんだ。

「よしっ！」

思わず、小さくガッツポーズをした。本当は飛び上がる位嬉しかったけど、さすがに朝だからね。

頑張った分だけ、僕の相棒はそれに応えてくれる。頑張る過程はつらいかもだけど、その分達成感は並じゃない。例え、一つのコードの音が出るような、ささいな事であっても。

頑張る過程も楽しいって思えば最高だけどね。

「おめでと、連くん」

「うわっ!？」

いきなり後ろから声を掛けられてびびった。声の主は梓先輩。

「あ、梓先輩、おはようございます……」

「おはよ。それにしても……練習熱心なんだね、連くんって」

「えっ……？」

「唯先輩も、この位練習して欲しいよ」

「ふふっ」

梓先輩の後輩としてのグチに思わず笑ってしまった。でも、唯先輩も練習してない割には上手い。いつか……

「超えたいな……」

「うん、その意気だよー!」

え……？

「今の、声に出てました……？」

「うん」

やっぱりだ……恥ずかしい……。

「私も知らない間に口に出てたって事、良くあるんだよね」

「へえ……そうなんですか」

少し恥ずかしさがやわらいだ。気遣ってもらってるな……。

「さ、ホームルーム始まるまで練習しよう？」

「はい！」

この後、僕は梓先輩のご指導のもと、ギターの練習をした。一人で練習するのもいいけど、やっぱり先輩がいた方が楽しいし、ためになるし、いいな。

さすがに、これからもよろしく願います、なんてわがまま言えないけどね。

1 土曜授業！（前書き）

修学旅行編です。しかし、今回はほぼオリジナル展開です。話の展開上やや原作キャラの出番が少ないです、ご了承ください。

1 土曜授業！

なんか知らないけど、今日は土曜日なのに通常授業がある。

意味が分からない。

3年生が修学旅行だから、といって1、2年生まで学校に来させるのは意味が分からない。

イラついてても何もない事はよく分かってるので、最初の授業を適当に流して休み時間に突入。

何するかって？ 寝るに決まってる。せつかくの休日を強大な権力の前に献上してしまったんだ、だったらできるだけ損失はしないようにしないとね。

……意味不明だね。

僕が机に突っ伏してドリームワールドにゴーしようとした瞬間、不意にケータイが振動した。

メール……唯先輩からだ。

> 今、富士山の中。新幹線が見えるく

……うん。唯先輩らしいね。富士山の中ってどうなっているんだろうな。

本当であればおそらく人類初の快挙であった文面にも驚愕したけ

ど、それより僕は添付されていた写メに衝撃を受けた。

写メ撮るの上手っ！ とてもキレイに富士山が撮れている。さすがは女子高生を3年やっているだけはあるな。……それは関係ないです。

1人でツッコむのって、何か虚しいな。向こうの席にいる阿部も寝てるし。

じゃ、僕も寝るか。ケータイを閉じ、再び机に突っ伏してドリームワールドにゴーしようとした瞬間……。

またメールかよ。

もう一度ケータイを開ける。開け閉めする度にカチカチ鳴るケータイを見ると、某2画面ゲーム機が上下分裂した動画を思い出す。ぶっ壊れないかな……。

また唯先輩だ。

>トンちゃんのエサ、よろしくね！<

はいはい、了解しました。僕は寝ますよ。

ケータイを閉じて、バッグにしまう。これでやっとドリームワールドにゴーできる……しかし、悲劇は起こった。

休息の時間の終わりを告げるチャイムが鳴った。

ふざけるな！！

ああ、何という事だ！ 僕は桜ヶ丘高等学校という強大な権力の前に、ただなすすべもなくひれ伏せなければならぬのか……！

「はい、授業始めます」

ま、いつか。次に賭けよう。今はただ号令の指示に従って、立つてお辞儀して座っていればいいんだし。

そして次の休み時間……。

>大根ですく

これ、京都タワーだ。無事に京都に到着したんですね。だから写メ上手すぎ……。

キーンコーンカーンコーン……

やってしまったあぁっ！！

さらに次の休み時間……

「上野、次PC室だぞ」

寝る事さえ許してくれないいつ！！

当然ながら次の時間も寝る事は出来なかった。オーマイガー。強大なる権力、桜ヶ丘高等学校。今日という日に始めて、その恐ろしさを知った……。

ん？ 授業中寝れば問題ない？

それは僕の良心が断固拒否する！！

でも、ちよくちよく届くメールを見ると、どれもこれも全部楽しそうな感じの文と写メで、こっちまで笑顔が溢れてくる。

今、何百kmも遠くにいる先輩達と気持ちを共有できるようになったなんて、いい時代になったもんだねえ。

中学と比べて。修学旅行でもケータイ持ってきたら当然のごとく没収だったよ。

それにしても本当に楽しそうだ。2年とちよつとの間、ずっとあの雰囲気やって来た仲間だもん……。

僕にもこういう仲間、作っておきたいな。

「上野、一緒に食おう」

「OK、阿部」

今の所は……阿部がなんだかんで一番いいヤツなのかも。あとは……

「……メールだ」

「誰からだ？」

「きつと先輩……あ、違った。新井からだ。“先輩いなくて暇だから、今日ゲーセン行かないか？ 原も一緒だ”だって」

別のクラスにいて、一番最初に軽音部に突撃しようとした時のメンバーである、あらいけん はあきひつ新井健と原晃。

実際あまり直接は関わってない。主にメールでの付き合い。

「ふうん。ま、俺は今日も当然やるけど、部活」

「すげえな、お前」

とりあえず、OKの返事を出しておいた。何か、ウキウキするな……久し振りのゲーセン。それに、あの2人と初めて遊びに行くんだ。

早く終わってくれよ学校。というか土曜日なのに僕らはここにいてはならない。3年生が修学旅行つただけで何で僕達も巻き添え食らわなければならんだよ。授業時間数確保も全くだよ。4時間でいいじゃないか。全く良く分からないぞ、6時間にする必要性ってものが。桜ヶ丘高等学校！なぜ今日が6時間でなくてはならないのか、その理由を100字以上120字……

1 土曜授業！（後書き）

字数制限。連のグチはカットするけど続く。

2 黄金チヨコパン！

阿部と2人で弁当を食べてると、梓先輩から一通のメールが。

>今日はジャズ研の練習手伝いに行くよ！ 放課後は第5多目的室へ！<

「あるんですか……」

「残念だったな」

今日のゲーセンは無しだな……。とりあえず、了解メールを打って返信。後で2人にもキャンセルメール送らないと……。

「ま、明日に回してくれるだろうし。別にそんな落ち込む事じゃないな」

「ふーん」

そう言って、コンビニで買ってきたという玉子サンドイッチを新たに開ける阿部。ズタズタに包装が引き裂かれている。もっと楽に開けられるだろうに……。

その上「それがどうした？」と言わんばかりの無表情。スゴいよ本当。あ、褒めてないですよ。

「そついえば。今日購買部の方にふらつと立ち寄ったんだけどさ、なんか変な先輩いたからやめた」

「変な先輩って……」

真っ先に銀メガネのアイツの顔が浮かんだが、確か僕らと同じ緑ネクタイだった気がする。

「そ。金色の紙で包まれたとても長いパンらしき物を、野球のバットっぽく持って構えてた」

金色の包装……？ まさか、あれは……

「聞いた事がある……幻のゴールデンチョコパン」

「ゴールデンチョコパン……何か子供受けしそうなネーミングだな」

「某モンスターパンの商品名にありそうな感じだね。 “○○のゴールデンチョコパン” といった具合でさ」

「ああ、言えているな。小さい頃、シールどの位集めたかな……」

新事実。阿部は昔、天才小学生モンスタートレーナーのアニメが好きだった。

「……それはさて置き。ゴールデンチョコパンって何だ？」

「それは……っ！」

僕の鋭敏なセンサーが、不審なオーラを感知した。

ヤツが来る。

緑の悪魔ではない。銀のメガネだ。

「ふふつ。ワイが教えてしんぜよう」

音響機器とか一切ないはずの教室に、響き渡るエコーがかった声。そしてベランダからムーンウォークで入場。

そして僕の近くに……やめてやめて。みんなが見てる。

「とりあえず、帰って頂け」

「ゴールデンチョコパンとはっ！」

僕の願いも虚しく、ビシッと左の腕を突き出すヤツ。

「購買部で買える、1日3個限定の！」

腕を上方に伸ばし、輪っかを作るヤツ。

「スーパーにデリシャスなロングチョコパンの……ことだ！」

再び何事もなかったかのようにムーンウォークで退場するヤツ。ベランダとの段差に引っかけたて転びそうになったのは、目をつぶって見て見てなかったという事にしておこう。

ヤツが去っていった。今回は被害を受けてないようだな。安心した。

「ゴールデンチョコパンの事は分かった。けれどアイツ本当に何がしたいんだ……？」

そう言っているいろいろな漏れている玉子サンドを口にする阿部。

「さあ。できればもう関わって欲しくないよな、僕らも変に見られる」

「同感だ」

僕は弁当のコロッケを箸でつまむ。……違和感がした。

何か、軽い。

「まさか……」

「どうしたんだ？」

恐る恐る口に運んでみる。すると広がるのは、サクサクした衣の感触としょう油の味だけだった。

つまり、次のような事が言える。

「コロッケがもぬけの殻になってる」

「……ご愁傷様」

3 憂さんと鈴木さん！

仕方なく真面目に午後の授業を受け終え、僕はギターを背負い、ジャズ研の部室である第5多目的室へ。部屋の前には、古そうなアルトサックスのケースを右手に持ち、ベースを背負った葵がいた。

「おはよ、レンコン」

だから何でおはよ、ですか……。

「おはよ」

あ、ついノリで。

「別の所で練習するのって、何か楽しみだね」

「うん」

実際僕も結構楽しみだった。ウキウキした感じが、授業終わった後から止まらない。

「連くん、葵ちゃん」

後ろから声がしたので振り返ると、そこには梓先輩と2年生女子2人がいた。

「「こんにちは」」

「この子達は？」

モジャモジャな髪を二つ団子にまとめた2年生の先輩が、梓先輩に聞いてきた。

「ああ、この子達は今年軽音部に入った1年生」

自己紹介パターンですね。

「僕は……」

「こいつは上野連。で、私は深沢葵と言います」

「セリフ奪わないで下さい！」

ひどい。僕の立場がない。

「あ、私は梓の友達の鈴木純」

「私は平沢憂。よろしくね」

そしてスルー。僕の存在は……？！

あれ、さっき平沢って言わなかった……？ それになんとなく唯先輩に雰囲気似ている……？

あ、もしかして。

「も……」

「あ、もしかしてゆっぴー先輩の妹さんですか！？」

「……」

葵はとことん僕のセリフを盗りやがる。そんなに僕の事気にいらないんですか……。

「ゆっぴー先輩？ …… あ、お姉ちゃんの事？」

ゆっぴー先輩なんて呼び名、葵以外に誰も使わないしね。

「はい。じゃあ……」

「うん。私が唯の妹なんだ」

やっぱりか。だけど姉の唯先輩の姿はよく見るのに、妹の憂さんの姿は登下校その他を含め今まで一度も見た事がない。謎だなぁ……。

「さ、ここでいつまでも話しているのもなんだし、入ろう？」

鈴木さんが促してきたので、僕達はジャズ研の部室となっている第5多目的室に入った。

「いっぱいあるんだね」

部屋に入った憂さんの第一声がこれ。入った所のすぐ左側には、びっしりと並んだ楽器のケース。これらはおそらくサクソとかトランペットとかの、吹奏系の楽器なんだろうか。

「へへ〜ん。楽器の数ならブラバンにも負けないもんね」

と、鈴木さん。この中で鈴木さんだけがジャズ研の部員らしい。

となると、浮かび上がってくる一つの疑問。

「そ……」

「そんなに弾く人いるの？」

「んな……弾く……」

また潰された！ しかも今度は梓先輩に！ どうなの？ 僕はここにいない事になってるの？ どこかの緑の弟さんなの？

「まあね」

「えっ、すごいね」

アッサリ肯定する鈴木さんに少し驚く憂さん。僕に誰もかまってくれない。一種のイジメですよ。

そして、鈴木さんは……

「そう。ジャズ研はサバイバルなの」

「サバイバル……」

隣でつぶやく葵。取り巻く空気は張り詰め……

「だから、先輩のいない間に頑張って練習して……ああっ！ ベース、教室に忘れてきたー！！」

……なかった。

「ダメダメだっ！」

梓先輩のつぶやきが聞こえた所で、勢いよくドアが閉まった。この人、生き残れているのかな……？

「相変わらずだな、純は」

と、梓先輩。そこで、疑……

「梓先輩。じゅんじゅん先輩っていつもこんな感じなんですか？」

「……」

今度は疑問にさえ思わせてくれなかった。それより……

「じゅんじゅん先輩？」

いきなり独特ニックネーム炸裂。僕のレンコンよりはまだマシな類かもしれないけど。

「……あ、純の事ね。うん、なんかいつもこう、おっちょこちょいというか……」

「それ、梓ちゃんにも似たような所あるんじゃない？」

確かにそうかもしれないです、憂さん。

「ま、まあね……」

一応認めてはいるんだ。

その時。

「失礼しまー……」

ギターケースを背負った、1年生の女子が入ってきた。

「……」

お互いセメントのように固まった。

4 ジャズ研練習！

ただ今、硬直中。前方のドアに、1年生が僕らの方を見て絶句。こちらもどう対応すればいいか……。

「えと、その……」

梓先輩が動く。

「ごめんなさい、私たち純ちゃんの友達で……」

と見せかけて実は憂さんが動いた。ものすごい機転が利く……：この方、本当に唯先輩の妹？ いや、顔似ているけど。

「もしかして、梓先輩ですか？」

名も知らない1年生2人が梓先輩の元に駆け寄る。有名人！？

「えっ？」

「純先輩に言われたんですよ。軽音部にすごいギター上手い先輩がいるから教えてもらえって」

はい、梓先輩は僕の憧れですから。なんて事言えないけど、心の中です思う。

それを受けて梓先輩は。

「う……そ、そうなんだ」

目をそらし、あからさまに照れる。素直じゃない所に一瞬m……。

ガチャッ！

「うわっ！？」

「あ、ちょうどよかった」

ちょうどよくないですよ鈴木さん！ 突然ドア開いたもんだから驚いたじ

「「おはようございます！」」

……ついには見知らぬ1年生にも無視された、僕の居場所なくね？
せめて地の文くらい語らせて下さい……。

「おはよ」

鈴木さんは集まっている僕らの所に来た。落ち込んでいる僕を無視して。

「この2人、うちの1年なんだ。梓、ちょっとギター教えてあげてよ」

「う、うん」

小さくうなづく梓先輩。あれ？ 僕らはどうすれば……。

お、地の文で邪魔されなかった。今度こそ言え

「じゅんじゅん先輩、私達はどうすればいいんですか？」

……なかった。葵、やっぱり徹底的に潰しにかかってくるな……。

――――

「いち、に、さん、し……」

午後4時55分。日が傾き、オレンジ色の暖かい光が入ってくる。

梓先輩が1年生にギターを教えている今、葵は純先輩にベースを教えてもらっている。

そう、呼び方訂正されたんだ。

僕は何もやる事がないので、1人で……ではなく憂先輩のアドバイスのもとギター練習中。

憂先輩は、唯先輩より説明が分かりやすい（唯先輩は擬音中心）上、アドバイスの的確。自分でもどんどん上手くなっていくの分かる。

一体何者ですか……。

「みんな、少し休憩しない？」

純先輩の提案で、休憩タイムに。当然ティーセットなんてあるはずない。それが普通だよな。物足りないと思った自分……。

「先輩、指が動くようになるにはどうすればいいんですか？」

梓先輩に1年生が質問した。

「そうだな……指のストレッチとかいいかも」

あれですか！ 梓先輩は、左手の手のひらを前に向けて出した。

「こーやって、コードを押さえる方の手を、指をくっつけたまま前に出して……」

1年生や純先輩たちもマネする。……僕もやってみるか。

「人差し指と中指の間を開いて、次にこーで……」

と言って中指と薬指の間を開く梓先輩。あれ、純先輩……？ 大丈夫ですか？

「それから、薬指と小指の間を開いて、いち、に、さん、し……」

梓先輩は涼しい顔でやってのける。僕も何とかついていく。

「「ううううう……！」」

「ダメだぁ！」

「指つるう！」

1年生2人脱落。

「痛いっ！」

葵脱落。

「痛つててて……」

純先輩は脱落済み。憂先輩は……。

「あれ、憂はできるんだ」

にこやかな顔で普通にできている……！ きっと僕よりできている。唯先輩は確実に超えている。

姉と妹逆でしょ……？

「うん！ お姉ちゃんのストレッチに付き合ってたから……」

すごい……、と葵がつぶやく。

「お風呂の時とか、演奏前にやっていると、だんだんと指が動くようになってくるから」

「「はい！」「」

梓先輩の言葉に元気よく返事する1年生。やる気のある事はいい事です。

“お茶しよーぜー！”

“ムギちゃん、ケーキよろしくね！”

…… 大変なんです僕は。

「う……」

「純ちゃん……？」

純先輩に異変が……！

「ど、ど、どうしよう。指が動かなくなって……」

「「ええっ！？」」

「じゅ、じゅんじゅん先輩！？」

驚く梓先輩と僕と1年生。葵泣きそう……。

「うつつ……」

どうしよう、とにかく何とかし
「ブタっ！」

両手の人差し指と中指の間を開いた奇妙なポーズ。

しらける第5多目的室。こんなに静かな所だったんだ……。

「……スベった」

5 にゃっ！

「いち、に、さん、し……ああ、追い付けない」

日が落ちつつある帰り道、僕は指のストレッチをしながら歩いている。

「まだまだだね」

「頑張れー、連くん」

梓先輩と憂先輩と一緒に。

「うつうつ……」

それにしても、僕は非常に悔しい。何で憂先輩が梓先輩並みのスピードでできるんですか。唯先輩のストレッチに付き合っているだけでこんなになるんですか。

「くっそぉ……」

負けたくない！僕はギアを3速から一気に6速に入れて、指を動かすスピードを上げる。けれど……。

ピキイン。

「痛あつー!!」

ギアを一気に重くしたのが原因か、指が思いつきりつつた……。

てかギアって何？

「大丈夫？」

憂先輩、あなたは優しいんですね……。

「はい。一応大丈夫……」

……って言うておいたけどそうではない。実は今まで生きてきた中で、最も盛大なつりっぷりだったりする。

「最初はゆっくりから始めた方がいいと思うよ？」

「ですよー……いてて」

よく考えたら、生まれたばかりでそんな事出来る天才なんていませんからね、梓先輩。万里の道も十歩から。……あれ、ケタ違う？
うっん、約分すれば問題ない。

右手の痛みに耐えながらそんな事思っていると、いつの間にか分かれ道に。

「もうこんな所に来ちゃった」

普段なら、ここで唯先輩と別れる。今日は妹の憂先輩と別れる事になる。

「憂先輩、今日はお世話になりました」

「うん。こちらこそ、お姉ちゃんをよろしくね」

憂先輩、本当によくできているな……。

「じゃあ憂、準備出来たら行くからね」

「うん、待ってるよー。じゃあね」

「バイバーイ」

「さようなら、憂先輩」

そして、憂先輩は僕たちとは別の方向に向かって歩き始めた。

ん……？

「さっき準備出来たら行くとか、待ってるよーとか言ってたよな……」

「ああ、それ？」

心読まれた！？

「うわあっ！？」

「にやっ！？……ちよつと、驚かさないでよ……」

少し後ろに引き、体勢を崩す梓先輩。

「すみません、だって心読まれて驚いたんで……」

「今、言ってたよ？」

「あっ……」

口を押さえても何もないのは分かっている。けども恥ずかしさを紛らわすために……。その仕草を梓先輩にクスツと笑われた。

「今日ね、純と私で憂の家に泊まりに行くんだ」

「へえ……だから“準備出来たら行くね”だったんですか」

納得。でも、さつき確か……

“にやつ”って言ったような……？

「梓先輩って、猫……？」

「猫じゃないもん！」

また読まれたっ！？

「ひっ！？」

「にゃあっ！？ ……あ」

梓先輩の顔がみるみる赤くなっていく。うん、今僕の耳に確かに聞こえた。梓先輩も、自分の発言に気が付いたっぽい。

ヤバイ。今最高に梓先輩をからかいたい気分かも。

「やっぱり、梓先輩って猫なんですネ」

「ち、違うから！　今のは口が勝手に言っただけで……」

後ろに下がりながら、両手を全力で振って否定する梓先輩。しかし、バランスを崩して……

「うにゃあっ!？」

しりもちをついた。そして口を両手でふさいだ。

今、 “うにゃあっ” って言ったな。

「い、今のは絶対秘密だからね！　じ、じゃあ私、憂の家に行かないといけないから！」

「あっ……」

梓先輩はバツと立ち上がり、しなやかな動きの走り方で足音も立てず、猛スピードで逃げていった。

梓先輩が消えていった道を見つめて、僕は確信した。

梓先輩は、猫の生まれ変わりだな……。

6 ご馳走！

「……何でこんなに作ったんですか？」

「いつもより1人多いし、疲れてるだろうから多めがいいかな……なんて」

いや、多すぎですよ。5人でちょうどいい位ですよ。

あ、平沢家なう。先輩達他に葵もいます。きっかけは梓先輩の1通のメールから……。

> 晩ご飯、憂が多めに作っちゃって食べきれないから、憂の家に来てく

幸いまだ夕飯の準備もしてなかったし、平沢家ってどうなってるのかな？なんて興味を持ったりしたから、先輩の家でご馳走になるねと告げて……

平沢家なう。家の位置はメールに添付されてた地図データがあったから問題なかった。

「それにしても豪華……」

低いテーブルの上には、カツオのたたきやら、スパゲティやら、ミニ肉まんやら、和洋中の料理が所狭しと並べられている。確実に家庭料理の域を超えている……。

「一体誰が……？」

「ういっぴー先輩！」

へ……？ 葵の独特ニックネーム炸裂。

「あ、憂が全部作ってたんだって」

きょんとした顔を読み取ってか、梓先輩がフォローしてくれた。
……ってええっ！？

「あの量を1人で……ですか？」

「うん」

普通に肯定したエプロン姿の憂先輩。ギターも上手いし、しっかりしてるし……どうしたらこうなるの？

「じゃ、全員揃った事だしっ！」

純先輩がテーブルの前に座る。それをきっかけに僕らも豪華極まりない料理を囲むようにして座った。

「いただきます！」

「「いただきます！」」

純先輩の音頭で食事スタートの常套句を合唱すると同時に、しゅぱっとムダのない動きで小皿にスパゲティを取る葵。結構な量。

その間わずか3秒。スパゲティって箸で取りにくいのにキレイに

取るなんて、ムダにすぎえ……。

更に。純先輩はわずか3本しかないエビフライを真っ先に取った。
2人に共通する事。遠慮という名前を、彼女達はまだ知らない。

「おいしい！」

スパゲティをすすする訳でもなく、普通に食べた後の葵のセリフ。

「憂、グッド！」

そしてこれが、サクっという音を立ててエビフライにかじりついた純先輩のセリフ。料理の味も期待できそう。

でも、箸が出ない。取ろうと思っても手が震える……。

「あれ？ 連くん食べないの？」

そんな僕の様子を梓先輩が気に掛けてくれた。みんなの視線が一気に集まる。喋りづらい事極まりないです……。

豪華すぎて、というのもあるけども……。

「えっと……取り箸ありますか？」

だって、その……スパゲティとかを自分の箸で料理取ったら……。

「なんだ、そんな事？ 別に気にしなくていいよ」

憂先輩！？

「ね、みんな？」

「「うん」」

ええっ！？ いや、多分自分が子供なだけだと思うけど……。

「……もしかして潔癖症？」

「あ、いえ！ た、食べます！」

純先輩が言った言葉を速攻否定し、僕はサラダを取った。

「意外とベジタリアン」

そんな梓先輩のつぶやきが聞こえたけどスルー。僕は一口シャキツと……。

「おいしいです！」

「サラダだから誰が切っても同じでしょ」

「はっ！」

それを見てクスクス笑う葵と憂先輩。純先輩ーい！ 痛い所突かないでくださいー！！

7 雨の朝！

翌日。僕の目を覚ましたのは、しとしとと降る雨の音だった。

あの日夕飯をご馳走になった後、軽く喋って帰った。葵はどうやら泊まったらしい。今日も一日中先輩達と一緒にいるのだろうか。

僕は僕でゲーセンに行く約束がある。そう、延期してもらったんだ。小雨だから、別に中止になるような事はない……と思う。

時刻は6時30分。まだ目覚ましは起動してない。でもこれ以上寝ると確実に12時まで眠りについてしまう事を自覚しているので、眠たい気持ちを押さえつけひねり潰しケチヨンケチヨンにした上で布団をどかし、ベッドから降りる……

「うわっ！」

……のではなく落ちる。何回目かなこうしてバランス崩して落ちるの……。

ただ、おかげさまで気分爽快。

いつまでもへばっている訳にもいかないんで、僕は起き上がって自分の部屋を出、用心して階段を降りリビングに向かう。

「おはよー」

「おはよう、連」

僕のマ……もといお母さんは、休日であろうがいつも早起きだ。昔に理由を聞いた事があったが、朝早く起きてゆつくり読書するためらしい。朝の読書は格別なんだとか……僕ならズラリと並べられた活字の催眠術に屈して、間違いなく寝てしまうが。

ちなみに今読んでいたのは“ヘヴン”という小説だ。その前は“涼宮ハルヒの憂鬱”を読んだ。ある時は“地名の謎”という本を読んでいた事もあるし、またある時は“黒魔女さんが通る”を読んでいたし……。ジャンルは全く問わないようだ。

読書するマ……お母さんをよそに、僕は冷蔵庫から八切りパンを2枚取り出し、バターを置いてからトースターに入れる。そして僕はウォークマンを取り出して音楽を聴き始める。

軽音楽部に入部してから、今までポップス中心だった曲が、ロック中心になっている。先輩の話の中でちよくちよく出てくるバンドのCDをレンタルし、ウォークマンに落とすのが習慣となってしまう。今、気がつけば400曲がロックに分類される曲だった。

シャッフルで当たってしまったサザンオールスターズの“エロティック？セブン”を聴いていると、かすかにチーンという、焼き上がりを知らせる音が聞こえた。というか朝からこれはいかんでしょ……。

ウォークマンを一旦止めて、僕は早速パンを頬張った。

むせた。

苦しかった。

一体何回目なんだろう……。

それを日常として捉えているマ……お母さんは特に反応する事なく、本を読み続けていた。我が子が苦しんでいるのだというのに何ら心配しない僕のマ……お母さんを多少残念に思いつつ、何とかパンを食べ終え、食器を用心深く扱いつつ洗い、自慢の洗面所に向かう。

なぜ自慢出来るのか。それは、年がら年中鏡が曇っているからだ。

僕が生まれた時から突然こうなっただけ。今のは2代目なのだが、取り付けの業者さんがいなくなった瞬間に、まるで何かのスITCHが入ったかのように曇った。

僕は鏡に水をぶっかけて一時的に見える状態にし、自分の寝癖を確認する。そして、ハネている所を水とクシで適当に修正し、歯を磨き顔を洗う。歯ブラシを戻す時、歯磨き粉が何回も落下したのにイラついた。

今日はツイてないんじゃないか、という不吉な予感しかない。

この後リビングに戻っても、マ……お母さんは読書してるし、パ……お父さんは2階で寝ているため、異様に静かで非常にいいので、こういう時僕はいつも僕の部屋にこもる。

……葵達、今何してるんだろ。唯先輩の部屋とか探検しているのかな。

いや、寝てるだろ。良く考えればまだ7時だし。

……ヒマだ。僕も寝よ……。

この後、目を覚ますと時計の針が両方とも12を指していたのは言っまでもない。

8 ゲーセン！

昼食をかつさらって、いつもの半袖Ｔシャツ＋ジーパンスタイルに着替え、紺のショルダーバッグを肩に掛けてから、僕は待ち合わせ場所に向かった。

軽音部御用達のマックスバーガー。店内に入ると、一人の男子がポテトをつまんだ。

「ちず、連」

コイツは新井。文芸部に所属、唯一の男子らしい。僕と同じ境遇……いや、コイツの方が厳しいな、部員多いから。

「よ、新井」

「いいよ、名前呼びで。……てか前も同じ事言った気がするけど」

「じゃ、健けんと呼ばせてもらっね」

「OK、そっちの方がいい」

ただ、もう1人が見当たらない。ま、平和っちゃ平和だけど……。

「アイツはまだ来ないの？」

僕の質問に、小雨降る窓の外を見つめる健。そして、こつつぶやく。

「……今頃水たまりに溺れているんじゃない？」

あまりアイツの事は知らないけれど……

「やりかねないね、アイツなら」

こんな事を喋っていると窓の外に傘をさした河童……ではなく、全身びっしりの原がいた。

――

「いやー、歩いてたらヘビがいたもんだから、驚いて後方に一回転して水たまりに溺れちゃってさ……」

てへへ、と笑う原。原は一言で言うと、常時ハイテンションボーイ。意外にも囲碁部所属だったりする。

「^{あきじ}晃、きつとただのオモチャだったんじゃない？」

健の発言に原は、

「そう言えばそうだったっぽい……うわああああっ！！ 何っ！ 事しちまったんだーおい！！」

「ゲーセン着いたな」

「無視すんな連ー！！」

傘を畳んで、僕らはゲーセンの中に入った。ゲーセン独特の騒音

が、僕のテンションを上がらせる。

「なあ、これやろーぜ！ 太鼓の怪人！」

原が指差したのは、太鼓を模したコントローラーが2つある筐体。言わずと知れた国民的ゲームだ。しかしなぜか健は、

「別のにしよう、な？」

セリフこそ普通だけど、一生懸命顔の前で手を振る超絶拒否反応を見せた。

「おい、ノリ悪いぜ！ さ、やったやった！」

でも原は、勝手に200円を入れてゲームを始めやがった。

難易度は、健の懇願によりかんたんに。曲は“天体観測”。バチを握るのは健と原。僕は傍観する。

ここで、健が嫌がっていた理由が発覚した。

「ここっ！ じゃなかった……上手くできないな……」

ことごとく、叩くタイミングがずれている。かんたんですよ、これ……。

そのため、原は普通にフルコンボだったけど、健はまさかのクリアならず。よくこんなリズム感で軽音部に入ろうとしましたね……。

「だから嫌だったんだよ……連、交代」

相当落ち込み、ゲームと同じく魂が抜けきった健に代わって僕がバチを握る。

「難易度変えよう」

さすがにかんたんじゃあ……。

「OK。じゃ、いっちょ冒険っつー事で！」

ということで、難易度おに。曲は、きたいばらき3000。究極的に難しいらしい。

「さて、玉砕といくか！」

ゆっくりとしたテンポで始まる曲。僕は全ての意識を腕に、耳に集中させる。

急に猛スピードで流れ出す赤と青の音符。僕は腕をフル稼働させてついていく！

「お、おい……冗談じゃないぜ」

全然叩けてない様子である原をスルーし、ただひたすらに流れてくる音符の羅列を打ち返す。

気が付けば、拍手が起こった。僕らの周囲は一般客に包囲されていた。

「え……？」

「お前すげえよ！ この曲フルコンするなんて……神降臨、だな」

何か誇らしげに言ってくる原。

「連、どうしたらこうリズム感が付くの……？」

健は健で泣きそうで大変。包囲していた一般客は、もう終わりだと気づくとすぐにそれぞれの遊び場に向かっていった。

その時、UFOキャッチャーに某ジャンプヒゲオヤジシリーズに出てくる、カメのキャラクターのぬいぐるみが目に入った。

カメ……何か忘れてるような……。

「連、次さドラゴソボールのカードのヤツやろうぜ！ かめはめ波くつつて！」

「小学生か……」

かめはめ……はっ！

思い出したっ……！

「ホントにゴメン、急用思い出した……！」

「ジョークはよそうぜ、連」

「そうか。そりゃ残念だけど、またこうして遊べればいいな！」

「そうだね、健」

「じゃな、また明日！」

健は小さく手を挙げた。

「OK、またな！」

僕も手を挙げ返し、背中を向けて走り去った。

トンちゃああああん！！

9 緊急！

外に出ると、ゲーセンの騒音の代わりに、雨が地面をピシャピシヤと打ち付ける音が聞こえてきた。しかし、僕は傘をさすのも忘れて、急いで桜高に駆けつけた。

理由は言うまでもない。軽音部のアイドル、トンちゃんが飢えに苦しんでいるからだ。

桜高に着いて、ひとまず昇降口前の屋根で雨宿りをする。

「はぁ……はぁ……。うわぁ、びしょ濡れだ……」

結構雨は強かったらしく、僕は全身びしょ濡れ状態になっていた。頭をゴシゴシすると、水しぶきが飛んだ。どうしよう……。

「ふえくちっ！」

突然僕の背中に寒気が走り、くしゃみをしてしまった。非力だけど体だけは丈夫だと自覚している僕でも、これでは風邪を引いてしまいかもしれない……。

「と、取りあえず中に入ろっ……ん？」

後ろから数人が走ってくる音が聞こえてきた。振り向いて確認すると、そこには私服姿の梓先輩達4人がこちらに向かって走っていた。

しっかり、傘をさしている。

「……うう」

自分に激しく後悔。

「……あれ、連くんだ」

僕に気付いた憂先輩に声を掛けられた。

「こんにちは」

一応、挨拶をする。

「レンコンも、トンちゃんのために？」

葵が呼吸で途切れ途切れになりながら質問をする。先輩達も結構走って来たんだ。

僕はバレないように一回深呼吸をして息を整える。整えたつもりだった。

「うん……僕も、その、トン、ちゃん、の……」

しかし、息が整わないどころかさっきよりもひどくなり、さらに急にクラッとめまいが来てよろける。

「……大丈夫!?」

「無理しないで!」

先輩達に心配させる訳には……！

「憂先輩、心配は、いりま……せ……ん……」

「いやいやこんなんだったら絶対心配するから！ 逆に心配しないと人間としておかしいから！」

純先輩……。

「とりあえず、中に入れてもらおう？」

梓先輩……。

「そうですね。レンコンが根腐れ起こして死ぬ前に……」

おいちよつと待て葵……！

「僕は死にません！ 根腐れ起こしません……！」

精一杯のツッコミをかます。

「……すごい、生き返った。さすが葵」

「エへへ……」

何か知らないけど葵が純先輩に褒められている。なぜ……？

「じゃ、守衛の人に事情話しに行こう？」

憂先輩がそう促した。さすがにここで時間食っていると……。

「はっ！　急ぎましょう先輩！！」

やばいやばいやいやいやいやいやい！！　ひよっとしたら今にも死にそうな程弱っているかも……！！！！

僕は昇降口のドアを勢いよく開け、ダッシュで入ろうとした。

案の定、鍵は閉まっていたらしい。

「あ痛っ！」

アクリルに額を強打。

……ああ。あなたは大天使チェラッタ丸第371号機様ですか。
何という、僕はもう……。

……僕の意識は、ここで途切れた。

9 緊急！（後書き）

大天使チエラツタ丸第371号機様はもう出てきません。確実に。

10 ワクワク！

「あーっ！」

純先輩の叫び声で、僕は目を開けた。真っ先に目に飛び込んで来たのは、薄暗い天井だった。僕の体にはバスタオルが丁寧に掛けられている。

寝ている所が紺色の長椅子である事、トンちゃんの水槽のポンプのジーという音が聞こえてくる事から、ここはいつもの準備室だと認識。方法は分からないけど、とにかく先輩達にここまで運ばれたのは理解できた。

先輩達の気遣いは非常に嬉しい。でも、一つ僕が悲しく思った事。

「……どうしたんですか、じゅんじゅん先輩？」

「ここにあつたよ第6巻！」

……それは、僕の存在が無くなっていた事。

僕は存在をアピールするべく、掛かっていたバスタオルを払いのけ、長椅子からむくりと起き上がって先輩達の方に向かった。チラッとトンちゃんの方を見ると、いつも通り元気そうだったので内心ホッとした。

「来て良かったね」

「私にも見せて下さい！」

「読み終わったらねっ」

憂先輩が保護者的発言をし、葵が純先輩に予約をする。でも、梓先輩だけは窓の外を見つめてどこか浮かない顔をしていた。

「確かにトンちゃんの事は良かった。でも……」

もしかして僕の事……？

「雨、いつまで降るんだろう……」

はい。ある程度予想ついてました。

梓先輩が見つめる窓の外側には、雨が結構降っている。僕がここに来るため走っていた時よりも間違いなく強くなっている。

「せつかくの日曜日なのにね……」

「うん……」

憂先輩の言葉にうなづく梓先輩。やっぱり、先輩達のいない間に暴れたかったんだろうな。僕は今日ちょっとだけ暴れてやったけど。

そんな少しがっかりした気分を、早速マンガを読んでいる純先輩が吹き飛ばした。

「じゃあ、4人でセッションでもしようか」

訂正。“僕以外の”少しがっかりした気分を吹き飛ばした。

「僕の存在忘れないで下さい！」

渾身の力で言ってやった。僕はここにいる！

「ごめん！　だって復活している事気づかなかったし……」

でも、みんなでセッション……何か心の底からワクワクしてきた。新鮮だし、どんな音楽を今いる5人でできるんだろう、って……。

「純先輩、やりましょう！」

僕が気づいた時には、心のワクワクとした叫びが口に出ていた。

「えっ、でも私に上手くできるかな……？」

憂先輩が出来ないはずないんだけど、一応部活には入ってないって昨日聞いたし……。

「大丈夫、簡単なのにするから」

純先輩がマンガを開いたまま机に伏させて、立ち上がった。

更に、梓先輩がこんな提案を。

「オルガンなら、弾けるんじゃない？」

「あ、小さい頃弾いた事ある！」

僕もあります。が、猫を踏む曲しか弾けませんでした。

「やってみよ、やってみよっ！」

珍しく梓先輩が興奮した面持ちで、憂先輩の手を両手で握る。憂先輩は最初戸惑っていたけど、うん、とにっこりスマイルで返事した。

「純、ジャズ研にギター置いてあったりしない？」

梓先輩が聞く。

「あるんだよ、それが。……葵はサックスいる？」

「いえ、ここにあるので」

葵は、今は何も置かれてないギターとベースのスタンドの近くに置いてある、アルトサックスのケースを指差した。ベースは背負って持って帰れるけれど、アルトサックスは背負えず、またなかなかの重量があるので、葵はいつも置いていつているらしい。

「OK。じゃ、ちょっと……」

「純先輩！ 僕のもお願いします！」

純先輩が準備室を出る寸前の所で、忘れられていた僕の存在をアピールした。

「うん、分かった。じゃ、2本持ってくるね」

「ありがとう、純」

「ありがとうございます、純先輩」

危ない、ギリギリセーフ。もし伝え忘れてたら……。

でも、僕は本当に楽しみだった。いつもと違うメンバーで演奏するのって、こんなにワクワクするものなんだ。

何でだろう……？

「連くん、エアギター？」

「えっ？ 梓先輩、何ですか？」

「だから……クスッ。自分の手見てみてよ」

何でだろう？ と思いながらも、僕は自分の手の位置に視線を落とした。すると、僕は無意識に見えない弦を掻き鳴らしてた。

「あ……」

11 セッション！

純先輩が楽譜とギターを持ってきてくれたので、僕は早速準備に取り掛かった。結構古い楽譜らしくギターとベースとオルガンの楽譜が1枚ずつしかなかったため、葵は憂先輩に楽譜を見せてもらいながらオルガンのメロディー部分を吹き、僕は梓先輩と1つの楽譜を見る。

「そういえば葵、オルガンの楽譜で大丈夫？」

「はい！ CからE に移調するのは得意ですから！」

「良かった、なら安心だね」

という純先輩と葵の意味不明なやりとりに首を傾げそうになりつつも、渡された緑のエレキギターをチューニングし、アンプに繋いで準備完了。

梓先輩達も準備が出来たようで、お互いに顔を見合わせた。

「それじゃあ」

梓先輩が純先輩に合図を送る。初見だけど、なるべくミスらないように……。

「いち、に、さん、し」

純先輩がゆつくりとカウントを取って、演奏が始まった。憂先輩のオルガンの短い前奏の後、僕は梓先輩と目を合わせ同時に入った。

“むすんでひらいて”。幼稚園の時に歌わされたな、なんておぼろげな記憶をたどった。

僕らの音が、大雨が出すザーザーという雑音を打ち消し、準備室に広がってく。ううん、準備室だけじゃなくてもっと広い所に響いているんじゃないのかな。

ドラムが無くてちょっと違和感だけど、それでもこうやって演奏するのって楽しい。本当に。

本当に本当に本当にっ！

- - -

演奏が終わった。僕らはまた顔を見合わせて、お互い笑った。ちよっとミスったけれど、全然気にならない。

楽しかったんだもん、それでいいんだ。

「あ……」

「雨が……」

梓先輩と純先輩が窓の方を向いた。

「え、何？」

「何ですか？」

憂先輩と葵が窓に寄る。僕も葵の少し後ろの位置に立つ。

外の様子は葵に邪魔されて見えなかった。けれど僕の耳に雨の音は聞こえず、代わりに橙色の優しい光が葵達のシルエットから漏れ出た。

「「うわぁー……！」」

僕らは揃って感動を声に出した。朝から降っていた雨が止み、夕日が僕らを照らしたんだ。

ケータイが振動する音が聞こえた。それに気づいた憂先輩はポケットからケータイを取り出し、カチッと開いた。

「あ、お姉ちゃんからだ」

唯先輩からのメールを、梓先輩が読み上げる。

「“ううゝ、ギー太がこいししいよ”……」

僕らはみんな声を出して笑った。

「ういっぴー先輩、今の様子を写メ送って自慢しちゃいましょう！」

「うん！」

憂先輩は葵の提案にうなずいて、ケータイを操作しカメラを起動した。超高画質らしい。

しかし、一つ問題が。

「連くん、もつと真ん中寄ってくれる？」

「憂先輩、それ以上は無理ですー！」

「もつと行けるじゃん！ それっ」

「うわっ！？」

「ごっーん。ばたーん。」

「いたーい……純先輩押さない下さいよ……」

「痛たた……」

「ごめん梓。大丈夫？」

「僕の心配もしてください……」

自分撮りではどうしてもカメラに収まらない。だって5人もいるんですよ、そりゃ無理ですよね……。

「憂、それズームかかってないよね？」

「うん、一応」

「うーん……」

それを聞いて、しばらく思案する梓先輩。そして……。

「はっ！」

「梓ちゃん、思いついたの？」

「うん。机が何かにケータイ置いて、セルフタイマー使えばいいんだ」

「その手があったか！」

「頭いいね！」

「憂、普通だと思うよ……？」

「……」

こうしてセルフタイマーを使って撮った写真は、キレイに5人が欠ける事なく写ってた。真ん中に梓先輩が青いギターを持って笑ってて、その右側には僕と純先輩がそれぞれの楽器を持って弾きまね。左側にはサックスを掛けた葵と何も持っていない憂先輩がピースを送ってた。

「送信つと」

憂先輩がメールを送った。僕らは本日4回目となるお互いの顔を見合わせる行為をして、クスツと笑った。

みんな、思っている事は同じっぽい。

唯先輩、どう思うんだろうな。

12 偶然？ 選択？

火曜日。3年生が京都から帰ってきた。きっと唯先輩達も貴重な体験してきたんだろうけど、僕らも負けじと楽しくてある意味貴重な体験ができた。

ジャズ研の練習を手伝った事。

憂先輩や純先輩達と一緒にセッションした事。

そして先輩達がいらない3日間で、僕は改めて気付いたんだ。

音楽ってすごいなって。そして、やっぱりここで音楽やって正解だったなって。

僕が桜が丘高校に入学しなかったら。僕が軽音部の輪に飛び込めなかったら。律先輩があの時ホールドしてくれなかったら……。

偶然なのかどうなのか分からないけど、とりあえずその点は過去の自分と先輩達に感謝しないと。

ま、そんな事を思いつつ部室に行く。準備室の目の前に来た時、梓先輩が唯先輩にかっさらわれるようにして準備室に入れられたのを目撃した。

いつもの事だけど、なぜか嬉しく思えた。一体その正体は何なのかは良く分からないけど、嬉しく思えた。

勝手に口角が上がってしまっただけで気持ち悪い人間になってしまっただけ

いるので、一呼吸置いて嬉しさを落ち着かせようとするがすぐ口角が上がってしまう。

自分の中では性的な目で一切見ていないけど、他人から見れば絶対に変態以外の何者でもないよ。

結局七、八呼吸くらいした上に無意識無感情を徹底的に脳に意識させて、ようやく収まった。気持ち悪い笑いじゃなくて、もう自然に笑えるはず。

僕は、ドアを開け

「レンコーン!!」

……事が出来なかった。ことごとく僕の邪魔をするよなあ……
悪気はないんだろうけど。

「いるんだよね、先輩達!」

いつになくハイテンションだなあ……。

「まあ、そうだけど」

「じゃあ何ですつと立ち止まってたの?」

一番聞かれたくない質問来た!。さすがにこれはごまかさないと後に響く。

「えつと……今まであった事をふと思い出していたんだ。まだ2カ月も経ってないのに、随分と色々な事あったなって」

内心、とつさにウソを思いついた僕が怖くなった。いやこれはウソじゃない。窮地を切り抜けるためのテクニクだ。あまり多用したくはなかったけど、今回ばかりは仕方なかったんだ。それに若干本当の事混じっているしいいじゃん。

そうやってごまかせる自分も怖かった。

気を取り直そう。葵が神妙な顔をして口を開こうとしている。

「そうだね。先輩達がいなかったら、私の2カ月はこんなに充実しなかったと思う。すぐ学校生活に馴染める体質だけど、だからこそ普通に過ごすと毎日の日常に新鮮さって物がなくなつて、困る事は少ないけど面白い事もないんだよね」

もうさっきの自分でもウソだと思わない方がいいのかも。だって実際自分の本音だし。それに応えて葵も本音を語ってくれているんだし。

「でも、軽音部に入ってから毎日が新鮮だし。とっても楽しいし。ずっと悩んで正解だったな、あの時」

それは、まるで昔の事のように。

でも、不思議な事に1カ月前の話。ぎゅっと詰まってるからこそ長く感じるのかな？

もしかして、実はその逆だった？ でも、時間の長さなんて人によりけりだから一概には言えないけれど。

だけど、僕は知らず知らずの内にこうつぶやいていた。

「……ありがとう」

なぜその言葉が出たのか分からない。けれど、事実僕はつぶやいていた。

「えっ？」

葵が聞き返すけれど、僕でも何で出たのか分からないから説明のしようがない。だから、もう一度はつきり言う。

「ありがとう。ただ、それだけ」

葵は首を傾げた。けれどそれには構わないで、僕は準備室に入ろうと促した。

無意識な時って、良く分からない。でも、それがきつと自分でも干渉できない心の声なんだろうな。

……なんて、ドアノブを回す時ふと思ったりして。

13 お土産！

「……ぶ？」

梓先輩はそれを見つめて、首を傾げた。

僕が音楽室のドアを開けると、既に先輩達がイチゴタルトを囲んでお茶してた。僕らも長椅子に荷物を置き、早速席に座ってお茶をする事にした。

で、突然唯先輩が梓先輩に渡したのが“ぶ”の文字のキーホルダー！。

この時点では、限りなく意味不明だ。

「お土産、ですか？」

「そう！ あおと連くんもあるよ」

今度は葵に“く”のキーホルダーを渡す。そして僕が“が”のキーホルダーを受け取った時。

「うっ……ゆっぴー先パイ……！」

葵は突然号泣を始めて、唯先輩に抱きついた。

なぜ……？

「よしよし。大丈夫大丈夫」

唯先輩は突然の出来事に慌てず、優しく葵の頭を撫でている。

ムギ先輩の様子がおかしい気がしたけれど、ここでは気にしないでおこう。

「この様子だと、葵は分かった感じだな」

澪先輩がちょっと口角を上げて言った。分かった感じて……？

澪先輩は3年生の先輩に目配せして、“せーの！”で一斉に何かをテーブル中央に置いた。

“ん” “け” “お” “い” ……？

それと自分の持つ“が”と、梓先輩の持つ“ぶ”。そして、葵が持っているであろう“く”。

「あっ……」

梓先輩は少しはつとした顔になって、頬をほのかに染めた。気づいたのかな、きっと……。

すると、律先輩が突然立ち上がった。

“くいおけぶんか”！ 桶を食う文化の事だっ！

「違っだらっ！」

冴える漣先輩のツッコミ。待つてましたという律先輩の顔。

というか桶を食う文化って絶対人間じゃないですよ……。

「おがけいぶくん！ 新番組の刑事ドラマ“真夜中の狼”に出てくる小賀警部の愛称だぁー！」

「それも違う！」

「ちなみにTBS系列で来週日曜夜10時から放送」

「しないから！」

律先輩の言葉並び替えの才能には舌を巻く……。

ってそうじゃなくて。一体どんな言葉なんだろう……。

ダメだ、小賀警部くんの印象が強過ぎて思い浮かばない……！

「けいおんがくぶ……」

梓先輩の小声でつぶやいた言葉に、先輩達みんなが反応した。なるほど、と僕は思いつきり納得した。

「正解」

ムギ先輩はそう言って、梓先輩の目の前に“けいおん”とキーホルダーを置き、二つ程スペースを空けて梓先輩の“ぶ”を置いた。そして、葵が“く”をその左隣に置いた。

みんな僕の事を見つめてきた。僕の手握られているそのキーホルダーは、“が”。

それを、“ん”と“く”の間にそつと置いた。

みんなから笑みがこぼれた。僕も、心から自然に笑う事ができた。

これは僕ら桜高軽音部の印。例え離れていても、永遠に会えなくなる日が来ても……

僕らは一つ。永遠に。

「練習……しましょうか！」

梓先輩は立ち上がって、そう言った。それには嬉しさというか……どこか感動した感じの表情に見えた。

普通なら“よし、やるぞ！”ってなる所だけど、そうは行かないのが桜高軽音部。

「ええー、今日はお茶でいいよー」

「時差ボケだしー」

ほら。唯先輩は疲れた感じでゆるーくはつきり断って、律先輩に至っては机に突っ伏して意味分からん言い訳を平然と……。

ここは日本です。京都も日本です。よって2ヶ所に時差なんてありません。

ムギ先輩ニコニコしてるし、葵はいつの間にか泣き止んでイチゴタルト頬張っているし。

頼みの綱の澪先輩も普通にお茶啜ってるし！！

「うう……」

梓先輩は、がつくり肩を落とした。

でも、たまには悪くないかも。こういった息抜きというものも。特に今日は先輩達からたくさん修学旅行のお話も聞けたし。しゃれこうべについても分かったし。

何だかんだで梓先輩も興味津々な様子で聞いていたし。

やっぱり、軽音部入って良かった！

13 お土産！（後書き）

これで、#4 完結です。オリキャラ中心のストーリー、いかがだったでしょうか？

次回。葵のサックスに対する特別な思いが明らかになる予定。

葵の楽器！

私は深沢葵。飛び入りで軽音部に入部したばかりの高1です。

私はサックスとベースという2つの楽器を受け持っているんだ。ベースの方はヤバイ位ヘタらしいけど……。

でも、両方とも特別な思い入れがあるんだ。

その理由は、前にみー先輩……つまり秋山澪先輩と帰った時に話して、りっちゃん先輩にもみー先輩経由で伝わっているんだけど、他の先輩達やレンコンは知らない事。

聞かれたら話すけど……。実際みー先輩に話した時にはこう聞かれたし。

「葵って、どうして右利きなのにレフティ使っているんだ？」

私はそれを聞かれて一瞬ためらったけど、みー先輩が“嫌ならいいぞ”って気を遣ってくれたから。

「OKですよ。……大分重い話になりますけど」

って言った。みー先輩は小さく、でもしっかりと頷いてくれた。

……あ。ここから先は過去の私が言ったように、大分重い話になっちゃうから覚悟してて。

準備はいいね。じゃあ、始めよっか。

今私が住んでいる所は、実家じゃなくておばさんの家なんだ。昔は普通に実家だったけどね。

私の両親は、私が1歳位の時に事故で亡くなったらしいんだ。だから……私は両親の顔知らない。

ある日、幼稚園に通っていた私はおばさんにこういう質問をしたんだって。

「なんでわたしには、おとうさんとおかあさんがいないの？」

幼かったからこそ、こんな素朴な質問ができたんだろうな。けれども、その真実は幼い私にとって非常に厳しいものだったんだ。

だから、おばさんは物置からサックスを引っ張り出して来て、

「これが、葵のお母さんだよ」

ってケースを開けてくれた。

その時の私はなんて思ったか全く覚えていない。でも、悲しみなんてものはどこにもなかった。

おばさんによるとそれを触ったとき、私はニコニコと嬉しそうに笑ったんだって。きつと嬉しかったのか、それとも何かを感じ取ったのか……。

ちなみにその時“お父さん”はどこかに行っていたらしい。実際には、おばあちゃんの家に眠っていたけど。

幼稚園の時は、指も押さえられないし身長が足りなくて底が床についてしまったため、“お母さん”をただ眺めるだけだった。だけど、小学3年生位だったっけな。その頃から私は吹き始めたんだ。

その頃の私はもう真実を知っていた。私のお母さんとお父さんが既にこの世にいない事も、これがお母さんが残してくれた数少ない遺品という事も。

金のメッキが少し剥がれていて、光沢が控えめな所とか、古そうなケースなのにちよつと新しい取っ手を取り付けられていたりする所とか。

お母さんは本当にサックスが好きだったんだ。

それで、私も私でそうだった。このサックス……ううん、“お母さん”がずっと好きだった。

出会った時から、ずっと。

ベースは、お父さんが昔高校生の時に使っていたらしい物なんだ。見つかったのは結構最近の事で半年前位だったかな。左利きだった……らしいよ？

私の楽器に対する思い入れ、分かってくれた？ 何か原因なのかは分からないけど、私はこの楽器が一番良い音が出ると思うんだ。

この楽器には、お母さんとお父さんの熱い思いが込められている。そして、私の息や指先に更なるパワーをくれる気がするんだ。

お父さんのベースはちょっとズレたパワーっぽいけど……。でも、
いずれ私はそのパワーも上手く取り込めるようにする。

とにかく、私がこの楽器を使う事によって、私を産んでくれて育
ててくれた、顔も知らないお母さんとお父さんの恩返しになると信
じてるから。

1 到来！（前書き）

梅雨の話です。アニメでは軽音部のメンバーが揃って活動するのは後半のみですので、ちよくちよくオリジナル挟みます。

1 到来！

僕が一番嫌いな季節が今年も到来して来た。

行ってきまーす、と傘を持ち家のドアを開けると、無数の水滴が降りかかってくる灰色がかった暗い世界が広がる。

簡単にいつてしまえば、結構な量の雨が降っているという事。壁にひつつくカタツムリを良く見かける梅雨の到来だ。

そして、生まれてこの僕、雨の日、特に梅雨時は決まってツイてない。

小雨ならさすがにないが、今日位の雨では確実に靴の中が浸水する。替えの靴下を忘れてしまったら、その日は某純一スタイルで過ごさなければならぬから気持ち悪いったらありやしない。

それに車から水をかけられる、なんていう事も多々ある。最悪は、小学生だった頃。水たまりの目の前で転倒し、顔面からダイブ。顔が泥だらけになった上溺死しそうになった。あの時は本気で救急車沙汰だったな……。

ただ。高校生になった僕はもう違う。背に背負うギターはビニーで完全武装。極力水しぶきを立てないような歩き方で浸水をガード。極力水たまりの周辺は避ける。

それを無意識にできる僕はもう違う。雨に泣かされ梅雨に泣かされた過去の僕なんてどこにも……！

油断した一瞬、水しぶきが飛んできた。見ると、そこには黒の野良猫。どうやら猫が身震いさせたため僕に水滴が飛んできたっぽい。ノーダメージクリアは難しいのな……。

ただそれ以外の大事も起こらず、無事に高校に到着できた。ちょっと車通りの多い道が意外に難所で、何度か車からの攻撃をくらいそうになったけど……ま、無事だったよ本当。

靴を脱いでも一切濡れてないのは、一種の奇跡だった（僕の中では）。内心超ガッツポーズを決めている。

ひとまずは上履きをはいてローファーを下駄箱にしまい、僕は教室にも行かずに早速準備室に行き自主練を始める。まだ朝は早い、誰もいるはずがなかった。

薄暗い準備室。僕は荷物を長椅子の上に置いてからギターを取り出し、アンプにつながずにひたすら曲を練習する。僕だってバンドメンバーの一員だ、いつでも演奏できるようにするのは当然だ。

まず、新歓の時に聴いた“ふわふわ時間”^{タイム}。あと1曲は、新曲だという“ぴゅあぴゅあはーと”。これらって男子がやるような曲ですか……？ 特に歌詞とかタイトルとか歌詞とか。

漣先輩、もっとマシなの考えて下さいよ……。

ただ、生徒は女子の方が多いし。需要は必然的にあっちに傾くだろうから仕方ないと割り切る。

“ふわふわ”の方は8割出来てきたけれど、“ぴゅあぴゅあ”の方はまだ半分、といった所？ なかなか手応えのある楽譜だ。これ

ら全てムギ先輩が作っているんだと思うと、頭が上がらない……。

電気を点けることさえ忘れて練習する事約40分後、不意にドアが開いた。

「おはよう、連くん」

「お、朝から練習か」

「律、連が朝早くから練習してるのは毎日の事だぞ」

そこには3年生の先輩達が。楽器を置くために先輩達が朝準備室に来る事があるので、別に気にはしなかったけど……。

「おはようございます、ムギ先輩、律先輩、漣先輩、唯せ……！」

その時、僕は悲しい光景を見てしまった。

「おはよう連くん……ういーっぢっ……！」

盛大にクシヤミをかました唯先輩は、全身びしょ濡れ状態だったのだ。昔の僕とぴったり重なる……。

とにもかくにも制服が濡れていくしゃみをしているという事は、着替えるから僕はここから出るとの事ですな。

「ちょっと待って下さい、今出ますから」

電気が点けられ明るくなった中、僕はギターをスタンドに置き、

荷物を持って出ようとするけど……。

「あ……」

床が濡れてた。

滑った。まさにツルっと。

「うわあぁっ！」

「大丈夫！？」

顔面から床に衝突。やっぱり変わらないか、昔と……。この時ギター持ってなくて本当に良かった……。

2 誤解！

いつもの教室。でも、雨の日はなんか暗い。教室って意外と日当たり悪いから、電気を消すと大分暗くなる。

そんな中でも普通に授業を受け、普通に阿部と昼食を食べ、普通に唐揚げの中身を抜き取られて放課後。

てかどうやって抜き取った？ すり替えたとしてもどう作った？

敵（？）ながら尊敬した。

準備室に向かうと、梓先輩がドアの前で突っ立っていた。

別に、入ろうと思えばすぐに入れる状態だ。なのに、まるで入るのをためらっているような様子だった。

何だろう……？ とりあえず挨拶しよう。

「こんにちは、梓先輩」

「にやっ！？」

猫だ……。でも、梓先輩が猫化するのは軽音部内ではもはや当然の事になりつつある。

「……なんだ、連くんか」

「そんなに驚く必要ないじゃないですか」

だから猫化の件にはノータッチを決め込んでいる。また野良猫のごとく逃げられるし。

「何で入らないんですか？」

別に聞きづらい事ではないので、そのまま気になった事を質問する。

「ちょっと……怖くてね」

「怖い？」

軽音部入部から約2カ月。その間の怪奇現象や超常現象といった類の物は起きていない。

でも、一応そういうのが起こる高校もあるらしいという噂を聞いた事がある。そういうのを研究している部もある。事実桜高にも。

あと、そういうのを解決する部もあるらしい。これはどこか遠い世界の風の噂だけだ。

「それは……こんな事があったんだ」

「こんな事って？」

“こんな事”。この展開、もしかすると……！？

僕は身構える。そして、梓先輩は語り出した……。

「昼休みの時、準備室にギターを置きに行ったんだ。憂と純も一緒に。そこになぜか制服が譜面台に掛かっていたんだ」

あれ、それだけ……？

「だからちよつと怖いつていうかなんというか……」

眉毛を少しハの字にする梓先輩。ここで僕の考えを述べてみる。

「でも、準備室に制服を干す人なんて軽音部の誰かに限られると思いますけど」

「あ……それもそうだね。純が“誰かを恨んで、呪いを掛けている”って言うから……」

梓先輩は何気迷信を信じやすい事が発覚。そして僕は無駄に身構えて損した気分。

というか純先輩めちゃくちゃだ……。

気を取り直すため。

「じゃ、入って早く練習しま……」

「ひどいよあずにゃんっ！」

僕がドアを開けようとした時、突然唯先輩が突進していた。そして何を勘違いしたのか、梓先輩に……

「にやっ!？」

抱きついてきた。なぜ抱きつく。

「私はあずにゃんを呪ってなんかないよ！　むしろ大好きだよっ！
」!

抱きついて“大好き”と言った。という事は……。

……まあ、そういうのも中学の頃いたしね。僕はいい方がいいのかな？

僕はスタスタとその場から離れた。

「唯先輩やめてください！　誤解ですからーっ！」

「ありがと、あずにゃん」

「だから早く離れて下さい！　あ、連くん、違うからね！　唯先輩がたまたま……」

とりあえず男子禁制オーラを放つ2人から逃亡すると、階段で漣先輩に出くわした。

「あ、連。珍しいな」

「はい、確かに漣先輩だけとすれちがう、というのはあまりない気がします」

漣先輩、基本律先輩というし。

「そうだな。他の皆はもういるのか？」

「……梓先輩と、唯先輩だけです」

僕は答えるのにちよーつとためらった。

「梓は来ているんだな」

しかし、疑問点が1つ浮上。

「律先輩とムギ先輩は…？」

普段なら4人揃って来るはず。なのに、今日に限ってバラバラなのだ。

「ああ、ムギは今日日直だから遅れてる。……律は堀込先生に呼び出し食らってる」

澪先輩、苦笑。

「……そう、ですか」

僕もついでに苦笑。

「じゃ、一緒に準備室行くか」

「はい」

あのオーラが消えている事を祈りつつ、僕は澪先輩と一段ずつ階段を上っていった。

……この時、良く分からない何かが僕も心に引っ掛かっていた。

良く分からないけど、何かちょっと、複雑だなあ……。

3 通販！

外は相変わらずの雨模様。準備室も教室以上に日当たりが悪いので、部屋に入った時は暗くてまるで別の部屋のように思えた。

なるほど、確かにこんな所に制服が干してあったらちょっと怖いな……。

とりあえず今は無事全員が準備室に合流したので、ティータイムを楽しむ。

あれ？ 梓先輩、確か『練習しよう』とか言ってませんでした……？

でも。こんな事を気にしてはならない気がするので、自分の欲望に素直に従い紅茶を味わう。

とりあえず、唯先輩が朝びしょ濡れだった理由が分かった。過去の僕のような自爆ではなく、水溜まりに走って入ってきた子供に掛けられ、犬を触ろうとして掛けられ、トラックに水を掛けられて三重の水コーティングをされたとの事。犬は唯先輩の自爆のような気もしなくもないけど……。

「うわ、かわいそ……」

葵が水玉模様のティーカップを手に呟く。

「大丈夫だったんですか？」

「うん、今は大丈夫……」

なぜか力士テイスト混合で言う唯先輩。今大丈夫なのは見て分かりますけど……。

「へえ。朝、そんな事があつたんですか」

梓先輩はピンクの猫のティーカップを持っている。てか軽く受け流しすぎです……。

「梓は平気だったのか？」

澪先輩が聞く。

「はい。私はギターケース用のレインコート使ってますから」

梓先輩のギターには、ちょっと暗めな水色のカバーが確かに掛かっていた。

「えっ、そんなのあるんだ」

と唯先輩。つい最近楽器屋に行ったけど、僕もそんなの見てないな。

「ネットで買ったんです」

ネットかあ、僕にはいい思い出があまりないなあ……。なぜかネットからすぐ切断繋がれたりとか、検索の文字入力でフリーズしたりとか、気付いたらホームページが“Y A H O O！”じゃなくて“V A H O O！！”だったりとか……。

「結構便利ですよ。3000円するのが1980円いざやうはで……おまけに、ギター用の乾燥剤も付いてきたんです」

そう言ってカバンから乾燥剤を取り出し、僕らに見せた。

ここまでで止めておけば、僕もネットの便利さに気づいて再び使い始めたかもしれない。

でも、梓先輩のネット自慢はこれで終わらなかった。

「それからこれもネットで買ったんですけども……」

再びカバンから何かを取り出す梓先輩。

「ほら！ これは壁にくっつくギターハンガーで、肉球の形してるんです」

ここら辺から本当に役に立つのかどうも怪しくなってきた。果たして、スタンドがあるというのにギターを壁に掛ける必要性のある場面はあるのだろうか？

他の皆さん方もポカンとしてますし。

「あ、カワイイですねこれ！」

「でしょ？」

約一名を除いて。

「あ、これは指が大きく開くようになる強化グッズで……他には寝ている間にリズム感が養えるCDなんて物もありますよ」

実は指の力がちょっと上がる程度ではないのか。

寝ている間は何も聴こえないんじゃないのか。

疑問点が多数挙がる……。

「いいかも知れない……」

身を乗り出し好奇の目を向ける葵は、将来悪徳商法に引っ掛かり
そくだ……。

「梓」

澪先輩が言いづらそうに口を開く。

「はい？」

「それ、みんな役に立ったのか……？」

あからさまに目を逸らし、顔を紅潮させる梓先輩。

ほら、やっぱり……。

「み、皆さん練習しましょうよ!」

「役に立たなかったんだな」

「うつ……」

何とかごまかそうとする梓先輩に律先輩が容赦なくトドメを刺しました。葵も失望して少しはおとなしくなつて……

「先輩、それ私に譲ってくれませんか!？」

……いいや。そう好奇心は止まらない。

「う、うん。いいけど……や、役に立つかどうかは、わ、分からないよ?」

梓先輩は地味に、役に立たない事を認めた。だけど葵は、

「でも、個人差とかありますから!　もしかして私が使つたら……
つて事もあるじゃないですか!」

と。

「う、うん……」

戸惑う梓先輩。誰も、何も言う事が出来ない。

「いいですよね!？」

「う、うん。いいよ……」

「やった！　ありがとうございます!！」

戸惑いつつも梓先輩は葵に強化グッズとCDを渡した。葵は純粋に喜んでいた。

……これで、いいよね？

「それにしても、体を張ってギターを守ったゆっぴー先輩、カッコいいです!」

自分のカバンに梓先輩から貰ったばかりのグッズを詰め込みながら、葵は上機嫌で言う。

「えへへ。もつと褒めて」

それを受け照れる唯先輩。呆れる律先輩と梓先輩。

「はい！　犬が来たら触っちゃう所とか、そういうのもカワイイなっと思っています!」

「ああ、ありがとう」

「唯、それ褒めてない気がするぞ」

今日は律先輩のツッコミが冴えている気がする。

「でも気を付けないと、ギターを濡れたまま放置すると、フィンガーボードにカビ生えたりするらしいですよ」

「ひっ!？」

梓先輩の発言に突然漑先輩が反応した。僕はちょっとビクった。

「みー先輩、どうしたんですか？」

「な、何でもないよ葵……」

怯えている気がするのは気のせいでしょうか。

そして律先輩がニヤリと笑ったのも気のせいでしょうか。

「へえ、そうなんだ」

律先輩は漑先輩の耳元で何かささやいた。

「ひいひいひいっ!!?」

「うわあっ!？」

すると、漑先輩は体をガクガクと震わせながら、突然大音量で絶叫し始めた。

普段冷静な漑先輩が突然絶叫し始めたんだ、めっちゃくちゃ驚いたよ。

「ど、どうしたんですか澪せ……」

「怖い怖い怖い怖いーっ!!」

どうにもこうにも手がつけられない。そこで、ムギ先輩がフオロ
ーを入れてくれた。

「澪ちゃんは怖い話とか痛い話はちょっと苦手なんだよ」

「ちょっと所じゃない気がするんですけど……」

とにかく、また新たな澪先輩の意外な一面を発見した。

「うっうっ……」

それにしても……。

「どうすれば収まるんですか……?」

「それは時の清い流れが恐怖を洗い流してくれるだろう……」

「律先輩、とりあえず澪先輩に謝った方がいいんじゃないんですか
?」

4 張り替え！（前書き）

今回、長いです。今までの2チャプター以上の長さです。

4 張り替え！

「ごめんな濡ー、ほらすっかりしろって」

「ううう……」

軽く謝罪する律先輩と、それでもガクブル震えている濡先輩を尻目に。

「まさか、ギー太が変わり果てた姿になっているはずが……」

唯先輩はギターならぬギー太のケースを開ける。それを覗く僕と梓先輩、そしてちゃっかり葵も。

先輩1人に後輩3人がたかっている構図だけど、気にはしないよね普通。

さてギー太はというと、いつかの50万円ギターのようなカビ臭さは無く、いたって健全な状態に見えた。

けれど。

「カビとかは無いですけど、ちょっと弦にサビがありますね」

良く見ると、ちょっとだけ弦が変色してた。なるほどね……。

「弦、張り替えた方がいいかな？」

梓先輩の方向を向き、質問する唯先輩。

「この前弦を替えたの、いつですか？」

「2カ月前」

すぐ出てきますね良く。

「じゃあ、張り替えた方が良いでしょうね」

え。2カ月でもう寿命……！？

僕は、スタンドに立ててある、青色の相棒を見る。

もう、僕が相棒と出会って2カ月位経つ。もちろん今まで弦を張り替えた事は一度も無い。

つまり、今が丁度張り替え時、という事なのだろうか。

思いきって、梓先輩に質問する。

「梓先輩！」

「何、連くん？」

梓先輩は、くるっと長いツインテールをたなびかせながらこちら側に向いた。

「僕のギターもそろそろ弦、張り替えた方が良いでしょうか？」

すると梓先輩は僕の相棒に近寄って弦をじっと見ると、

「うん。弦、張り替えた方が良いよ」

と。

「連くん、新しい弦持つてる？」

「えっと、確か……」

僕は心当たりのある所を探す。確か、ギターケースの中に買ってきた時に付いてきた新しい弦がきつとあるはず……。

あった。水色のパッケージの、新品の弦。

「ありました！」

僕は新しい弦を梓先輩に見せる。

「あ、私と同じだー」

そういう声は唯先輩。僕の手を持つ新しい弦を指差しながら、唯先輩も水色パッケージの新しい弦を掲げる。

「そうですね」

僕はちよつと微笑ましい気分になった。良く分からないけど。

「じゃ連くん、クロスも用意して。ニッパーとかはまだ無いと思うから……」

「私あります！」

梓先輩の言葉をさえぎり、青い取っ手のニッパーをほら、と僕に見せるのは葵。

「じゃあ、葵ちゃんに貸して貰って」

「はい」

僕は、葵からニッパーを受け取った。

「てか刃向けるなって……」

「自分が大切ですから」

「信用してよ……」

そんな事は置いておかなければならない。

「あずにゃん、私弦替えてるね」

「はい」

唯先輩は床にちょこんと座り、膝にギターを置いて、黄色いニッパーを構えた。

ちよつと危なっかしいな……。

僕は唯先輩を横目に、ギターのクロス……つまり布を持ってきた。

「準備OKです」

「うん。じゃ、一緒にやってみよ?」

「はい」

僕は唯先輩と同じく床に座り、相棒を膝の上に置く。梓先輩のギターの弦の張り替え方講座、スタート。

「まず、これでペグを回して弦を外して」

「……何ですか、これ?」

梓先輩が渡してきたのは、円柱状の回し手みたいなのがついた、小さな道具。何か、不思議な形してる……。

「これはストリング・ワインダーといって、こうしてペグにはめて回すと……」

回し手じゃない所が見事にペグ……つまり、弦を張ったり緩めたりするネジの部分にぴったりはまった。そして、そのストリングなんちゃらを回すと、ペグがあっという間に緩んでいく。

手で回すより圧倒的に早い。

「ほら。これで、弦を外すの。やってみて」

「はい」

僕がストリングなんちゃらを受け取り、別のペグにはめようとし

た時。

「来るな……ギー太……！」

……はい？

唯先輩がやたら気になったので、僕は唯先輩の方を向く。唯先輩は今まさにニッパーで弦を切ろうとしている所だった。

「梓先輩、そういうやり方もアリなんですか？」

「うん。私も大体その方法でやるけど……」

「じゃあ何で僕には今のような方法で教えて……？」

「何か……やらかしそうだから」

「お心遣い誠にかたじけなく存じます」

「……何、それ」

そして、震える唯先輩の手で握られたニッパーが弦を切断した瞬間。

「はっわあああああっ！！」

唯先輩に弾け飛ぶ弦。妙に演技がかったリアクションをする唯先輩。そして、

「ん」

何だそれ。

「私に攻撃するとは」

「だから、ペグ緩めてから切って下さいよ」

「はっ！ そうだった！」

梓先輩の指摘にオーバーで驚く唯先輩を見て、僕は気付いた。

僕なら絶対にやりかねないな、これ。運悪く目に入って失明しそうな気もするし。

「ギー太、今、新しい弦に替えてあげるからね」

唯先輩は新品の弦をパッケージごと持って、ギー太に話し掛けている。

「唯先輩、いちいちそんなに楽しそうに話し掛けなくても……」

それを見て、梓先輩が言う。その一言が騒動を引き起こす原因になるうとは、この時思いもしなかった。

「ん？」

振り向く唯先輩。梓先輩と目が合う。

何、この妙な雰囲気。

そして。

「あずにゃんやきもち?」

「なっ!?!」

ダメだ僕はここに居てはいけない、いけないんだここはもう男子禁制なんだ、だから僕はここに居てはいけない……!

僕は準備室から逃げ出して、準備室の側で男子禁制オーラが消えるのを待った。

また、変な気持ち。

僕には良く分からない。でも、何かモヤモヤとした、言葉では表しにくいこの複雑な気持ちは、しっかりと感じ取れる。

一体、何なんだろう……? 答えを見つけようとすればするほど、その気持ちの正体が見えなくなりそう。

そしてその気持ちが見えなくなるのが、僕は怖かった。

「レンコン」

扉がやや乱暴に開き、泥に根づく植物の名前で呼んで来たのは葵。

「とりあえず、収まったよ」

その一言にほっと一息つく。葵は、何かを見透かしたような笑みを浮かべて、

「平気だつて。あずにゃん先輩は誰にも取られりゃしないから」

と、意味不明だけど意味深な事を言った。

へ……？

あっけらかんとする僕に構わず、葵は僕の手を引いて準備室に入っていた。

中に入ると、唯先輩が弦の張り替えに悪戦苦闘し、梓先輩が僕のギターの前で待っていてくれた。

「連くん、お帰り」

ムギ先輩が紅茶片手に呼び掛けてくれた。

「連も、遷と何か似たところあるよな」

「それ、どういう意味？」

「あ、ちょっと違うか」

律先輩に遷先輩が珍しくツッコまない。本当に珍しい。

僕は自然に出た笑顔で返すと、待っていていた梓先輩の真正面に座った。

「お帰り、連くん」

「あの……」

「う、ううん！ 私、そ、そういうのじゃ無いからね！」

何か言おうとして、遮られた。なぜ……？

「じゃ、続きやっていこう？」

「はい」

という事で、梓先輩のギターの弦の張り替え講座再開。

「とりあえず、古い弦は全部外したんだよね？」

「はい」

「もし、固くはまっていたらブリッジピンはペンチとかで抜いてね」

「はい」

ブリッジピンとは、弦を留めるピンの事。部品の名前はもうバツチリ！ ……だと思っ。

「じゃあ、ヘッドの部分とかクロスで掃除して。弦を外した時がじ

やないと、なかなか掃除できないから」

「はい」

ヘッドは、右利きギターだと持った時左手の方に来る、ペグとかが付いている所。僕はそこを優しくクロスで拭き取る。意外とホコリが溜まっていたようで、拭いたクロスにはホコリが結構付着していた。

「いよいよ次は新しい弦を取り付けるよ」

「やっとなすね」

「うん」

ふと、唯先輩の方を見ると、結構色々散らかっていた。楽しそうな表情はどこかに行つて、真剣そのものになっている。

「よし。じゃ、新しい弦を出して、しっかりほぐしておいて」

僕は要領良く丸まっている新しい弦を取り出し、一本ずつ丸まりを伸ばしつつほぐしていく。わりとこの感覚、好きかも。梓先輩も少し手伝ってくれた。

「OK、次行くよ。弦のボールエンドをブリッジの穴に入れて、ピンの溝と弦を合わせて押し込む。……って言っても分からないよね」

「はい」

僕の情報処理能力では到底……。

「じゃ、私がやってみるね。まず、このボールエンドを穴に入れて……」

さすがは梓先輩、作業が早かった。ちなみに、ボールエンドとは弦の端っこの穴が開いている所だ。僕も初耳だった。

僕もやってみたけど、やっぱり慣れないとなかなか難しい。でも、自分でやる事が上達の一番の近道なんだよね。唯先輩はよく梓先輩に任せているけど。

弦を軽く引っ張ってしっかりはまってるか確認して。

「次は、弦をペグの穴まで通すよ。これも私が手本最初に見せるからよく見ててね」

梓先輩は、親切に分かりやすく教えてくれた。よし、僕も……。

1・弦の先端をヘッドまでピンと引っ張ってペグの穴に通す。この時、ペグの穴の向きはネックと平行、つまり真横にしておく。

「なかなか入らない……！」

「糸を針に通すのとか苦手？」

「はい。大いに苦手です」

2・弦を真っ直ぐ伸ばし、ペグから5cm程の所で曲げて折り目を付ける。

3・折り目を付けた所まで、弦を押し戻す。

「よいしょっと。はい、出来ました」

「お。でも、次が重要なんだよね、これが……」

5・弦を押さえながらペグを回し、弦を巻きとる。

「上手く巻けない……！」

「連くん、弦を少し引つ張ってピンと張ったままの状態で巻きとって。そうすると上手く行くよ」

「左手が痛くて力が入りません……！」

「しょうがないな。持っててあげるから巻きとって」

「あ、ありがとうございます……」

6・ナット（ヘッド側で弦を支える部分）の溝に合わせる。

7・ニツパーで余った弦を切る。

「……ヤバイです」

「どうしたの？ 手、震えているけど……」

「弦が切れません」

「……果たして彼はこの先大丈夫なのだろうか」

「大丈夫ですっ！」

何はともあれ、無事初めての張り替えが終わった。僕の心は達成感で満ち溢れていたけど……。

「あの、ちょっと休みたいんですけど良いですか？　もう握力が限界です……」

手の震えが止まらない。

「うん、仕方ないしね……」

「ありがとうございます……」

それと同時に。

「やっと終わったー……」

どれだけ時間掛かっているんですか唯先輩。

「これで燃え尽きてどうするんですか」

梓先輩、僕の事も考えて下さいよ……。

「唯は握力平気なんだから練習するぞ？」

零先輩が練習を促す。けれどこの後の一言が……。

「雨も止んでるいい気分……」

「よし、帰ろう!」

えええええ。なぜ唯先輩……。

「ちょっと練習するんじゃ……」

梓先輩が理由を聞く。

「ギー太が濡れちゃうよ」

「またギー太ギー太って……」

これはフラグ立った。僕はそそくさと準備室から退散。

「あずにゃんもあずにゃんで、大事に思っているからね?」

「はっ!!?」

4 張り替え！（後書き）

作者はギターの張り替えなど行った事は一切ありません。そのためこの知識は本からのものです。何か違う点がありましたらご報告下さい。

5 油断大敵！

僕は雨が止んだ曇り空に包まれた薄暗い道を、みんなで帰っていた。もう既に律先輩達とは別れ、今は唯先輩と梓先輩という。

雨が止んでいる、濡れる心配はあまりしなくていいんだ、イヤッハー。っと思っていて。実際今のところ水濡れ一つない。だけど……。

「連くん！ 前水溜まり！」

「えっ！？ ……うわわわわ、ぎゃあっ！！！」

ばしゃーん。

油断してたら結構深い水溜まりに足を踏み入れてしまい、更にその高低差ゆえにバランスを崩して膝辺りも水に浸かってしまった。

やっぱり、ジンクスは打ち破れない……。人知れず、心が傷付く僕だった。

「大丈夫？」

唯先輩が声を掛けてくれた。

「は、はい。これくらい……」

「スッチー」

僕の背負っているギターに。唯先輩だからね……。人知れず付いた心の傷が更に人知れず深くなった僕だった。

「唯先輩、スッチーって……もしかして連くんのギターの事ですか？」

梓先輩が若干呆れぎみな感じで聞く。唯先輩はそれに全く動じる気配を見せず、聞いてもないのに名前の由来を話した。

「そつだよ。確かすとらいくかすたーとかそんな感じの種類だったから……」

「「ストラトキヤスターです」」

あ。

梓先輩とツツコミが見事にハモった。思わず顔を見合わせると、梓先輩はクスツと笑った。

もうこの事には免疫がついている。こんなんで顔を赤くするような僕はもういないはずだ……。

「ねえ、あずにゃん。気付いてる？」

「え？ は、はい……気付いてはいますけど……」

「例え私の元からいなくなっても、私はあずにゃんの事……」

「誤解するような事言わないで下さいっ！ 特に連くんの前ではっ

「!!」

……何の話だろう？

「それよりも、連くん大丈夫？　また意識不明とかならないよね？」

梓先輩がようやく僕の心配をしてくれた。

「はい。同じ事は二度起こりませんから。というかそれと濡れているのはあまり関係ないと思うんですけど……」

あの時僕は体温低下で意識不明になったんじゃない。頭部強打で意識不明になったんだ。どちらにしろカッコ悪い話だけだ。

「タオルとかで拭かなくていいの？」

今度は唯先輩。

「はい。濡れたのは膝ですから、別に拭かなくても平気ですよ」

多分ね。

この後は何事もなく、僕は無事に家に辿り着く事ができた。被害が足と膝だけで良かったな……なんて思う。

僕はすぐに自分の部屋で半袖Tシャツとジーパンといういつも通りのスタイルに着替え、制服のズボンを羽の無い扇風機で乾かし。

「よし……」

今日の授業の復習を。誇り高き軽音部唯一の男子部員として恥ずかしい所は見せられない。

……いや、確かに数多く見せてるけどね。でも、かかなくていい恥はかかないほうがいいでしょ？

とりあえず、苦手な英語の復習だな。今日はライティングだったから、復習はますます大切だ。

僕はカバンから、教科書をピンポイントで取り出す。

しかしパサパサになってた。

どうやら水溜まりで転倒した時にカバンまで濡れたようで、その時に浸水し教科書が濡れてしまったらしい。その後帰ってくる間に乾いてパサパサになったと推測可能。

そうになると、厄介な事に紙と紙がくっついてしまう。中学生時代にもこんな事があった（小学生の時はランドセルが防水加工だったからそんな事無かった）。

その時思いきり開こうとしてバツ！ とやったらベリッ！ ビリッ！ となって辛い経験をした事がある。

その経験を生かす事が出来る今の僕は、そつとそのくっついた紙を離すというスキルを発動する事が出来る。普通の事なんだろうけど。

中3から使ってる復習用ルーズリーフも準備したし、さあ始めよう。

僕はウォークマンの電源を入れて耳にイヤホンを差し、近くに小さなプラスチックケースに入っている綺麗なオールパーツの銀のネジ（ピックガード用）を持ってきて準備万端。

ちなみに持ってくるネジは気まぐれ。持ってる中で一番多いメーカーは、確か僅差でケーエム精工が多いと思う。

ウォークマンは全曲のランダムが基本。今日の一曲目はラジオ体操第一。たまたま家にあって、何となく面白そうだから入れておいた。

これをムギ先輩に編曲頼んで、軽音部でやったらきつと面白いだろうな……。

余計な事を思つのもここまで、僕は勉強モードに切り替えて英語に集中した。葵にも負けたくないし。

葵って実は頭良くて、最初の間テストで総合学年7位、しかも英語のテストでは100点取りやがったんだよ……。

思い出したら闘志が湧いてきた。勝つてやる。次の模試では絶対勝つてやるぞ！

うおおおおおっ！！ シャーペンフル稼働だああっ！！

でも。調子に乗ると、こうなるって事、僕は良く知っていたんだ。

あまりにも筆圧が強すぎたらしく、シャープンを当てた先からビリィィィ。

無惨に破けたルーズリーフの紙の破片は手前方向に飛んでいき、僕の後ろでヒラヒラと空しく舞い降りて、音もなく床に落ちていった。

「あ」

僕はその一文字しか発する事が出来なかった。

6 ジャージ！（前書き）

お久しぶりです。活動報告にも書きましたが、只今部活本気モード突入中のため、最低約2週間は更新頻度が減ってしまうと思われます。毎回楽しみにして頂いている方には申し訳ありませんが、ご理解の程宜しくお願い致します。（11/3）

6 ジャージ！

再び、日の昇らない朝が来る。今日も雨だ。日は差さず、ただ空からは無数の水滴がザーザーと降り注ぐのみ。

だから、僕は**ずぶ濡れ**になる。

もう一度言う。僕は雨の日、特に梅雨時になると必ず運が悪くなる。自分の中ではこんな公式は三角形の面積の公式並みに有名だ。

『雨の日＝不幸の日』

「だからお前今日ジャージなのか」

「突然カエルが飛び出してきて、びっくらこいてバランス崩してひっくり返ったんだよ……」

「それは**ご愁傷様**」

ギターが無事で良かったよホント。

あ、今、朝のSHR終わって、偶然なのか僕の後ろの席となつて
ショートホームルーム
いる阿部と会話中。どしゃ降りの今日も阿部は6時30分から朝練習をやっていたらしい。ホント凄いや、創部一年目でいきなり関東行くのも頷ける。

やっぱり阿部凄いなと思ってると、ふと一ツ気になる事が出てきた。

「なあ、阿部？」

「何だ？」

「阿部ってさ、どうしてバスケが好きになったの？」

「なぜそれを今聞く？」

机に片肘をつき、表情を一切崩さず即聞き返す阿部。僕が言い終わった直後にすぐ飛んできたもんだから一瞬たじろぐ。

「それは……何となく、阿部がそんなにバスケにのめり込む理由って何かな……って気になったから」

「じゃ、逆に質問するけど。上野はどうして軽音が好きなんだ？」

うわ来たよ逆質問パターン。

「それは……えっと……」

思い出せ！ 必死に思い出すんだ！ 新歓ライブの時を！

あの時の唯先輩……本当に輝いていた。普段の唯先輩を知ってる今の僕には、あの時の唯先輩はまるで別人に見える。

カッコ良かったんだ、とっても。

他の先輩達も、やっぱり皆違うように見えて。でも、今知っているいつもと同じ所もあったりしたな。多分それがホントの入部の動機かも知れない。

皆が皆、楽しく演奏してたんだ。それが僕ら観客にも伝染して、講堂はもう軽音部のものだった。

確かバンド名あったけど……。

「もしもし。上野ー。もしもし」

「……ふえ？」

どうやら僕は懐かしき2カ月前の思い出に取り込まれてたっぽい。

「で、何で好きになったんだよ？」

「ええっと……」

事柄は思い出せても、それを瞬時に他人に分かりやすく言葉にして伝えるのは難しいでしょ？

「新歓の時の演奏あったじゃん。その時、めちゃくちゃ楽しかったんだ」

だからこんな抽象的な事しか言えないんだよね。

「端的に言つとそういう事か」

「ま、そだな」

阿部はこれで理解してくれた。ふう。

突然、窓ガラスを震え上がらせるような金属の重低音が、いつもより音量5割増しで、かつ強烈なエコーをかけて鳴り響く。

「うわっ！ ……チャイムでかつ」

突然耳元で「わっ」と言われるようなものだから、驚いて体がビクツとなった。

「教職員さん、音量しっかり確認しとけよ……」

全くだ。

僕は前を向いて、これから始まる授業に備えた。

……あれ？ 何か忘れてるような……。

ま、いつか。

――――

昼休み。そろそろ制服乾いてるかなー、と準備室の方にふらーっ

と行ったら、葵と偶然出くわした。

「お、レンコン。奇遇だね」

「うん」

ただ僕はこの状況を早く脱したかった。なぜなら、今の僕はジャージで目立っているからだ。このように何か変わった事があると葵は……

「まさか、ゆっぴー先輩と同じパターン？」

絶対すぐに話のネタにする。というか、もうされた。

「その通りなんだよ。それが悪いか」

ささやかな抵抗を試みる。だけど、案の定。

「うん、カッコ悪いね」

ぐは。身から出たサビ、とはまさにこの事なんだなと悟った瞬間だった。

「でもさ。カッコ悪いからこそ、親しみやすいんだよね」

これは更なる追い討ちか、それとも……。でも、テンションが大分下がっている僕には快くは思わないセリフ。

「……それどういう意味で言っているんですか」

だからけだるそうに棒読みでこう言った。するとなぜだか葵はニコツと笑って、元氣はつらつ口調でこう言ってきた。

「あれだよ。何かさ、完璧人間って怖いじゃん。とっつきにくいというか、一緒にいてあまりに面白くないっていうか」

やや理由としては腑に落ちないけど、その理論は分かる気がする。もし阿部が超不器用じゃなかったら、やっぱり怖いし、葵の言う通り面白くない。

気付けば、僕は次の葵のセリフに期待していた。そしてすぐにそのセリフは葵の口から放たれた。

「レンコンみたいに欠点ばかり目立った方がさ、面白いじゃん。イジリがいあって」

期待したのが損だった。

「何だよ、イジリがいがあるって!」

「だってさ、面白いんだもん」

「面白いからという理由で人をバカにしてもいいのかよ!」

「ま、行き過ぎた悪口は軽犯罪になるけど」

「それを知っててやってんのかよ……」

葵の賢いは学力の方もある。けれど、“悪”賢いの方もそれ同等か、それ以上ある……。律先輩には及んでなさそうではあるけど。

「とにかく、制服に着替えるんでしょ。じゃあとつとと済ませてね。実は私も制服濡らしたから」

え……？

僕は目線を葵の顔から体に移す。葵が身にまとっている服は、黒のワンピースみたいなものに、純白のフリルエプロンを重ねた、喫茶店で見かける事もあるという衣装。

なぜ気付かなかった。葵が着ていたもの、それは……

「メイド服!？」

「気付くの遅っ!」

驚いた事に驚かれた。……いや、そうじゃなくて!

「何でメイド服なんかを学校に持ち込んでるんですかつ!？」

久しぶりの敬語ツッコミ発動。おかしいのは分かってるよ? 分かってるけど、もう幼稚園からの癖らしいから絶対に直せない。もう3年前に諦めた。

すると、葵から衝撃的返答が。
ショッキング・アンサー

「ううん。ゆっぴー先輩からすめられたんだ。これ着てみなよ、
って」

はいっ！？　じゃ、これは……

「唯先輩のものっ！？」

すると更なる衝撃的返答が。
ザ・ウルトラインパクトアンサー

「ううん。さわちゃん先生のハンドメイドだって」

ほうわあっ！？　ハンドメイドお！？

結構出来良いですよこれ！？　だったらその技術でなぜ普通の服
を作らないんですか、山中先生……。

どう、カワイイでしょ？　って僕の前で一回転する葵をボケーっ
と見つっ、色々と呆然とする僕だった。

それにしてもよく、授業受けられたよな。よく……。

7 音感！

その日の放課後。

「なかなか外れないよお……」

唯先輩はガムテープでぐるぐる巻きにされ、もはや青色と茶色のツートンカラーミイラと化したギー太を蘇らせるべく必死に格闘していた。

「やりすぎだ……」

澁先輩の言葉に激しく同意。ジト目であからさまに呆れているのは梓先輩や律先輩も同じだ。ムギ先輩と葵はなぜかにこやか。確かに唯先輩らしいっちゃ唯先輩らしいけど……。

「みんな、今日はまずぴゅあぴゅあを合わせるからな。準備しとけよー」

たまに律先輩は部長らしい行動に出る。“たまに”。

「練習するんですね！」

そついう時は決まって梓先輩の目が輝く。

「そつだ。軽音部員たるもの、いつでも演奏できるようにしないと」

「何か、りっちゃんのキャラじゃないよ」

そして確実に唯先輩からキャラじゃない発言が飛び出し……。

「一応私だって部長という自覚はあるんだぞ！」

律先輩が噛みつく。それに……

「じゃあ何で、いつもは率先してお茶してるのかなー……？」

「すみませんごめんなさい」

零先輩が脅迫して律先輩が折れる。

律先輩が部長らしい行動を見せる時は、必ずこんな感じでかえって本人にとって逆効果になる事が多い。案外、律先輩ってツイてない人物なのかも……。

ギー太の厚き青い包帯……もとい青いビニールを剥がすのに四苦八苦する唯先輩を尻目に、僕はギターを準備しようとするけど……やっぱり先輩を見捨てる訳には行かない。

「あの、僕手伝います！」

そう力になる事を願い出る方が、先輩が苦戦している様子をずっと見てるより数倍気持ち楽で、自然にいられる。

「ありがとう、連くん」

一応、唯先輩よりは運動神経は僅差で上。……腕力は下だけど。

ただ、僕がどんなに非力でも唯先輩1人分の働きは可能。結構早く剥がし終わりました。けれどもギー太を雨から身を挺して守っていた青ビニールは、無惨にバラバラのチリチリとなってしまうた。ありがとう、そしてごめんなさい。

その残骸はとりあえずササーツとホウキでひとまとめにしておいて。

「ふう…… やつと準備出来た……」

唯先輩はギー太を掛け、同じようにレフティモデルベースを掛けている澁先輩の隣にちょこんと立った。この一連の出来事を見て、澁先輩は若干呆れてるよう。僕も紺色のピックを1枚ケースから取り出して、間もなく準備を終える。

「日本の気候は、楽器にあまり優しくないですよね」

梓先輩がこちらに来た。赤いギターを掛けていて準備万端のよう。さらに金色のアルトサクスをぶら下げつつ、レフティモデルベースも肩に掛けて二刀流の葵もついてきた。

「そうですよねー。私も昔、リードケースを開けたら黒いカビがビッシリと……」

「うわうわうわあっ！」

「あ、ごめんなさい！」

そしておもむろに澁先輩を怖がらせる。律先輩とは違い、葵本人には悪気はなかったらしい。

ちなみに。サックスはリードという、葦などでできた薄い板を息で震わせて音を出す。ギターでいうと弦の部分に当たるかな。薄い葦の板という超天然素材だから、当然湿度管理を怠るとあつという間に漆黒のカビの巣窟に……。

まあ、葵が言うにはそんなにある事ではないらしいけどね。

「みー先パーイ。起きて下さいよー」

葵が呼び掛けたり目の前で手を振ったりして必死に漣先輩の蘇生を試みるのをよそに、僕はギターを肩に掛けて梓先輩達のいる方向かった。梓先輩は僕に向けてこう言った。

「ところで連くん。ネックが水分吸うと曲がっちゃって、音が狂ったりするから気を付けてね」

「そうなの？」

けど、反応したのは唯先輩。

「知らなかったんですか!？」

「うん。雨に濡れるといけないのは分かってけど、その理由までは……」

よくある事だね。やり方とか単語とかだけを知ってて、その意味を知らないって事。

「そうですか。じゃあ、唯先輩。実際に音が狂ってるかどうかを確

かめるには、オクターブチューニングするとよく分かりますよ。ほ
ら、こうやって……」

そう言う梓先輩は、ギターの弦を1つだけ鳴らし、その後弦を
押さえる指をブリッジ側……つまり弾く所に近い方にぐつとずらし
て、同じ弦の高い音を出した。なるほど、“オクターブ”の音で“
チューニング”するから“オクターブチューニング”というのか。

ちなみにオクターブというのは、『ドレミファソラシド』の低い
『ド』から高い『ド』までのような、8個高い音の事。『レ』だっ
たら1個高い、または1個低い『レ』、『ミ』だったら1個高い、
または1個低い『ミ』っていった感じ。また、その8音の差を1オ
クターブと呼ぶ事もある。あまり説明しにくいけど……。

「へえ、確かめてみよ」

「えっ？」

唯先輩チューナーは……？　と言う隙もなく、唯先輩は梓先輩と
全く同じようにオクターブチューニングをした。そして唯先輩が高
い音を弾いた時、僕は何となく音に違和感を感じた。何か、ちょっ
と低い……？

僕のレベルだとこの位しか分からない。けれども……

「あ、ホントだ。半音の半分の半分位ズレてるよ」

はいいいっ！？　僕の周囲3人も驚きの表情を隠せない。あ、遷
先輩はいつの間にか復活してました。

「チューナー使わずに分かるんですか？」

「うん」

そして梓先輩の問いに即答する唯先輩。それも至極当然のように。

「唯先輩、ちょっと借りてもいいですか？」

「いいよー」

唯先輩の音感の真偽を確かめるべく、梓先輩がチューナーをギターに差し込んで改めてオクターブチューニングする。僕と葵は横からチューナーの画面を覗き込んだ。すると、高い音を弾いた時、チューナーの画面の針は真ん中よりちょっと左側……それも、左半分の中央の目盛りを丁度指した。

つまり……

「本当だ、唯先輩の言った通り8分の1音だけズレてる……」

唯先輩の音感は、正確だったのだ。俗に言う絶対音感！？

心から唯先輩スゴいな……と思った瞬間。

「それじゃあ直して下さい！」

あれ？ 僕は思わずポカンとした。

「自分で直せよ」

「私がやると時間が掛かるんだもん」

澪先輩の呆れツツコミに少し笑いながら返す唯先輩。

「もう、教えたじゃないですか」

「えへへへ……」

更に梓先輩も。それでも唯先輩は笑ってごまかす。

「今回だけですよ」

「ありがと、あずにゃん」

結局梓先輩が折れて、チューニングをするために長椅子に座った。
『今回だけ』というセリフ、前にも聞いた事がある気がするのは気のせい……？

僕は、ふわふわとした感じで梓先輩に向けて微笑んでいる唯先輩に目を向けて、ふとこう思った。

唯先輩って、スゴいのかスゴくないのか良く分からないな……。

8 土砂降り！

律先輩の宣言通り、今日は久しぶりに目一杯練習をやった。おかげで、自分がどこをどう直せばいいか見えてきた。

それで、今楽器を片付けている最中なんだけど……。

「雨、止まねーな……」

スティックを右肩に置き、外を見ながら呟く律先輩の言う通り、今日の雨は全く止む気配を見せない。それどころか鳴り響く雨の音から、ますます勢いを増しているようにも思えた。

「風も強くなつて来たし……」

と、漣先輩。

「明日も雨だつて。天気予報で言ってたわ……」

これはムギ先輩。3人ともどこかトーンが暗い。雨の日ってなかどんよりするけれど何でだろう？ ってふと疑問に思ったけど、誰も答えられるはずないのですぐに頭から抹消する。

「今日はベース、部室に置いて帰るか」

漣先輩が本棚の方にケースにしまったベースを立て掛けようとした時。

「ひどいよ漣ちゃんっ！」

「うわあああっ!？」

耳元で思いつきりハイパーボイスで魂の叫びをぶちかます唯先輩。そのせいで澪先輩はひどく驚き後退して危うくバランスを崩しそうになる。

「っ、うっ……。何が!？」

「何するんだ!」とでも言いそうな表情で、唯先輩に顔を向ける澪先輩。しかしあいにく唯先輩はそれにひるむような人種ではない。

唯先輩はおもむろに澪先輩のベースの前に座り……

「かわいそうにエリザベス、君は捨てられちゃうんだよ……」

と。今の僕の位置からすると後頭部と背中しか見えないけれど、目に涙を浮かべているのは雰囲気から何となく分かる。

そのセリフに過剰反応を起こす人物がいた。

「す、捨てられるっ!？」

葵だ。アルトサックスを片付けていた葵は唯先輩のそば、つまりエリザベス（仮名）の前によたよたとした足取りで向かい、

「そんなぁ……みー先輩、なんてひど」

「雨に濡れるのが嫌だから置いてくれただけだ!　あと勝手に名前付けるな!」

葵のセリフを途切らせ漣先輩がおこった。別にいいんじゃないのかな、エリザベス。

「唯もギター置いてけば？」

そのやり取りを見て横から口を挟むのは律先輩。

「その方が良いですよ。巻いてきたビニール、あんなだし……」

梓先輩も賛成する。確かに机上にまとめてあるズツスタのボツロボロになったビニールをまたガムテープでぐるぐる巻きに出来たとしても、元あった防水性能には及ばないだろうな。

というか、まずその事が不可能だ。さすがにそれには唯先輩も納得せざるを得なかったようで、

「そうだよね……」

と若干寂しげに、ケースに入れたギー太をエリザベス（仮名）の隣に置いた。

「知らない人に声を掛けられても、ついていっちゃダメだよ」

「何言ってんだ……」

今呟いたのは漣先輩。そもそも知らない人がここに入ってきた時点でもう大事件ですよ！

「エリザベス、今夜はギー太と一夜を共にするんだ」

「だから名前付けるな！」

零先輩、ここは譲れないんですね。

その光景を眺めつつ、心の中でクスクス笑っていると律先輩が僕に近付き、こう言ってくれた。

「連も置いてった方がいいんじゃないのか？　いくらビニールがあってもこの雨じゃ濡れるかも知れないぞ」

「ですよ、ただのビニールじゃこの雨は防ぎ切れませんよねー…」

このどしゃ降りの中、幾らビニールを巻いたとしても心配になるな。

「梓先輩は持つて帰るんですか？」

レインコートを持っている梓先輩はどうするのか興味本位で聞いてみただけなんだけど……。

「むったん……」

はい？　僕の頭が『？』に覆い尽くされた瞬間、

「ピッタリな名前だと思う！」

「わっ！？」

突然後ろから大きな声出されるから驚いて腰が抜けた。それ以前

に僕はまいちどんな状況なのか掴めてない。

「ム、ムギ先輩！ 人の心を読まないで下さい！」

声のした方を振り返り、反論する梓先輩。けども、

「梓ちゃん、声に出してたよ？」

「へっ……？」

すっとんきょうな声を上げ、そしてみる内に梓先輩の顔が赤く染まっていく。

分かった。梓先輩はギー太的な名前を付けようとしてたのか。それで心の中で思案して……

「『むったん』なんて言ったんだ……」

「ちよつと！ い、言わないでそれ！」

――
――
――

学校を出ると、ひどい量の雨がまさにザーザーいつて地面に、そして僕らに降りかかってきていた。台風とまでは行かないけれど、風もなかなか強い。

「うわぁ、超雨降ってるし……」

律先輩の言葉に心の中で相づちを打つ。

「靴の中まで濡れますね……」

結局完全防水でギターを持って帰っている梓先輩の言葉に心の中で相づちを打つ。

「やっぱりベース置いてきて正解だったな……」

漣先輩の言葉に（以下略）

「うっ……ギィ太ぁ……」

唯先輩の言葉に（以下略）

……いや。略しちゃダメだ前言撤回。

「大丈夫ですよっぴー先輩。むったんはいないけど、エリザベスもジャッキーもアルもストライキもいるからきつと寂しくないですよ」

葵の言葉に（以下略せないけど察しが付くと思うので省略）

そもそもそれ言っちゃうと……

「葵も勝手に名前付けるなー!」

漣先輩が噛みつきます。

「そだね。みんながいるもんね」

唯先輩も元気を取り戻したよう。しかし、気になる事が。

「葵。ジャッキーとアルとストライキって一体誰の？」

そう聞くと葵は笑顔で答えた。

「ジャッキーは私のベース。で、アルはサックスだよ」

アルはアルトサックスだから、というのは分かる。ジャッキーは……また今度聞こう。

ということは……

「ストライキは？」

「そりゃ、レンコンのギターでしょ」

「おいちよつと待て」

今、澪先輩の気持ちがなんとなく分かった気がした。

「なんで僕のギターが労働者が行う抗議活動の最後の切り札と同じ名前を付けられなければいけないんですか！」

生死を懸けてはいないけど一生懸命な反論。でも葵はあっけらかんとして、

「だってストラトでしょ？ だからストライキ」

「もっとマシなのあるでしょ!？」

「じゃあ……トラ？」

うん、マシになった。マシにはなったけどなんか違和感。

「他に!」

「あとは自分で考えて!」

「だよなー……」

自分の楽器ぐらい自分で名付けないと。

「とりあえずストライキって私は呼ぶからね」

「だから止めてくれ」

「それじゃあみんな～また明日ね～」

唯先輩の声でふと周りを見ると、いつの間にか分かれ道に来ていた。ここで律先輩と澪先輩、また葵とも別れる。

「失礼します」

「じゃあね」

梓先輩は小さくお辞儀をし、ムギ先輩もその後が続く。

「あ……じゃ、僕も失礼します！」

僕も慌てて軽く礼をして、3人の先輩のあとを追う。

「ああ」

「気を付けてな」

「さようならーっ！」

澪先輩は控えめ、律先輩は男子っぽく、葵は元気いっぱい別れを告げた。

「ギー太、やっぱり心配だよぉ……」

ふらふらと横断歩道を渡る唯先輩。傘が意味を成してない。というか危ない。

「待って！ 唯ちゃん！」

「唯先輩！」

その後ろから走って唯先輩に追い付こうとするムギ先輩、梓先輩。僕も……

「先輩！ 待って下さいようわあああっ！？」

何で……

「大丈夫!？」」

何で……

「先行って下さいもう青がチカチカしてますから!」

何で……

「本当だ!」

「唯先輩早く!」

「ギー太あ……」

「唯先輩――!」

僕はツイてないの？

9 エリザベス & amp・ギー太！

翌日。遅刻というほどではないけれどいつもより遥かに遅く起きると、外は相変わらずの雨の音。

昨日の予報は当たり、雨が昨日ほどではないけれど降っている。そもそも昨日の雨は凄まじいものだったので、昨日と比較しちゃダメだと思う。普通の感覚で言えば今日も結構な量降っているからだ。

おかげさまで朝から靴が浸水状態。それに学校に来たとき、濡れた靴下を履き替えようとしたらバランスを崩して濡れた廊下の滑り易さと相まって派手に転倒し腰の骨を強打した。同じクラスの女子に笑われた。ちくしょう。

それでも僕は腰に走る鈍い痛みに耐えつつ準備室に向かった。何とか準備室の前まで行くと、女子生徒3人が『いかにも怪しい者ですが』と背中では主張しながら準備室を覗いていた。

3人とも見覚えのある後ろ姿。

一体何事……？ と思いつつ、僕は声を掛けてみた。

「あの……何やってるんですか？」

するとこういう時良く僕が陥る驚愕の声や態度さえも見せずに、黄色いカチューシャを着けた女子生徒……律先輩が口元に右手人差し指を1本立てた状態で勢い良く振り返ってきた。

（しつ。連、静かにしろ。濡にバレるぞ）

……久々の軍人スキル発動？ そんな事を頭の片隅に思いつつ、僕はどうしてですか、と理由を聞いてみる。

（見れば分かるって）

という事で僕は漣先輩観察団（命名：僕）の仲間入りした訳です。唯先輩が乗っかるのはまだしも、まさかムギ先輩もウキウキした感じで入団してたのにはちょっと意外だった。

とか言ってる自分が入団したのが一番の意外では？

ドアとドアの隙間からわずかに見える漣先輩は、エリザベス（仮名）に手を伸ばそうとしてビクツと止まった。同時に危険を察知した僕の身にも震えが無意識的に走る。

そして慌てて伝える。

（先輩、早速バレたんじゃ……！）

でも律先輩は至って平気顔で。

（心配するなつて。多分昨日私が言った事が脳裏にフラッシュバックしたんだろ）

（そうかもね。漣ちゃん、何か変に焦ってるよ）

唯先輩の言う通り、漣先輩の顔は何かに怯えているようで、体は小さく震えているよう。

『ケースを開けたらカビだらけ』

これだな。うん。

その後意を決したようにブルンと首を大きく振って、エリザベス（仮名）のケースのチャックを開けた。

その澁先輩の様子を見るなり、ムギ先輩はコソツと言った。

（あ。ベース、無事みたいだったわよ）

澁先輩は安堵した表情でいる。とりあえず良かった良かった……
って勝手に終わらないで下さいよ僕。

まだ続きがあるんだよね？

僕らは再び澁先輩を凝視する。端から見れば僕らは怪しい集団に
しか思われない気がするけれども、それを気にすると他のも気にし
すぎて何も思いきった行動出来なくなるから……。

レッツ凝視。

澁先輩はエリザベス（仮名）をケースから優しく取り出して、し
ばらくじつと見つめる。既に約1人こちら側ではクスクス笑ってる
んですけど。

そして……。

「エリザベスっ！」

澪先輩はエリザベス（仮名↓正式ニックネーム）に抱きついてネツクに頬擦りした。

唯先輩の成分が感染したな……。

こちら側ではイメージとのギャップにこらえきれなくなったのか、先輩3人がクスクス笑っている。僕も先輩達につられて笑ってしまふ。

絶対バレるなこりゃ……。

その予想は当たり、澪先輩が頬擦りをピタリと止めた。そして澪先輩は素早くこちらの方に振り向いた。

すると、3人の先輩達はどうしたか。なんと、逆に目から怪光線……というか『見ちゃいましたよ、うししし』という目線を放って反撃したんだ。

すると澪先輩はどんな反応を見せるか。

「うわあああっ!」

顔を真っ赤にし、手をどたばたさせて帳消しにしようと大声を出し。

はっきり言って、どれも意味のない行動です。

「エリザベスうゝ」

「やめろおおー!」

調子に乗った律先輩の声真似発動。完全に漣先輩の声色で、かつ多少……ではなくかなり色々飾りを足している感じで。

それでまた漣先輩の悲鳴が朝の学校に響き渡る……。

チラッと律先輩を見た。もはや精悍な軍人の顔つきではなく邪なオーラ全開の悪人の顔つきになっていた。うわぁ……。

「よつと」

そんな中、唯先輩が現場の音楽室に突入した。いつもの不安定なリズムの足取りで。チラッと見えた横顔は至って純粹な優しい顔で、何かほつとした。

唯先輩は絶賛湯気放出中の漣先輩……

「ゆ、唯……？」

……の横を通り。

「ギー太あゝ！ 会いたかったよあゝ！」

やっぱり、唯先輩は唯先輩だ。僕がどんなにギターに熱心でも、どんなにギターを大事にしても、唯先輩にはかなわないな。

「良かったね、唯ちゃん」

ムギ先輩が優しく微笑みを向けた。律先輩も、呆れてるような、でも微笑ましく思っているような、そんな表情をした。きっと僕も

同じような顔をしてるんだろう。

ただ。

「連、ギター見なくていいのか？」

一人はギターと感動の再会中、もう一人はさっき自分の事だと思
い反応してしまったため絶賛湯気放出中（5割増し）であるこの空
間には……

「……また後でにします」

……非常に入りづらかった。

9 エリザベス & a m p ギー太！（後書き）

やっと5話完結……。

次回番外編（挟めたら）挟んで、連の初舞台！！
乞うご期待です。

阿部のある一日&1t;前編> ; (前書き)

これで主要オリキャラ3人全ての番外編が出来ました。よっしゃ。

阿部のある一日&let;前編>

それは、6月の金曜日の話。

残り4秒。

俺は味方からボールを受け相手のディフェンス一人をさっとかわし、シュートコースを作る。

残り1秒。

俺はシュート体制を一瞬で整える。そして狙いを付けてボールを放り込む。

ボールが手を離れた直後、時間を知らせるブザーが鳴った。俺の放ったボールはバックボードとリングの間の15cmの隙間にはまって弾み、バスケットには入らずに落ちた。

誰も声を発さなかった。ボールが床に当たって弾む音だけが体育館中に空しく響き渡る。

絶対外す事のないボールを、絶対外してはならないボールを、俺は外してしまったのだ。公式戦ではなく3on3の紅白戦だったのがせめての救いだったが、それでも今起こった事は俺のプライドをへし折るには十分過ぎだった。

なぜ外れた。一体なぜ……。

言い訳で片付く事もある。運がただ悪かっただけかも知れない。が、俺はそういう物で片付けるのは自分のポリシーとして許せなかった。

自分の基礎スキルが、まだまだ甘いつて事が……。

その日の練習はどことなく重苦しい雰囲気の中終了した。仲間に心配そうな目を向けられたが、俺はそれらを見て見ぬふりをして雨降る夜の道を一人静かに歩いて帰った。

俺は阿部空^{あへくう}。共学化に伴って今年創部されたばかりの桜が丘高等学校男子バスケットボール部に入っている。部に入った、と言うよりは入れられたと言った方がニュアンス的には近いが。

でもあの時に拉致されてなかったら今の俺は確実にいないな。俺はもう中学で全国制覇したのでそれで満足していたんだが、どうやらそれは満足した『つもり』らしく、入部させられて初めて自分がまだ満足していない、更に上を極めたいという思いが芽生えたんだろうか。そこら辺は良く分からないが、とにかく自分がバスケット部に入れられた事で色んな意味で充実してるのは間違いないかった。

今日のような事がある事も、充実の一つだろう。あのミスをどう取り返すか……そう悩む事もたまにはいい。

無数の雨粒が傘にぶつかる。断続的に雨音が鳴る。地面に打ち付けられ跳ね返った生暖かい雨粒の一部が足元を濡らす。

生憎だ。今日も雨は降り止む事はなさそうだ。あの事と相まって鬱屈な気持ちになる。ここが街灯がポツポツと存在するだけの薄暗

く静かな住宅街という事もあるのだろうか。

取り敢えずとっとと駅を目指すか。俺が足を早めようとした刹那の事だった。

上着のポケットの中で携帯が震えた。滅多にかかってくる事のない電話だ。住宅街であるため雨をしのげそうな場所は見当たらず、仕方なく俺は立ち止まり細かく震え続ける携帯を開く。

「もしもし」

「阿部くん？ 今どこにいるの？」

声を聞くに只事ではなさそうだ。

「まだ桜ヶ丘です」

「だったら今すぐ私の家に来て。詳しい事は後で話すわ。今すぐよ」

そう早口で告げられ、回線が切れた。

どうやら俺はとんでもない事に巻き込まれそうだ……というかも巻き込まれているのかもな。

取り敢えず俺は傘を差したまま彼女の家に向かって走った。ローファーを履いているお陰で走りづらい上に、雨は更に勢いを増し容赦なく打ち付け全身を濡らす。一步一步地面を踏むごとに水が跳ね靴の中にも浸水してくる。俺はそんな激しい雨の中を走る……胸で騒ぐ嫌な予感だけを頼りに。

彼女の家に着いた時には、既に人の家に上げられるような状態ではなかった。

簡潔に言えば全身びしょ濡れ状態だ。傘を差していた意味はなかったのではないか、という程の。

俺は屋根の下に入り傘を畳み、カメラ付きの新しいインターホンのチャイムを押す。はい、と応対してくれたのは彼女の母親だった。自分の名字を伝えると、しばらくした後鍵が開く音が2つした。

「阿部くん？」

ドアを開けてくれたのは赤いメガネを掛け、ショートヘアが特徴の先輩、真鍋さんだった。俺の顔を見て、心底安心した表情を見せている。

「こんばんは」

俺は首を前に傾ける程度の礼をした。

「こんばんは。良かった、無事で。取り敢えずタオル持ってくるから待ってて」

一旦ドアが閉められる。俺は靴を下ろしつつ、さっきの真鍋さんの言葉を頭の中で反芻した。『良かった、無事で』とは……？

降りしきる土砂降りと言えるような雨の中、嫌な予感は続く。恐らく俺の家周辺で異常が起こったのだらう。それも、俺が家に近付いてはならない程の重大な事だ。俺が家に帰る途中に真鍋さんに急

いで来いと言われたんだ、そう仮定出来る。

再びドアが開く。ドアは全開状態で固定された。

「はい、バスタオル」

「ありがとうございます」

俺は渡されたバスタオルで全身を拭いた。ただそれで拭いても制服は当然濡れたままで、その状態ではお邪魔出来るはずがない。しかしそこはさすが真鍋さんと言ったところか、着替えまで用意してくれた。が、俺にはそんなに使ってないジャージがあったのでそれに着替えさせてもらった。……こんな事は中3の6月以来だったから、なるべく床を濡らさないようにするのに大分神経を使ってたがり遅くなってしまった上に、結局床を濡らしてしまったが。

着替えが終わると、俺は居間の方に向かった。そこには真鍋さんとその母親がテーブルの前に座っていた。真鍋さんは俺を真鍋さん達に对面させるように座らせると、早速本題へと入った。

「俺をここに呼ぶなんて……何かあったんですか？」

そう聞くと、真鍋さんはこう返す。

「阿部くんってけやき台に住んでるんだよね？」

「はい。まあ、そうですね……」

何故それを聞いたのかは想像が付く。恐らくその周辺で……。

「じゃ、これを見て」

真鍋さんはテレビのリモコンを手を取った。大型液晶のテレビはほんの僅かな音を立て、俺がここに呼ばれた理由を映し出した。

良く見慣れたけやき台の駅。それを取り囲むのはおびただしい数の警官隊。時々上がる怒声。それをいちいち伝える男性リポーター。ニュースの見出しには『けやき台駅で立てこもり 男女3人が人質に』とあった。

つまり、俺は帰れないという訳である。それにしても、身近にもそういう物騒な奴がいたなんてな……。

「……そういう訳なの。私が勉強してる最中にお母さんが大声上げるから、気になって下に降りてきたら速報でやってて。心配だから阿部くんに急いで連絡したのよ」

母親は照れ笑いしている。褒めてないからそれ。

とにかく、帰れないという事は俺はどうするんだ。

もしかしたら……泊まれってか？

「だから、今日はうちで泊まってるって」

やっぱりか真鍋母。

「部屋一個しかないけど、阿部くんならそういう事きつとしないだろうから」

おいちよつと待て真鍋母よ。俺が幾ら理性ある人間だからと言ってそれは抵抗ある。ここにあるじゃないか。俺が寝るスペースなら充分に……。

「ちよつとお母さん。幾ら何でもそれは……」

そりや真鍋さんも抵抗あるだろ。というか初耳だったのかよ。

「居間でお父さんとならいいよ。イビキうるさいし寝相も悪くて寝れたもんじゃないけれど……」

どうするこの究極の二者択一。睡眠を犠牲にするか、それとも羞恥心を犠牲にするか……。

「それか私とでもいいよ」

選択肢が増えた。この選択肢は何かイマイチ安全性が無さそうだ……！

俺が錯綜し合う考えに苦悶していると、意を決したように真鍋さんが言った。

「じゃあ分かったわ。……阿部くんは私の部屋で寝て。部活で疲れてるだろうし、しっかり寝ないと体持たないわよ」

という事で、夕飯をご馳走になり、風呂にも入らせてもらい（言うまでもなく一人で）、只今真鍋さんの部屋。

それにしてもさすがは生徒会長と言ったところか。部屋はかなり

きつちりと整理されている上に綺麗だ。俺もこのような部屋にしたものだ。どうやっても上手く行かないが……。

宿題や予習を真鍋さんの分かりやすいアドバイスを受けつつ済ませ、自分の布団を敷くついでにその事を聞いてみる事にした。

「どうしたら、そんなに部屋綺麗になるんですか？」

「そうね……まずは不要な物を捨てる事」

「やってます。でも……」

「だったら、置く場所を決めるとか」

「それもやってます。でもどうしても上手く行かないんです」

「……私には、もう分からないわ」

真鍋さんはクスツと笑った。……何がおかしいんだ。

とにかく俺の疑問は解決せず、流れで就寝となった。俺は拝借した床に敷いた布団で、真鍋さんは自分のベッドで。真鍋さんはその逆を提案したがこつちが申し訳ない上に家でもいつも床で寝てるので丁重にお断りした。

「電気消すね」

「はい」

カチツという音と同時に電気が消える。おやすみなさい、とは一

度言ったもののなかなか寝付けずもない。

当然だ。幾ら真鍋さんであって別々の布団で寝ているとは言え、同年代の異性と同じ部屋で寝ているのだから。それに俺自身外泊も慣れてない。

雨が土砂降りなのが部屋にいても分かる。どのみち、明日も雨が降りそうだ。何か同じ事を今日思った気がするな……。

必死で、真鍋さんから意識を逸らそうとしている俺。ただそうすればする程余計に気になっていく。

「……阿部くん」

雨の音だけが静かに響く暗闇に、真鍋さんの声が落とされた。俺は元々冴え気味だった目が急激に冴えた気がした。

「やっぱり、真鍋さんですか？」

「ええ。眠れないわ」

ぶつりと途切れる会話。互いの顔は見えずともどこか気まずい。話の糸口を探すが上手く見つからない。ただ雨の音が聞こえるのみ。

阿部のある一日&1t:前編> ; (後書き)

字数制限が怖いので、後編に続きます。

阿部のある一日&1t;後編>

「……ねえ」

不意に真鍋さんの声がした。

「何ですか？」

「あの……漣のファンクラブあるの知ってる？」

ああ、あれの事が。

「知ってますよ。1年の間でもかなり有名ですから」

「そう……」

真鍋さんが呆れているのは声の調子で分かる。俺が会員だとは口が裂けても言えない。なりたくてなったんじゃない、クラスの女子に勝手に入れられたんだ……。

「それで私、ファンクラブの為に何かしたいんだけど……何か良い案とかある？」

「良い案……ですか」

真鍋さんがファンクラブ会長だと言う事も、それを渋々引き受けた事も俺は知っている。それなのに真鍋さんはファンクラブに対しても真剣である事に俺は尊敬すると共に些かの疑問も抱いていた。

「例えば、限定ライブとか握手会とか」

「それ完璧にアイドルじゃないですか」

クスッ、と笑う声がした。ほぼ無意識に出たツツコミだったが。

「それもそうね。どちらにしろ軽音部の協力がないと、あと漣が頑張ってくれないとダメだわ」

「ですね」

軽音部か……軽音部と言えば。

「そうだ。お茶会を開くなんてのはどうですか？」

「いいわね、それ。交渉してみるわ」

アイデア採用。本当に実現可能かどうかは置いて。

「ありがとう」

「どういたしまして」

それで会話は止まったように思えた。が、やっぱり寝付けない。互いの姿は見えずとも、存在は互いに分かってる。だからなのか？

それとも、俺はまだ何か話し足りないのだろうか？

その思考が思い浮かんだ時、今日の部活の出来事が勝手に再生された。

鳴り響くブザー。ボールがバックボードとリングにぶつかる音。そして、床に落ちるボール。たったこれだけの音が、俺を再び苦しめ始めた。

畜生、もうこの事は吹っ切れたはずだったのに……！

と、その時。俺は気付く。

誰かに、この事を俺は打ち明けたいのかと。上野だったら微妙だけど、真鍋さんなら俺はスムーズに打ち明けられる。俺でもおかしいと思う。同性の友人より異性の友人の方が打ち明けるのに抵抗がないなんて。

「あの、俺真鍋さんに聞いて貰いたい事があるんですけど」

しかし返事は返って来ない。ちょっと気になって俺は真鍋さんのベッドに行った。電気は点いていなくても完全な暗闇ではないので、辿り着くのは容易だった。

そこには優しい寝息を立てて眠る真鍋さんの顔があった。もちろんメガネは掛けていない。あまり見た事のない顔に、一瞬だけ、可愛いなんて俺らしからぬ思いを抱いてしまった。

それを振り払い、俺は自分の寢床に戻る。するとどうしてだろう、別に打ち明けた訳でもないのに気持ちが悪くなくなった。今まで悩んで来た事が馬鹿らしく思えて来た。そんな小さい事などあまり気にすんな、また同じ過ちを繰り返さなけりや良いという事なのだろうか。

さつきまで寝付けなかったのが嘘のように、俺は布団に入った瞬間に眠りについた。

羨ましい？ 滅相もない。

俺と真鍋さんはただの友人であって、それ以上踏み込んだ関係にはない。将来に於いても、そうはならないだろう。

つまり昨日は家に帰れなかったから友人の家に泊めて貰っただけという事。ただそれだけの事である。

……とは言いつつも同年代の異性と泊まったのは紛れもない事実ではあるが。

故にそれをいつ目撃されていたか全く知らないが、翌日の部活では散々からかわれまくった。男子のみならず女子の先輩まで絡んで来るんだから大変だ。特に女子はこの類の話になるとしつこくまとわりついてくる。その上相手が先輩であるためやりにくい事極まりない。

もちろん俺は強硬姿勢で全否定してやった。ある意味、今までで一番疲れた部活だった。ただ……

昨日の件についてはもう誰一人、気にする奴はいなかった。自分でも気にならなかった。それどころかパフォーマンスについてはいつも通り以上の絶好調であった。

部活はいつものように丸一日練習する。俺の着替えに関しては、

部室ロッカーに練習着があったので問題なかった。

12時になって女子が帰った後も、普通に6時間位はやる。そうでもない体力は付かない。控えないしな、普通の部のスタミナより大分付けておかないと対等に戦う事が出来ない。今日は6時までの活動だった。疲労を考慮してくれているのだろうか。とすると、ありがたい事だ。

練習終了後、昨日よりは小降りになった雨の中をいつものように1人で歩く。只今、大通りの辺だ。

ちなみにけやき台駅の立てこもりは深夜に逮捕された。人質3人に怪我はなかったのでひとまず安心という所か。よくやった警察。

今日は寄り道する、と脳に行動がインプットされている。どこにか？

それは、ここだ。

元々人がごった返すような店のジャンルではないこの店だが、店舗の敷地面積は広く品揃えも豊富である。大体の確率で欲しいものが見つかる。

店内には、店員がレジの前にいるだけで他には誰もいなかった。

俺は目当ての物を入手すると、さっさとその店を後にした。

さてと、帰ったら久々にやるか。最近、忙しくて出来なかったんだよな。

俺は小雨の中を歩き出す。店に入る前よりも、雨が止んで来てい

るように思えた。

明日はきっと晴れる。根拠はないがな。

阿部のある一日&1t;後編> ; (後書き)

阿部と和は何故知り合いなのか？ 阿部が買ったあるものとは？
いずれにせよ、それは後々明らかになります。

1 超能力！

今日は久々に晴れた。ここ最近雨がずっと続いていたので待望の晴れだ。これであつやく僕は不運から抜け出せる！

僕の思つた通り、朝の登校時も休み時間も授業中も全てが平穩に進んだ。特に朝何もなく普通に行けるなんて……感謝します神様。

ただ、1つだけ氣になつた事が。昼休み中に、とある女子グループの会話の中で『ミオ先輩』というワードが頻出してた。当然僕は氣にせずにはいられない。軽音部の澪先輩？ いや、でも新歓の時にちよつと自己紹介しただけで名前と容姿を覚えている可能性は低い……とすれば同じ名前の別の先輩つばいよな……。

そのクラスの喧騒の半分を占めていた女子グループは、机に突つ伏して昼寝してた阿部を凄まじい勢いで強制連行しどこかへ行つてしまった。連行のされ方を見る限り阿部が羨ましいとは到底思えなかつた。かわいそうに。

その日の放課後、山中先生も来てお茶。僕はムギ先輩の手伝いで紅茶を淹れる。最近、僕がお茶を淹れる事がやや多くなつて来た。もちろんムギ先輩の方がまだ淹れ方が上手いけど。

で、話題は澪先輩のある悩みについて。

「ふう〜ん。誰かの視線を感じる、ねえ……」

と言いつつお茶をすする山中先生。教職員の立場からしてそれは

大丈夫なのかと心配になるけど、そこをツッコんだらそれこそ世界の終わりが見える気がする。

でも、今回は悩みを聞いてくれているから別にOKだね。

「ま、私はいつも見られまくっているからね」

前言撤回。真面目に聞いてないよ……。

「さわちゃん外見『は』いいからなあ」

「『は』って何よ『は』って」

律先輩が茶々を入れる。ちなみに葵は唯先輩と一緒に前かがみになってトンちゃんをじっと観察中。時々何かコソコソ話しているようにも見える。

「もしかして、漣を追っかけてる犯人ってさわちゃんじゃないの？」

「やーねえ、私だったら見るだけじゃ済まないわよ」

「ですよね」

そう言っただけを叩いて爆笑するお調子者2人。漣先輩がうな垂れて落ち込んで……頭に紫の縦線3本浮かんでるのがはっきり見える。

うーん……誰なんだろう？ 漣先輩は外見スゴくい方だと思うから、そういうのいてもおかしくはない。でも、誰だと言われると……。

「みー先輩」

トンちゃんを観察してた葵が澪先輩の名前を呼んだ。いかにも自信満々な顔。

「私とゆっぴー先輩で、犯人を推理してみました」

おお、と若干のどよめき。

「で、犯人は誰なんだ？」

澪先輩が身を乗り出して聞く。葵はゆっぴー先輩言っただけでさ、と言つてゆっぴーせ……おっと、唯先輩に向けて両手をヒラヒラさせた。

「犯人は……」

あごに右手の親指と人差し指を当てる思考ポーズのまま振り向く唯先輩。そして……。

「トンちゃんだよ」

超ドヤ顔でこう言つてのけた。澪先輩が唯に期待した私がバカだった、と小さな声で漏らすのが聞こえた。

それにも構わず、唯先輩は続ける。

「ほら、澪ちゃん、トンちゃんのこと怖がってあんまり構ってあげてないから、トンちゃん……澪ちゃんの背中に貼り付いちゃったん

だよ！」

「怖い怖い怖いっ！」

澪先輩は背中をキュッキュッキュ掻いた。僕は自分の背中にトンちゃんが貼り付いているのを想像してみたけど……怖い怖い怖い！

「連くんまで背中掻いてる……」

「どうせ想像しちゃったんじゃない？」

ムギ先輩と山中先生が何か言ってたので、僕は我に返る。梓先輩がムスツとしている……。爆発寸ぜ

「ちょっと皆さんもつと真面目に心配して下さい！ ストーカーかも知れないですよ……！」

……いや、もう爆発してしまった。

「梓……」

1つの光を見つけたように、澪先輩の表情が明るくなった。いや、僕も真面目に考えてましたよ？ ただ証拠が全然ないから何も言えなかっただけで……。

「なるほど……」

そう呟いたのは、右手を口元に当てて思案顔をしているムギ先輩。みんなの視線が一斉にムギ先輩の方に向く。

「謎は全て解けました。犯人は……」

すっと立ち上がり、周囲を見渡す。そして！

「あ、あなたです！！」

ムギ先輩が指差した先には！

……誰もいなかった。あの、どうリアクションすればいいんですか……？

「……ごめんなさい、私、一度これやってみたかったの」

パチンと手を合わせてこの空気をナイスカバーしたムギ先輩。共感出来なくもないな、それ……。

「でも、謎が解けたって言うのはホント」

スゴい。何も証拠がないのに……！

「澪ちゃん。今日の朝ごはんは焼きそばパンだったんじゃない？」

ムギ先輩はサラッと言った。

「えっ？ た、確かに……今朝は寝坊して朝ごはんをゆっくり食べている時間なかったから……」

当たった。スゴすぎる。

「その焼きそばパン、20%引きだったでしょ？」

いくらムギ先輩とはいえさすがにそこまでは……。

「な、何でそこまで分かるんだ？」

当たったあつ！？ ムギ先輩超能力でも持ってるんですか！？
漣先輩も若干引いている。……どうして律先輩は笑っているんだろ。

「それは私が超能力者……」

「「ええっ！？」」

僕は漣先輩、梓先輩と一緒に驚いた。他のみんなは驚いていないような気がするけど……？

「……じゃなくて」

まんまとだまされた。将来気をつけないと……。

ムギ先輩は、うふふふふ、と少し笑いながら、ちよつと怯えているようにも見える漣先輩の隣の、空いている席に座った。

何をするかと思えば、ムギ先輩はおもむろに漣先輩の長いサラサラした黒髪に手を伸ばした。

「え、ちよつとムギ何……」

そして、ピリツという小気味いい音が鳴ったと同時に、ムギ先輩の手は離れた。何か持つてる……？

「ほら、これ」

ムギ先輩がその手に取った謎の物体を漑先輩に見せると、

「ああっ！」

いかにもやってしまった、恥ずかしいというリアクションを見せた。他のみんなも笑ってたり、呆れてたり、一安心したりした表情を見せている。僕は梓先輩の、本人はよく邪魔に思わないと思う程長いツインテールに邪魔されてあまり見えない。

だから、僕だけこの時表情が「？」満載だった。

「なるほど、一日中髪にくつつけていたのね」

山中先生、何をくつつけていたんですか。

「それでみんな見てたのか……」

それってどれなんですか漑先輩！

僕が混乱していると廊下の方から何か声が聞こえてきた。

「あなた達、何覗いてるの？」

落ち着いた、しかしどこか威厳のあるような声。僕達は一斉にドアの方に向いた。梓先輩！ 髪の毛が目に入った……！

「う、うわああっ！」

ドアが開くと同時に何か倒れる音が2つしたっ！？ 何があつたんだ！？ だから梓先輩見えない……！ 目が痛い……！ ちよつと萎わざわ僕の前に立たないで僕の方が背低いから何も見えない……！

ただいま、何がどうなっているか全く分からない状況です。頭混乱してが軽くショートしそうです。うわ、だから髪が目……！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0182u/>

桜高軽音部と僕の1年

2011年12月3日20時59分発行